
とある科学の風力使い（エアロシューター）

花月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の風力使い（エアロシューター）

【Nコード】

N5513K

【作者名】

花月十夜

【あらすじ】

記憶をなくした少年と、とある少女の物語。

少年は記憶を思い出せるのか！？

恋愛とドタバダ系です……

ぱっつあんさんの作品「とある悪魔の絶対能力^{パーフェクトスキル}」とコラボしてま
す。

題名を「魔術と科学と学園都市」から変更しました。

続編書いてます。そちらも良かったら読んでみてください。

第1話

頭が痛い。それに、誰かの声が聞こえる。

「あの、大丈夫ですか?？」

風夜は、目をあけることなく意識が無くなっていった。数日後、風夜が意識を取り戻し目を開いた。そこには、見知らぬ天井が広がっていた。

え???ここ、どこ??

風夜が、考えていると扉をノックし入ってくる人がいた。顔を見るとカエルの様な顔をした先生だった。

「いやあ、君。よく死ななかつたね!？」

「え?どういう意味ですか?」

「君、覚えてないのかい??」

「はい。」

「マンションのベランダから花瓶が落ちてきて、君の頭に直撃して意識を無くして、ここに運ばれてきたんだよ。で、名前と中学生か高校生かは覚えているかい??」

「名前・・・・・・・・。あれ、思い出せない!!!」

「やっぱり……。君の名前は、朝比奈あさひな 風夜ふうやだよ。」

「朝比奈 風夜ですか。」

「そうだよ。ま、話してる感じ。数日後には、退院できそうだね！
お大事に、風夜くん。」

「あ、はい。ありがとうございます。先生。」

数日後。

退院して出て行くと白井と初春がいた。

「やっと、出てきましたわね……」

「大丈夫ですか??」

「君たちは??」

「あんたの第一発見者ですわよ！」

「それと、あなたを寮まで案内してほしいと、先生に頼まして……」

「そうですか……。お願いします。」

こうして、風夜は初春と白井に寮まで案内してもらったため歩き出した。その途中で、風夜の話やどの学校に通っていたのかわからないと言ったので、初春と白井の勤務している第一七七支部によって調べることになり、支部に向かった。

歩くこと、数分、第一七七支部に来た。2人に連れられて、中に入

った風夜を待っていたのは、固法 美偉であつた。

「（胸のデカイ姉さんだなあ・・・）」

風夜が、固法の胸をジロジロ見ていると、脇腹を思い切り殴られた。

「ぐふ・・・」

「何をジロジロ見てるんですの！！」

脇腹を押さえながら、しゃがみこむ風夜を見ながら白井は言った。
それを見ながら、初春は奥にあるパソコンに向かい座る。

「それで、あなたの名前は??」

固法が話しかけてきた。風夜は、脇腹を殴ってきた白井に文句を言いたい、でも、堪えながら答えた。

「僕の名前は 朝比奈 風夜 らしいです。記憶がないので、そこまでしかわかりません。」

「そうです。まあ、記憶喪失と聞いてましたから、仕方ありませんね。それじゃ、初春、検索してくれます??」

「はいはい。朝比奈 風夜 と・・・。はい。出ましたよお
~~~~」

「どれどれ・・・。能力は 風力使い（エアロシューター）レベル3。カマイタチと小規模の竜巻を決められた範囲内におこせる。  
それと、第7学区の高校1年生ですか・・・」

それを聞いた、風夜は、カマイタチと竜巻をおこせるのかあと思っていた。すると、初春と佐天は目を合わせながら、小声で話し出した。

「佐天さん、記憶喪失になった人ですかね？」

「そうかもしれないね！！初春！！」

初春と佐天は、盛り上がっている。それを見た風夜は、なんだ、この2人は？と不思議な目で見ながら聞く。

「あゝゝ。帰らしていただきたいんですけど？？」

「そうね、病み上がりの子を長いさせたら、いけないわね。初春、お願いね。」

「え？？白井さんは来ないんですか？？」

「わたくしは、お姉さまとデートですよ！！」

「またですか……。わかりました。朝比奈さん。行きましょ。」

初春が、風夜を連れて行こうと出口に向かう途中で、佐天の声が聞こえた。

「私も行く！！初春だけじゃ、心配だから！！」

「佐天さん。それ、どういう意味ですかあ？」

「気にしなあい、気にしなあい。」

佐天は、そう言いながら、初春と風夜の手を引つ張りながら歩き出した。そして、3人が外に出ると、夕方になっていた。

「朝比奈さん、こっちですよ。」

「あ、はい。」

そして、風夜は、初春と佐天に連れられ、自分の住んでいるという寮に連れて行ってもらう事にした。

## 第2話

今、3人は、とある公園の中を歩いている。そこで、風夜は2人に話しかけた。

「あの……。能力ってどうやったら、使えるんですか？」

それを聞いた2人は考えだした。

「どうやったら、使えるかって聞かれても……」

「う…………ん。腕振ったり、指パッチンとかしてみたらいいじゃないですかあ？」

それを聞いた、風夜は、腕を振ってみて、指パッチンをしてみる事にした。

「ちょっと、やってみますねえ！！ え……と……」

「私は、初春 飾利です。隣に居るのが……」

「佐天 涙子でえ……す！！」

2人の名前を聞いたあと、風夜は腕を振ってみたが何もおきない。

「何も、おきないですね……。次は、指パッチンをやってみよう！！ それ！！（パッチン）」

風夜が、指パッチンをした、すると、公園内に突風が吹き荒れた。すると、初春と佐天のスカートが捲れ上がった。

「え!!??」

「きゃ!!」

初春のパンツは青と白のシマパン、佐天は、中学生とは思えないパンツだった。2人は、あわててスカートを下におろした。

「何するんですか!!??朝比奈さん!!」

「あゝゝ、ビックリした!!」

「ゴメンゴメン。2人とも。まさか、突風が吹くとは思わなかった。」

風夜は、初春と佐天に誤るが、初春が赤面しながら近づいてきた。それを見た風夜は、ドキツとしながら、初春を見た。

「（顔を赤くした、初春って可愛いな・・・）」

風夜が、そう思いながら初春を見ていると、佐天がニヤアとしながら聞いてきた。

「朝比奈さん??もしかして、初春の・・・」

「え?佐天さんでしたけ?? 急になんですか??」

「いやあゝゝ、朝比奈さんの顔に「初春、可愛いなあゝゝ」って書いてる気がしたもんで!!」

「うう・・・（こいつは、エスパーか！！？?）」

「当たった！！良かったねえ、初春！！彼氏候補ができたじゃん！！」

「さ、佐天さん！！」

3人は、いろんな会話をしながら、風夜の部屋のある寮まで来た。

「朝比奈さん、ここですよ！！」

初春はそう言うと、さっそうと中に入っていく。すると、目の前から、髪がツンツンした少年が、ダルそうに歩いてくる。少年は、風夜の姿を見るなり、手を振ってきた。

「風夜じゃないかあ！！最近、学校に来ないし部屋にも居ないから、心配したんだぞ！！」

「え？？？？」

「（ガク）おいおい。俺だよ！！同じクラス＆隣の部屋＆親友の上条 当麻だよ！！」

「上条 当麻！？」

「そっだよ！！」

当麻は、一生懸命話しているが、風夜は、よくわかっていない。そこに、初春が当麻に説明をした。

「あのですねえ。朝比奈さんは記憶喪失なのかもしれないですよ。

」

当麻は、記憶喪失だと聞いたとたん、ため息をついた。

「はあああ、（隣、同士で記憶がなくなるって、どっいう事だよ・・）話はわかりました。部屋には、俺が連れて行きます。」

それを聞いた、初春と佐天は当麻に、後をお願いし帰ることにした。

「それじゃ、お願いします。」

「おう!!」

「朝比奈さん。またねえ〜」

初春と佐天は、手を振りながら、帰って行った。そして、風夜は当麻に連れられ部屋に向かった。そして、風夜の部屋の前に来た時、初春と佐天の声が聞こえた。

「何よ!!!?? あんたたち!!!」

「そうですよ!??」

その声を聞いた、風夜と当麻は、外を覗き込んだ。すると、2人が不良達に絡まれていた。それを見て、2人は階段を駆け降りて行き、初春と佐天のもとに行き不良達を追い払おうとした。

「おい、2人から離れろよ!!」

風夜が、そう言い放った。すると、不良達はこっちを見た。

「なんだよ??」

「邪魔するんじゃないよ!!」

「文句あんなのか!!」

不良達は、そう言いながら近づいてくる。

「おい、風夜どうするんだよ!!??」

「どうするも、こうするも・・・」

風夜は、そう言いながら指パッチンの準備をした。

「風夜??何する気だ??」

「何する気って、能力使うんだよ!!（パッチン）」

風夜が、指パッチンをした瞬間、不良達の近くにあった電柱が真っ二つに切断された。

### 第3話

カマイタチにより、電柱が真つ二つになるのを見た、不良達は顔色を変え逃げ出す。それを見た、風夜と当麻は、初春と佐天に近づいた。すると、2人は地面に座り込んだ。

「2人とも、大丈夫??」

「助かった〜」

「ううう。朝比奈さん!!怖かったよ!!!」

初春は涙を流しながら、風夜に抱きついてきた。それを見た佐天が話しかけてきた。

「初春!!だいた〜ん。今日、初めて会った人に抱きつくなんて〜!!」

初春は、慌てて離れ誤ってきた。

「ご、ごめんなさい……。朝比奈さん!？」

「いって、それに、朝比奈さんじゃなくて、風夜の方がいいんだけど……。そうだ、2人とも僕の部屋に来なよ。お茶出すからさあ。」

「そうですか。ちょっとお邪魔しようかあ。ねえ、初春!!」

「そうですね!!」

こうして、風夜の部屋に、初春と佐天と当麻があがっていく事になった。風夜は自分の部屋を見て思った。

「（汚い部屋だなあ……。こんな部屋、女の子に見せられないよ。）」

風夜は、急遽、部屋の掃除を شدした。もちろん、当麻にも手伝ってもらった。

数分後、掃除が終り、初春と佐天を部屋に招きいれた。

「うわ……。私、男の人の部屋上がるの、初めて!!」

「私もですよ……!!」

初春と佐天は、部屋に上がりこむなり、部屋中を見渡した。そこに風夜が話しかけた。

「2人とも、お茶とココア、どっちがいい??」

「私、ココアがいい!!」

「私も!!」

「俺は、お茶!!」

「なんだ。当麻、まだ居たのか??」

「なんだよ。掃除を手伝ってやったんだ。お茶くらい出せよ!!」

「はいはい」

風夜は、ココアを2つ、お茶を2つ入れた。そして、4人で楽しく話をしていると、当麻の部屋から声が聞こえた。

「とうま〜〜〜〜。まだ帰ってこないの！？お腹空いたあ〜〜〜〜」

それを聞いた、当麻は顔中、汗だらけにしながら立ち上がり、初春と佐天は時計を見た。

「俺、部屋に戻るわ……………」

「もう、こんな時間！？」

「初春、帰ろうかあ〜〜！！」

「そうですね！佐天さん！」

3人は、玄関へと向かった。みんな、靴を履き出て行こうとした。風夜が見送ろうと玄関に行った時、初春と佐天が、ケータイを出してきた。

「風夜さん。あの、その、え〜と。番号とアドレス教えてもらっても、いいですか？？」

「私も〜〜！！」

「いいよ。はい。」

「ありがとうございます！！」

風夜は、初春と佐天と赤外線を使い番号とアドレスを交換をした。

「あとで、メールしますねえ！！」

初春と佐天は、そう言つと外に出て行つた。しばらくして、初春からメールが来た。

「今日は、助けてもらいありがとうございます。今度、お礼をさせていただきます。」

「いえいえ、お礼なんていいですよ。命を助けてもらいましたから！！」

風夜は、メールを送り返し、明日の学校のため寝ることにした。

## 第4話

朝、玄関を叩く音と当麻の声で眼を覚ました。

ドンドン。

「おい。風夜！！いつまで寝てるんだああ！！このままだと、遅刻するぞ！！」

うるさい。風夜はそう思いながらケータイの時計を見た。時間は7時半を回ったところだった。

「・・・・・・・・・・。ヤベ！！！！」

風夜は、慌てて準備し着替える。この間も、当麻の声が響く。

「風夜！！まだかよ！！今、7時40分、ここから学校まで、だいたい1時間。もう遅刻だぞ。」

風夜は、それを聞き慌てて外に出る。外には、顔中、汗だらけにし睨んでいる不幸な少年がいた。風夜は手の平を合わせ当麻に誤りながら、猛スピードで走り出した。

「当麻！！学校はどっちだ！？」

「こつだよ！！」

二人が走っていると、目の前に常盤台の制服着た少女が見えた。そこで、風夜は良からぬ事を思いついた。

そうだ、竜巻でスカートを捲ってみよう。

「パッチン!!」

風夜は、指を鳴らし竜巻をおこす。見えたのは短パン。少女はスカートを抑え、頭からは電撃を出しながら振り向いた。

「今、やったのは、あんたたちかあああ!!」

そう、風夜がスカート捲りしたのは、レベル5にして常盤台の超イルガン電磁砲こと。御坂 美琴であった。当麻は「ゲエ」と声を出し別の道へと逃げていった。それに、気づき風夜は声をかけた。

「当麻!? 学校はそっちなのか??」

「バカ!! 早く来い!! そいつ、いや、ビリビリ中学生は危険だ!!」

「え??」

風夜が当麻の方を見た瞬間、目の前を電撃が走っていくのが見えた。ヤベエ、風夜はそう思い当麻の後を追った。

「待てやあああゴラアアア」

後ろからは、雷神と化した美琴が追いかけてくる。当麻と風夜は必死で逃げる。

「遅刻寸前で悪戯する奴がいるか!? しかも、ビリビリに……  
……不幸だああああ!!」

「当麻！？そんなに、あいつヤバイのか！？」  
「ヤバイもヘツタクレもあるかぁ！！」

こうして、風夜の悪戯により二人の遅刻は決定したのである。美琴に追いかけられる事。数時間、なんとか逃げおおせ、学校に着き教室にはいる。そこには、金髪でアロハシャツを着た男と青髪で耳にピアスをした男が近寄ってきた。

「上やん、風やん。どうしたぜよ？？そんなに、汗かいて？？」  
「2人とも、うらやましい。小萌先生に怒られるなんてえ〜」

「うるせえ、土御門と青髪・・・」

当麻が言い返している時に、風夜は思った。アロハは慣れ慣れし奴。青髪は口り好きじゃないかと。青髪に対して思った事は、後々正解であるとわかった。

ピンポンパンポン。上条当麻くん。朝比奈風夜くん。至急、職員室まで来てください。

土御門と青髪は顔をあわせ、ニカアと笑いこつちを見た。

「さあ、小萌先生からの説教タイムの始まりだ（ぜよ）！！」

こうして、当麻と風夜は職員室に向かった。

2人は職員室に到着し中に入って行つた。そこには、小学生くらいの背をした先生が頬を膨らませ怒っていた。

「もう、上条ちゃんと朝比奈ちゃん！！あんなに遅刻するなんて、

どういうことですかあ」

「それはですね……」

当麻が説明をしている時に、風夜は、またまた思った。

「小学生みたいな教師が小萌先生なんだ。」

その思いを察したのか、小萌は頬を膨らませ怒った。

「朝比奈ちゃん！！今、小学生みたいな教師と思いましたね！！」

（おいおい、小萌先生といい佐天といいエスパーが多いのか、ここは??）

風夜は、そう思いながら説教をうけた。数分後、説教が終わり教室に帰り、残りの授業を受けるが、まるきし解らず授業が終り、風夜が帰り支度をしていると、突然、ケータイが鳴り出し発信者を見ると、初春 飾利と出ていた。

## 第5話

初春からの、突然の電話にビックリしながら出た。

「もしもし。」

「初春さん、どうしたんですか??」

「残念!! 私は、初春じゃなく佐天でえ~~~~す!!」  
「え??」

風夜がビックリしていると、遠くから初春の声が聞こえた。

「佐天さん!?なんで、風夜さんに電話してるんですか!??」

「だって、初春。前のお礼しなきゃいけないって言ってたじゃん。  
なら、朝比奈さんに今日、暇か。空いてる日ないか。聞いておかな  
きゃ!!」

「自分でやりますよ!!」

「ほほお〜。さっきまで顔を赤くしながら、ウジウジしてたのは  
誰かなあ?」

「そ、それは・・・」

「（おいおい、電話の向こうで、何、盛り上がっているんだ??）」

「で、朝比奈さん。今日、暇ですか??」

「暇だけど・・・」

「なら、j o s e p h ・ s っ言うファミレスに集合で!!」

佐天はそう言うと、電話を切った。風夜はファミレスの名前を言われての解らないので、当麻に聞いた。すると、当麻くんは優しいので連れて行ってくれると言ってくれた。その一言が、当麻にとって不幸の始まりだった。

当麻に案内され集合場所に到着し中に入ると、手を振っている佐天の姿が見え近づいていくと、初春と佐天、そして、美琴の姿があった。美琴を見た瞬間、当麻は後退りを始め逃げ出そうとした。だが、時既に遅し……。美琴が当麻の姿を見て、「あ！！勝負しなさいよ！！」とか言いながら、追いかけた。

「なんで、俺なんだよ！？もう、一人いるだろうがああ！！」

「あいつは、いいの！！今は、あんたを倒すのが先よ！！」

「不幸だああああ！！」

当麻は。そう叫びながら飛び出し後を追うかの様に美琴が出て行った。2人の姿を啞然としながら見ている、初春と佐天と風夜。

「まあ。当麻なら生きて帰ってくるだろう……」

風夜は小声で言いながら、初春と佐天の前に座った。

「2人とも、待たせてゴメンネ！！」

「いえ。私たちも、今さっき、来たところですから。」

初春がそう言うが、目の前にはパフェの食べ終わったグラスが置いてあり、どう見ても、今さっき、来た感じではなかった。風夜は、結構待たせたんだなと思いながら、店員を呼んだ。

「はい。ご注文をどうぞ。」

「コーラ1つと、パフェ2つ。お願いします。」

「朝比奈さん。パフェ2つも食べるんですか??」

「いやいや、パフェは2人の分だよ。待たせちゃったみたいだから。」

「え? いいんですか。やったね、初春!!」  
「はい!」

初春と佐天はハイタッチをして喜びあった。数分後、注文した物が運ばれてきた。風夜はコーラを飲み、初春と佐天はパフェを食べた。

「で、2人とも。僕に用事あったんじゃない?」

「そうだった!! ほら、初春!」

「え、あ、その……。よかつたら、今週の休みにでも遊びませんか??」

「(え!? それって、デートのお誘いですか!?)」

「ダメですかぁ……」

初春は、涙目で見ている。その横では、初春の誘いを断つたらどうなるか教えてあげようか??と書いた顔をした佐天が見ている。風夜は断る理由もないので誘いを受ける事にした。

「空いてるから、遊ぼうかぁ!!」

風夜の答えを聞いた初春と佐天は、胸を撫で下ろした後、やっと言いながら喜んだ。そこに、誰かのケータイが鳴り出した。

「誰かのケータイ鳴ってるよ!!」

「初春、私じゃないよ!!」

「あ、僕だ!!」

風夜がケータイを取り出し画面を見ると、上条当麻と出ていた。

「どうした？当麻??」

「どうしたがあるかあ!!風夜、助けてくれえ!!」

「え?」

風夜が話しながら外を見ると、当麻と美琴がへろへろになりながら歩いてくるのが見え思った、助けてくれえって意味は飲み物をくれと言っことだな。風夜は外にある自販機でジュースを2個買い2人の方に投げた。当麻と美琴はうまくキャッチし、ジュースを飲んだ。

「はあはあ。あんたとの勝負は、また今度にするは……」

「ああ、そうしてくれ……」

美琴は、当麻との勝負を諦め帰る準備をした。

「初春さん、佐天さん。帰りましょ……」

「あ、はい。」

「風夜さん。また連絡しますからねえ!」

美琴は肩を落としながら歩き出した。その後ろを初春と佐天が手を振りながらついて行った。

「なあ、当麻。僕、デートに誘われた……」

「何！！！？俺が必死に逃げ回っている時に、そんな良い事があったのか！！！？」

風夜は、そう当麻に言つと「今週の休み、楽しみだな〜」と思いながら、寮の方へと歩き出した。

## 第6話

次の日、風夜が学校に着き教室に入ると上条当麻、土御門元春が、こつちを半分睨んでいる。

「2人とも、どうした?? そんな、怖い顔して……………」

「なあーに。風やんがデートのお誘いを受けたって、上やんから聞いた所ぜよ」

「当麻!? 喋りやがったなあ!？」

「わりい。うかり言っちゃった」

「だから、風やん。デートの日は、俺と上やんも行くぜよ。でも、邪魔はしないから安心していいにやー」

風夜は、当麻に話すんじゃなかったと後悔していると、風夜のケータイにメールが来ていた。「誰からだろぉー」と思いながら見てみると、初春からであった。風夜がメールを読もうとしたら後ろから土御門の声が聞こえた。

「何々、「今週の休みが待ち遠しいです。私、お弁当作っていきますから、楽しみにしていて下さいね」風やん。女の子にお弁当作って貰えるなんて羨ましいぜよ。なあ、上やん」

「ああ、まったくだ」

土御門によってメールを読まれて、顔を赤くした風夜は指を鳴らす格好をした。当麻と土御門は後退りを始めた。

「おいおい、風夜!？」

「どうしたぜよ、風やん？」

「おまえら、人のメールを勝手に読むなあ！」

風夜が、そう言い放った後に指を鳴らした。すると、当麻と土御門の周りに竜巻ができ逃げられない様にし上からはカマイタチを無数に降らした。

「か、上やん!？右手のあれで消すにやー!!」

「え!？あ、あれか!！」

当麻が右手を上突き出した。すると風夜の放ったカマイタチが当麻の右手に触れた途端「パキーン」と音を立て消えていった。風夜は啞然とする。今、おきた出来事が理解できない。

「え？当麻??今、何したんだ!？」

風夜は当麻の右手を掴みながら聞いた。当麻が話し出した。

「俺の右手は幻想殺し（イメージブレイカー）なんだよ。これに触れた物は、超能力だろうが魔術だろうが無効にしちまうんだよ」

「え???なんだそれ???聞いた事ないぞ……」

風夜が言い終わると、授業の始まりのチャイムがなった。そして、なんだかんだやっている内に最後の授業の終わる。そして、小萌先生が教室の出入り口の前まで止まり言った。

「最近、ぬいぐるみや鞆の中に爆弾を仕込んでおくと言う事件が発生してるんで、気をつけて帰ってくださいね」

小萌先生は教室から出て行った。当麻と風夜は帰りの準備をし寮へと帰った。その途中で保育園くらいの子が2人に話しかけてきた。

「ねえねえ、お兄ちゃん達。セブンスミストって言うお洋服屋さんに行きたいんだっけど道がわからないの……。だから、案内してほしいの」

「ああ、いいよ。行こうか」  
「おう」

「わぁーい。お兄ちゃん達、ありがとー」

こうして、風夜と当麻は女の子と一緒にセブンスミストに行くことになった。しばらくしてお店に到着して中に入っていくと、下着売り場に初春と佐天の姿が見えた。風夜が近づいていくと、初春と佐天が下着の話をしていた。

「初春！！勝負パンツに、このヒモパンなんかいいじゃない！？それに、私が捲った時に周りに堂々と見せられるじゃん」

「勝負ってなんですか！？あと、見せないし捲らないでください！！」

「もうお、初春ったらー。わかってるくせに、朝比奈さんを落とすために決まってるじゃない」

「ちょ、ちよつと。佐天さん！？いつのまに、私が風夜さんの事が好きって事になってるんですかぁ！？」

「え、初春。朝比奈さんの事好きじゃないんだあ。なら、私が狙っちゃおうかなあー。」

佐天が、そう言う初春は頬を膨らませ小声で言った。

「誰も、好きじゃないなんて言っていないじゃないですかあ」

佐天が初春で遊んでいると後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「僕が、どうしたんですか」

初春と佐天は、突然、風夜の声が聞こえたのでビックリしている。風夜は「なんで、ビックリしてるんだ??」と首を傾げている。初春は恐る恐る風夜に聞いてみた。

「風夜さん!?!いつから居たんですかああ」

「初春が、頬を膨らましているいる辺りからかなあ」

それを聞いた初春は赤くなった顔を両手で押さえながら「はあうー」と言っていると、初春のケータイが鳴り出した。初春はケータイを取り出し画面を見ると 白井 黒子 と表示されていた。

## 第7話

初春は白井からの出ると慌てた声で白井が話してきた。

「初春。今どこにいますの??」

「今ですかあ?佐天さんと風夜さんと一緒にセブンスミストにいますよ」

白井は初春の居場所を聞いて、なお慌てた声をだした。

「本当ですよ!?!そこにグラビトンの反応が出てますの」

「え!?!わかりました。お客さんと店員さんたちを避難させます」

「お願いしますの。初春」

初春は白井にそう答えると風夜と佐天の方を向き今いる場所が危険なので避難する様に告げると店員の方へかけて行く。店員も初春の話を聞いて慌てて店内放送を流し避難する様にながした。放送を聞いた、お客さん達は急いで出口に向かい走り出した。その中にまじり風夜と佐天も外へ出て行った。2人が外に出た時、当麻が話しかけてきた。

「風夜。あの子知らないか?」

「いや、見てないぞ…………。まさか!?!」

2人は嫌な予感がし建物に向かい走り出した。佐天は2人が走っていく姿を見て声をかけた。

「2人とも、どうしたんですか!？」

「佐天さんは、そこにいて!」

風夜はそう言う中に入っていた。中に入って行った2人は女の子を探しながら初春のいる階に着く。そこには初春が女の子に覆いかぶさる様に抱きつき大声を出した。

「そのぬいぐるみ、爆弾です!」

ぬいぐるみが爆弾である事を聞いた風夜はぬいぐるみを見た。するとぬいぐるみの中心が収縮されていくのが見え風夜は考えた。

「(え、マジかよお!どうする、カマイタチで八つ裂きにして外に吹き飛ばすか……。いや、そんな暇はなさそうだ。なら、初春とあの子の周りに竜巻でで盾をくれば……。」

風夜はそう思いついたが、自分の範囲外に2人が居ることに気がつきとつさに2人のもとに駆け寄った。

「風夜さん!？何で来たんですか!」

「初春!ジツとしてろ!」

風夜はそう言う指を鳴らす、すると三人と回りに竜巻が発生する。だが、天井まで届くほどの竜巻は出せなかった。風夜は舌打ちをし初春と女の子を自分の胸の中に抱き寄せ上からの爆風に備えた。

「（これなら、2人の盾くらいにはなれるはず）」

風夜がそう思った時、後ろから爆発音が聞こえ身構える。そのとき竜巻の外では当麻が右手を前に突き出し爆風を消し去っていた。しばらくして、当麻の声が聞こえた。

「風夜。もう大丈夫だぞ」

「え？」

当麻の声を聞いた風夜は竜巻を消した。すると自分たちの居た所以外は黒焦げになっていた。

「ふうー、死ぬかと思った・・・」

風夜はそう言うのと床に座り込んだ。当麻は笑いながら手を突き出してきた。

「風夜。ほら」

「当麻、ありがと」

風夜は当麻の手をかり立ち上がる。2人は風紀委員と警備員が来る前に退散することにした。2人が階段を降りようとした時、初春の声が出た。

「2人とも、どこにいくんですか？」

「初春、あと頼んだ！」

「ええ！？」

「うまく誤魔化しといて」

2人はそう言々と階段を駆け下りて行った。そして、外に出た2人は互いに用事があるので別の道を通って帰ることになった。

## 第8話

当麻と分かれた風夜は歩道を歩いていると目の前にボサボサな栗色のロングヘアで目の下には濃いクマが出来た女性が同然と立ち尽くしている。風夜は何か困っていると思い声をかけてみた。

「どうかしたんですか？」

「あ、ああ……」

女性は風夜の声聞き振り向いた。

「なあに、車を止めた駐車場がどこかわからなくなってね……」

「そういう事ですか。探すの手伝いますよ」

「本当かね。助かるよ」

風夜はこれも何かの縁だと思い駐車場探しを手伝うことにした。風夜は女性に駐車場の近くに何か目印みたいな物はなかったか聞いてみた。

「あのー、駐車場の近くに何か目印みたいな物はありませんでしたか？」

「目印ねえ……。自販機があつた」

それを聞いた風夜は思いながら聞いた。

「（自販機なんて、そこら中にあるじゃないですかあ！？むしろ、それだけじゃわからんですよ！！）他にありませんか？」

「他にかね…………。すまない、思い出せない」

「…………わかりました。手当たりしだいにさがしましょうか」

風夜は後悔した声をかけるんじゃないかと思った。2人は自販機がある駐車場を探しまわった。とある場所に通りがかった時、女性が突然服のボタンを外した。風夜は、この暑さだからボタンを2つ3つ外すだけだと思い見ていると女性は2つ3つボタンを外すだけに止まらず全てのボタンを外して服を脱いでしまった。上だけブラだけになった姿を見た風夜は口をポカアンと明け啞然としている。すると、近くを通りかかった人たちが小声で話している。

「何、あの人？急に脱ぎだしたわよ！？」

「もしかして…………」

風夜はその会話を聞き慌てて女性が腕にかけている服を取る。

「は、早くきてください！？他の人が見てますから！」

風夜は女性に上を着る様に言う、しかし、女性は嫌な顔をしながら着始める。

「なぜ、水着は良くて下着は駄目なのだ…………」

女性はそう呟きながらボタンをかいだした。風夜はホッと胸を撫で下ろした。

2人は、あっちこっち探し回ったが見つからない。風夜は「あちい限界だ」と思いちょうど良く日陰になったベンチがあったので座って休憩することにした。

「あのー、ここで休憩にしませんか？」

「そうだな。少年、一緒に探してくれているお礼に飲み物を買ってきてあげよう」

「あ、ありがとうございます・・・」

女性はそういい残すと自販機の方に歩いて行った。

「そういえば、あの人の名前聞いてないなあ」

風夜がそう言っていると女性が帰ってきた。その両手にはスープと書いてあるのが見えた。

「（おい・・・。何を買ってきたんだ！？）」

風夜が思っていると女性はスープカレーを渡してきた。風夜はスープカレーを目の前にし息をのみながら飲み口を開けた。すると、ものすごくカレーの匂いがする。しかも温かい。この暑いのに温かいのはーと思っているの女性が話しかけてきた。

「どうした？飲まないのか？」

「あ、いただきます・・・（ゴクン）」

一口飲んでみた・・・。

「（うん。具の入ってないカレーだ・・・）」

美味しくもなければ不味くもない微妙な味・・・表現しづらい。そう思いながら女性に名前を聞いてみた。

「あー、名前言ってなかったですね。僕は朝比奈風夜と言います」

「私は木山春生。よろしく」

2人は名前を名乗りあい再び駐車場探しにでた。空が夕日に染まったころ、やっとこさ駐車場を見つけ出した。木山は自分の車に乗り風夜にお礼を言って駐車場から出て行った。

風夜は木山を見送り寮に向かい歩き出した。

しばらくし、木山は研究所のPCを見ながら「あの子が 朝比奈風夜くんか・・・」と独り言を言っていた。

## 第9話

次の日の夕方。いきなり当麻から電話がかかってきた。内容は俺たちの決めセリフを思いついたからビリビリ相手にやろうと言う事だった。風夜は悩んだあげくやることにし当麻の居る河原に向かった。

そして、今、2人はとある河原にいる。目の前にはビリビリ中学生いや短パン娘が仁王立ちで立っていた。

「なによ？用事があるなら早く言いなさいよ」

短パン娘のセリフを聞いた後に当麻が話しかけてきた。

「風夜。打ち合わせ通りによろしく」

「ああ（本当に大丈夫なのか・・・）」

風夜は嫌な予感を感じているときに、当麻が喋りだした。

「行くぜ！風夜！」

「いくよ。当麻。」

2人がそう言った後。

風夜が「サイクロン！！」

当麻は「ジョーカー！！」

2人同時に「サイクロン。ジョーカー。ダブル！」と叫んだ。(ポーズはあれですね・・・)それを見ていた美琴は目を閉じ前髪の辺りから青白い電撃を出しつつ両手を握り腰元でプルプルさせてかなりご立腹の様子だった。それに気づかない2人は妙な達成感に浸りながらハイタッチをしていた。

その時、美琴が喋りだした。

「急に呼び出されるから何かと思えば・・・」

「・・・」

「あんたたちは・・・」

「はい？」

「人をどれだけ・・・」

「え？」

「バカにしたら・・・」

「ちょ・・・」

「気が済むのよおおお!!」美琴が叫ぶと天目掛け物凄い電撃を放った。2人は達成感が消え恐怖が込上げてきた。

「おい、当麻・・・これって」

「ああ、かなりヤバイなあ」

鬼と化した美琴を見た2人は、我先にと逃げ出した。土手を上り2人は別々の方向へと逃げていく。その時、風夜は思った。

「(こういう時は僕の方には来ないだよ・・・。たいてい当麻の方に)」

走りながら風夜は後ろを振り向いた。すると、いつもだと当麻の方

へ行くはずの美琴がこっちに向かって走ってくる。風夜は逃げながら美琴に聞いてみた。

「今日に限って何でこっちに来るんだよ!？」

「なんでって、あんたにはスカートを捲られたお礼をまだしてないからよ!！」

理由を聞いた風夜は捕まったら確実に死ぬそう思いながら走る。走っている時に初春との約束を思い出した。

「(そうだ。明日、初春とのデートじゃないか……。死ねない。絶対に死ねない。逃げ切るしかない)」

後ろから追いかけて来る鬼から風夜は必死に逃げる。明日のために……。そして、ある路地裏に逃げ込んだ。すると、目の前に美琴らしき姿が見えた。風夜は慌てて別の路地に逃げ込む。そこにも美琴のらしき姿が……。風夜は思った。

「(あいつは、なんで僕の行く先いるんだよお!?!どこぞかの戦闘民族みたいに瞬間移動でもしてるのか!?!)」

心底恐怖を感じ始めた。どの道に逃げても美琴? ?がいる、風夜は半分諦めはじめ立ち止まると後ろから美琴? ?みたいな声が聞こえた。

「その、あなたは何故ミサカの姿を見ると逃げるのですか? ?とミサカは聞いてみます」

風夜はビクビクしながら振り向いてみると、美琴? ?が居た風夜は

頭から爪先、両手を見てみると2か所違う所に気がついた。それは、変なゴーグルを右手に持っている、それとなんか喋り方が違う。風夜が考え出した。

「（え？目の前に居るのは美琴だよな？でも、あいつゴーグルなんか持ってたか？それに喋り方違う気が・・・）」

風夜の頭を抱えながら考えていると、遠くの方から「どこ行っただあああ。風使いいいいいい！！！」と大声が聞こえてきた。恐ろしい声が聞こえた風夜は美琴そっくりな子に背を向け路地裏から走って出て行った。

そして、なんとか美琴に見つかる事なく寮まで逃げてこれた。寮の前には当麻が立っていた風夜は最後の力を振り絞り当麻に近寄っていく。

「とーうーまー！！死ぬかと思ったよー」

当麻は半泣き状態で近づいてくる風夜に気がつき手を振っている。

「風夜！無事だったかあ！？」

「なんとか無事だったよ。今回こそ恐ろしいと思った事ないぞ。鬼の様な声出しながら追いかけられるわ。美琴みたいのにたくさん行き会っし・・・」

当麻は風夜の話聞きながら思った。

「（美琴みたいのにたくさん会ったって、どういうことだ？）」

半泣き状態の風夜は当麻になだめられながら自分の部屋へと入って  
行き、明日のデートのために寝る事にした。

## 第10話

時刻は10時を廻った頃、耳元で何かが唸っている。

ブーブーブー。

風夜は目を擦りながら唸るケータイを開いてみると着信が10件あった。

「誰だろ？」

風夜は着信を見てみると初春からが5件、なぜか佐天からが5件。それを見た風夜は体中の血の気が無くなっていくのがわかった。

「どわあああ。もち待ち合わせの時間過ぎてるじゃん!？」

風夜は慌てて準備を整えて戸締りを確認し玄関の鍵を閉め待ち合わせの公園に向かい走り出した。走ることに、数時間後、公園に到着し初春の姿を探し出した。

「初春……。どこだ？もしかして帰っちゃったかな!？」

風夜は焦りだしていた。その後ろからゆっくりと近寄ってくる人影があるが風夜は気づかないでいる。そして、近寄ってきた人が大声を出した。

「うわあ!!」

風夜は心臓が止まるんじゃないかというくらいにビクビクし固まっ

ている。数秒後、後ろを向くと初春がいた。

「風夜さん。遅刻ですよ」

「ごめんよ。初春」

「謝っても許しませんよ」

「え!？」

「なあんて冗談ですよー」

2人は、なんとか合流しニコニコしながら話をしながら歩き出した。その姿を物陰から見ている5人がいた。

「朝比奈さん……。こんなに遅刻するなんて。どう思いますか、御坂さん白井さん？」

「殿方が遅刻するなんて、最悪ですわ……。ねえ、お姉さま」

「まったくよ……。ところで佐天さん。なんで、こいつらがいるの？」

「なんでって酷いにやー。なあ、上やん」

「まったくだ。俺たちは風夜が心配で……」

そう風夜と初春のデートを監視しているのは、佐天、美琴、白井、当麻、土御門であった。

「あ!？2人が移動しましたよ」

佐天がそう言うのと風夜と初春の後を着いていく5人の姿があった。時間はだいたい12時半を廻った頃、時計を見た初春が風夜に話し

かけた。

「風夜さん。約束とおりお弁当作ってきたんですよー。そろそろ食べませんか？」

「本当に！！あいがとー、初春！！食べる食べる！！」

風夜は喜びながら初春の片手を握りながら空いているベンチへと歩いていった。その姿を見た佐天たちは、羨ましいと思う心と私より先に男の人と手をつなぐなんてと思う心があつた。

「2人ともいい感じですねえ。」

「ええ（いずれ私もお姉さまと・・・）」

「いいなあ。初春さん・・・（私も当麻と・・・）」

「上やん。見るにやー。風やん、手つないでるぜよ」

「ああ。羨ましいなあ」

5人が話していると初春がお弁当を広げだした。それを見た佐天は思った。

「初春。早速やるのね・・・」

それを聞いた4人は何をするんだろうと思いつながら2人を見た。すると初春が箸でミートボールらしき物を掴み風夜の方に突き出していた。

「ふ、風夜さん・・・。あ、あーん」

「え！？」

風夜はいきなりの行為にビックリしていると顔を赤くした初春がい

た。

「いいから、口あけてください!」

「は、はい……。あーん。(パク)」

風夜のしてもらった行為を見た当麻と土御門は殺意を抱きながら睨んでいた。その横では佐天がよくやったと言いながら頷き美琴は口をパクパクさせながら見ていた。そして白井は何かブツブツ言っていた。

「上やん、見るにやー。あーんしてもらってるぜよ」

「あいつ、死刑だな……」

「初春……。やりますわね」

風夜は何かを感じとり周りを見渡しだした。

「どうしたんですか？風夜さん？」

「いやあ、誰かに睨まれてる気がしたもんで……」

2人はお弁当を食べ終わり次の場所へと歩きだした。その途中で初春が話しかけてきた。

「あのー、風夜さん。幻想御手<sup>レベルアップ</sup>って知ってますか？」

「知ってるよ。それ使くと能力レベルが上がるんだっけ」

「はい。風夜さんは使いたいと思いますか？」

「僕は嫌だな。物に頼って自分は何もしないのは」

それを聞いた初春はホッと胸を撫で下ろした。

「よかったです。そう答えてくれて・・・」

初春がそう言っている時に佐天が白井に何かを言っていた。

「白井さん。この石を初春の足元に空間移動テレポートしてください」  
「了解ですの」

白井は石をテレポートさせた。そして、初春は急に出てきた石に躓き転びそうになった。それを見た風夜は慌てて初春の腕を掴み引く張った。すると、初春が風夜の胸に抱きついてきた。佐天と白井は「ヨッシャー」とガッツポーズをし横では当麻と土御門の殺意のボルテージが大きく上がり、美琴はまたまた口をパクパクさせている。

佐天は次の作戦に出ることにした。

「上条さん、御坂さん。カップルのフリして近づき目の前でキスの真似してください」

それを聞いた2人は顔を赤くし手を前に出し「無理無理」と言い出す。佐天は何とか2人を説得し向かわせた。

## 第11話

風夜と初春は抱き合ったまま動かないでいる。その2人の近くを、どこかで見たことのある2人が歩いて行った。

「なあ、初春。あの2人どこかで見たことないか？」

「え??」

2人が見てみると……、それは当麻と美琴が手をつなぎ歩いていた。2人はある意味ビクリしていた。

「なんだ。当麻もデートなのか……」

風夜が見ていると、急に当麻と美琴が抱き合いキスをしようとするのが見えた。2人の唇が近づいた時美琴が「もうダメエエ」と叫び電撃を放ちだした。それを見た風夜と初春は慌てて逃げ出した。

「何をやってますの……。お姉さま（あの上条つて方には後で串刺しになってもらいましょう）」

「あの2人にしたのが間違いだったかなあ……」

「上やん……」

佐天、白井、土御門は溜め息をつきながら、当麻と美琴と措いて2人の後を追いかけて行った。風夜と初春はデパートへと入って行くこととした姿が見え近づこうとした時、2人に話しかける女性がいた。

「朝比奈くん。また会ったね」

「木山さん。どうしたんですか？」

「風夜さん？この人は？」

「前に、車を止めた駐車場と一緒に探したんだよ」  
「そうなんですか」

風夜が木山を初春に紹介していると木山がボタンをはずしだした。初春がそれに気づき見ていると服を脱いでした。この光景を見ていた佐天、白井は目を合わせ「もしかして、都市伝説の1つ「脱ぎ女」ですか（ですの）!？」と言っており後ろでは、鼻血を出しながら倒れうわ言で「感無量ぜよ」と言っている土御門がいた。

初春が慌てて風夜に話しかけた。

「ふ、風夜さん!？この人、急に服脱ぎましたよ!？」  
「げ!？またかよ!？」

風夜は慌てて木山に服を着るように言った。

「服着てくださいよ。木山さん!？」

「わかったよ……」

木山はシブシブ服を着だした。そこに風夜が話しかけた。

「で、どうしたんですか？」

「なあに……」

「もしかして、また駐車場がわからなくなったんですか??」

「よく、わかったね」

「……」

風夜は啞然としながら思った。「（デートしてる時に会うなんて……。なんて最悪な）」その後ろには木山を見ながら呆然としている

初春がいた。

「朝比奈くん。もしかしてデートの途中かね」

「そうですよ・・・」

「後ろにいる娘が朝比奈くんの彼女かね？」

彼女という言葉聞いた初春が赤面しながら首を振りながら答えた。

「そ、そ、そんな。彼女なんてまだそんな関係じゃないですよ!？」

それを聞いた木山は残念と思いながら聞いた。

「で、駐車を・・・」

「どうする？初春？」

「困っている人は助けないといけませんよ。風夜さん」

「そうだね。探すの手伝いますよ」

こうして、風夜と初春はデートを一時中断し駐車場探しをすることにした。それを見ていた佐天と白井はブツブツ言い出した。

「デート中断ですかね？」

「きつと、そうですわよ。初春のことですから、「困ってる人は助けないといけません」とか言っ探し出しますわよ」

またまた、駐車場を探そうとしている風夜と初春は木山に駐車場の目印を聞いてみた。

「目印とか覚えてませんか？」

「目印かね・・・。そうだ、横断歩道・・・」

「（うわぁ、今度はそうきたか・・・。そういうのは目印になるの

か??)」

「わかりました。行きますよ！風夜さん！」

「（今のでわかったのか！？初春！？）」

初春はそう言うのと木山を連れ歩き出した。その後ろを風夜が着いて行った。

「多分、その駐車場はここですよ！」

そう言いながら初春が来た駐車場の中を探してみると、そこには見覚えのある青い車があった。

「おいおい。マジかよ…………。木山さんこの車じゃないですか？」

「お！そうだよ」

「君、ありがとう！」

木山はそう言うのと車に乗り出て行った。そして2人が見送った時には夕方になっていた。

「もう、こんな時間か…………」

「そうですね…………」

2人はそう言うのと黙り込んでしまった。それからの帰り道、風夜と初春の間に会話がなかった。

「（どうしよう…………。告白なんて早いよね…………。佐天さんは勢いが大事だあ！って言ってたけど…………）」

初春がそう思いながら歩いていると、いつの間にか寮にっていた。

「初春……。着いたよ」

風夜の声を聞いて周りをみた初春。そして、何か決意を固めた目で風夜を見た。

「ふ、ふ、風夜さん！あの、その、えーと……」

初春はそこから先が言い出せない。風夜は初春が話し出すのを待っている。

「風夜さん！よ、よかつたら……。私とっ、つき……。付き合ってくださいぁいいいい」

「……………」

初春は顔を赤くし目には涙を浮かべ風夜を見つめている。風夜は初春の顔を見ながら考えている。

「（え！？マジですか！？女の子からの告白なんて初めてだよ。それに、僕も初春の事好きだし、むしろ先に言われたよ……。）いいの？うちら会って間もないよ……」

「いいんです、好きになるのに時間は関係です……。風夜さん、返事を……。聞かせてください……」

「あ、うん。いいよ」

「え！？本当ですか……」

「うん。初春に先に言われちゃったけどね」

風夜の答えを聞いた初春は泣き出してしまった。風夜は慌ててハンカチをだし初春に渡し涙を拭くように言った。

「落ち着いた？初春？」

「風夜さん。初春じゃなく飾利って呼んでください・・・」

「か、か、飾利・・・」

「はい。だいぶ落ち着きました」

こうして2人は付き合うことになった。この2人を見ながら喜んで  
いる人が5人いた（いつの間にか、当麻と美琴、土御門が合流して  
いた）

明日から風夜と初春は耳にタコができる位に茶化される事になった。  
そして当麻は白井に追いかけられ服のあっちこっちに穴が開くこと  
になった。

## 第11話（後書き）

初春と付き合いだすの速い気がしますよね……。そこは大目に見てください。。。

## 第12話

次の日、風夜は鼻歌を歌いながら歩いていると突然、ケータイが鳴り出した風夜が画面を見ると初春と出ていた。

「飾利？どうした？？」

風夜が聞いてみると初春は慌てた声で答えた。

「風夜さん。大変です！さ、佐天さんが！」

「佐天がどうしたんだ？」

「幻想御手を使って意識を失ってしまったんです！」

「え！？うそだろ？」

「うそじゃないです！今、病院に搬送されたところです」

初春はそう電話を切った。風夜は心配になり慌てて搬送されそうな病院へと向かった。風夜は運良く佐天が搬送された病院へと辿りついた。そこには御坂と白井の姿が見えたが初春の姿が見当たらない。風夜は2人のもとへと走りより佐天の様子と初春がどこにいるのかを聞いた。

「美琴！白井！佐天の様子は？？」

「それが意識不明のままですの・・・」

「うん。運ばれた時から変わってないのよ」

「ところで飾利は？？」

風夜が2人に初春の姿が見当たらないので聞いてみた。すると、2人は互いに顔を合わせ「ニヤア」としながら笑った。

「名前で呼び合うほど仲が良いですね」

「ほんと、ラブラブだね」

2人がそう言いながら風夜を茶化しだした。

「いやあー。そんなあー。って茶化すなあ！飾利はどこだ！」

「初春でしたら、大脳生理学の研究者の所に行ってますわよ」

「大脳生理学の研究者って誰だよ？」

「それは、木山春生先生ですわよ」

「あの人、研究者だったのか！？」

風夜がビックリしていると、後ろから話しかけてくる人がいた。3人が振り向くとそこにはカエル顔の医師が立っていた。

「3人とも、ちょっといいかね？」

「はい」

3人は医師の後をついて行きとある部屋に入っていった。そこで医師はパソコンを見ながら呟きだした。

「ちょっと、今回の幻想御手のことを調べてみたんだがね？ちよつと気になる事があってね」

「気になる事??」

「ああ、幻想御手の中にある人物の脳波が混じっているんだよね」

それを聞いた3人はパソコンの画面を見たと画面には木山春生の顔写真が写っていた。それを見た風夜は慌てて初春へと電話をかける。しかしコール音は鳴るが初春は電話に出ない。風夜は2度3度掛けるがでない。

「飾利……。電話に出ないんですけど……」

風夜は美琴と白井の方を見ながら言うと2人は慌てだした。その時、白井のケータイが鳴り出した。

「もしもし……」

白井が電話をしていると白井の顔が変わっていくのがわかった。そして電話を切った白井に風夜聞いた。

「どうしたんだ？白井？」

「今、木山春生の居場所がわかりましたの……。初春も一緒にいるみたいですの」

それを聞いた風夜は白井の両肩を掴むと包帯らしき物が巻いてあるのが見えた。だが、風夜は気付かずにいる。

「どこにいるんだ!？」

「それは、教えられませんの・・・」

白井はそう答え居場所を教えようとはしなかった。答えない白井に風夜は声を荒げながら再度聞く。

「白井! 答えろよ!!」

風夜の怒鳴り声を聞いても白井は答えないかわりに怒鳴り声について注意した。

「ここは病院ですよ? お静かにしなさいなあ」

それを聞いた風夜は白井が答える気がないことに気がつき白井の肩から手を離し外に向かい歩き出した。そこに美琴が声をかけた。

「ちょっと、どこに行くのよ!？」

「どこに行くも何も飾利を助けに行くんだよ・・・」

風夜はそう言い残すと外に出て行こうとした所で白井が口を開いた。

「第10学区の高速道路で警備員と交戦してますわよ・・・」  
アンチスキル

「白井、ありがとう」

「私も行く！」

風夜は礼を言い外に出て行く。その後を美琴が追いかけてくる。人は外に出るとタクシーを止め第10学区へ向かっていった。

2

## 第13話

2人は初春と木山の居る場所に到着した。そこで目にしたのは道路のあっちこっちに倒れている警備員アンチスキルの姿、車両が横たわり燃え盛っていた。そして、青い車の中には気を失っている初春の姿があり、その前には目を赤くさせた木山がこっちを見ていた。

「いやあ、遅いではないか・・・」

「これをやったのは、あんたなのか!？」

風夜が木山に問いかけると平然な顔をした木山が答えた。

「そうだが・・・」

「なんでこんな事するのよ!？」

「なぜかって?それは、私の邪魔をしようとしたからだよ・・・」

木山はそう答えた、だが風夜はたいして聞かなかった。

「警備員アンチスキル達が、あんたの何を邪魔をしたか知らないけど飾利は関係ないだろ?帰してくれないかな、僕の嫁さん候補を?」

風夜が「飾利は関係ないだろ」と言った頃、車内で気を失っていた初春が目覚まし外に出てきていた。そして「僕の嫁さん候補」と聞き顔を赤くしている姿を美琴が発見し風夜に教えた。

「あのさあ、初春さん目覚ましてるわよ・・・。しかも、嫁さん候

補って言ったとこ聞いてたみたいよ」

「え!？」

風夜は初春の方を見た……。ほんとに聞いていたらしく赤くした顔を両手で隠していた。風夜も恥ずかしくなり顔を赤くした。それを見た木山が喋りだした。

「やれやれ……。ラブラブなのはいいが時と場所を選んでほしいものだ」

「う……。うるさい。まさか目を覚ますとは思わなかったんだよ……。それより、帰すのか帰さないのか」

「彼女にはしばらく人質になってもらいたいのので帰す訳にはいかないな……」

「わかった……。帰す気がないんだな。なら力尽くで取り返すだけだ」

風夜の言葉を聞いた美琴は頷く。そして、木山は溜め息を吐きながら言い放った。

「1万の脳を統べる私にレベル3の少年とレベル5の少女の2人だけで勝てると思ってるのかね？」

「そんなのやってみなきゃわからないじゃない」

美琴が木山に言い返し風夜も頷く。木山は美琴と風夜を見つめ再び溜め息をついた。

「はあ。ならかかってきたまえ」

その台詞を聞いた風夜が能力を発動する構えをした時、美琴が風夜に話しかけた。

「私がけん制するわ。その隙に初春さんを取り返してきなさいよ。」

「ああ、わかった!」

風夜が返事をしたと同時に美琴は木山へ目掛け電撃を放つ。風夜は初春が居る場所目掛け走り出した。美琴の電撃を防いだ木山が気づきカマイタチを風夜へ目掛け放った。

「どわあ!? あぶねえな!」

風夜はそう言いながら走るのをやめようとはしない、木山からカマイタチが放たれるのを見た風夜は思った。

(ヤバ! 今度のは直撃じゃねえ!?)

「だあ!! 飾利を取り返す前に死んでたまるかあ!」

風夜はそう叫ぶと指を鳴らし木山が放ったカマイタチ目掛け自分のカマイタチをぶつける。打ち消すことは出来なかったが軌道を逸らすことはできた。そして何とか初春の元へと辿り着いた。

「はあはあ・・・飾利! 無事か?」

「風夜さん!? 何で来たんですか!」

「何でって大切な人をほっておけないだろ？」

風夜がそう言うのと初春は泣き出してしまった。

「ふえー。風夜さんにもしもの事があつたら、私……」

初春がそう言った瞬間、木山がカマイタチを放った。

「さつきも言っただろ？場所を考えると……」

「あぶねえなあ！？飾利に当たったらどうする気だ！」

風夜はそう言うのと木山の方を睨みつけた時、木山の後ろから美琴が大声を出した。

「だあああ！私を忘れんなああああ！！」

美琴が電撃を放つ。それに便乗し風夜もカマイタチを放った。木山が居た所は土煙が立ち込めている風夜は小型の竜巻を発生させ土煙を吹き飛ばす。そして、薄っすらと木山の姿が見えてきた。木山の姿を見て2人は啞然とした。美琴の電撃と風夜のカマイタチを受けて無傷で立っていた。

## 第14話

木山は白衣のポケットに手を入れたまま何も無かったかのような顔をしながら話し出した。

「さっきから無駄だと言っているのに……。それにレベル5のお嬢さんの電撃は防ぐのは大変だがレベル3の少年のカマイタチは対した事ないな、私が真似て出すのよりも劣るとわね……」

「僕のカマイタチが……。あんたの出す偽者より弱いだって」

風夜はそう言いながら啞然としていると木山が語りかけてきた。

「君も幻想御手を使って見たらどうだね？レベル5になれるかもしれないよ……」

木山は風夜を自分の統べる脳の1部にしようと考えた。だが、風夜は「誰がそんなのいるか！」と言い返すかと思いきや「レベル5」という響に戸惑っていた。

（あれを使えばレベル5になれる……。なりたい……。もの凄くなりたい……）

風夜がそう思っていると後ろから初春の声が聞こえてきた。風夜は恐る恐る後ろを振り向くと、そこには怖い顔で睨んでいる初春がいた。

「風夜さん……。今レベル5になってみたいって思っていました」

ね・・・」

「え！？なんでわかったの!？」

風夜は顔から汗を出しながら返事を返した時、美琴の声が聞こえた。

「あんだ、ここにレベル5になるためにここに来たわけ?？」

風夜はその言葉を聞いてここに来た目的を思い出した。

「そうだ、僕はレベル5になるためにここに来たんじゃない。飾利を取り返しにきたんだよ」

美琴はホツとしながこつちをみていると、木山が目をつぶり頭をかきなが呟きだした。

「やはり、そう簡単にはいかないかぁ・・・なら消えてもらおうか・・・」

木山がそう言うのと風夜みたいに指を鳴らすポーズをとる。風夜も同じポーズをとった。

「君もわかっていないな・・・、君のカマイタチでは勝てないのだよ」

木山はそう言うのと指を鳴らしカマイタチを風夜と初春目掛け放った時、風夜が小声で呟いた後に大声を出した。

「僕の・・・（小声）」

「僕のカマイタチをなめるな！！！」

風夜はそう叫ぶと指を鳴らした、すると、今までとは何かと違うカマイタチが放たれ木山の放ったカマイタチを呆気なく粉碎された。それを見た風夜と木山は啞然とした。

「え？今のカマイタチ今までと何かが違った気が・・・」

「私のカマイタチが粉碎されただと・・・」

木山は何かおきたかわからない顔をしていると後ろか美琴が抱きついてきた。木山は「はあ！？」と言って美琴を突き放そうとした。

「さっき言ったわよね？私の事を忘れるなっ？」

美琴はそう言うのと木山に電流を身体に流し込んだ。木山は地面に倒れると頭を抑えながら苦しみ出した、すると、木山の頭から光の帯のような物が出で来た。それは空へと上がり一箇所に集まると光の球体になり、その中には胎児らしきものが見える。美琴、初春、風夜はそれを啞然としながら見ている。

「なんだよ・・・あれ！？」

風夜が球体を指差し初春と美琴のほうを見ながら聞いた。

「わ、私に聞かないでくださいよ！？」

「私が知るわけないでしょ！？」

3人が慌てふためいていると球体の中から胎児が出てくるなり胎児

は原子力施設へと向かいだした。

「おいおい。あいつ、どこに行く気だよ……?」

「もしかして、原子力施設に向かう気じゃないですか!？」

「それって、ヤバイじゃん!！」

3人は顔を合わせてあっていると風夜が喋りだした。

「とにかく止めなきゃ、美琴やるぞ!」

「そうね!」

「あのー、私はどうすればいいですか?」

「飾利はここに残っていてくれ」

「どうしてですかあ?」

「どうしてって、怪我させたくないから……」

風夜はそう言うのと走り出した。そして美琴も後に続いて走り出した。  
2人は胎児らしき物の後を追いかけてだした。

## 第15話

高速道路の上には初春と気をうしなつた木山の2人だけになってしまった。初春は呆然と風夜と美琴の後姿を見つめながら思った。

「（ここで待つてゐるなんてイヤですよ・・・）」

初春が周りを見渡すと気を失つた木山や怪我をしている警備員の姿が見える。それを見た初春は、とりあえず近くにいる木山を安全そうな所へと運び、風夜と美琴の方と見た。そこでは風夜が胎児らしき者の近くにカマイタチを発生させ威嚇をしていた。だが、胎児は見向きすらせづに原子力施設へと向かつていた。

「だあああ。なんなんだよ！あいつは威嚇しても無反応だぞ！？」

「そうね。なら、1発お見舞いしてみましようか！」

美琴は前髪のあたりから電撃を放つ。電撃は胎児の背中に当たるが血らしき物は出てきてはいなかった。風夜と美琴が啞然としながら見ていると胎児の眼が「グリーン」と音をたてて2人を見たと同時に低い呻き声を出した後、光の玉らしき物を2人の近くのおっちこちに発生させてきた。

風夜と美琴は慌てて避けて回った。

2人は避けながら胎児と距離をとり反撃をしようと振り向いた。

「そつちがその気なら・・・。あれ？追いかけてこない。なんで？？」

「さあ?? うちらを相手にする気がないんじゃない?」

風夜が何気なく美琴に言うと、身体全体からバチィバチィと電撃を出しながら眉間をピクピクと動かしている電撃姫がいた。

「上等じゃない! なら、取って置きをお見舞いしてあげるわ!」

「ええ!」

美琴がそう言うのとゲーセンのコインらしき物をポケットから取り出すのが見えた。風夜は慌てて止めに入る。

「ちょ! この向きから超電磁砲はマズイから!」  
レールガン

「なんでよ!」

「なんでって、よく見てみるよ!」

「え??」

美琴は風夜に言われ見てみると、今自分のいる位置からレールガンを放ち胎児に当たりその後は原子力施設に直撃……。美琴は解ったらしくコインをポケットへしまった。

「わかってもらえましたか? ビリビリ姫」

「誰がビリビリ姫よ!」

美琴は電撃を出しながら風夜を睨んでいた。だが風夜は相手にせず

に本題にはいった。

「なあ、ビリビリ姫。あいつを止める良い方法ないかあ？」

「なによ急に!？」

美琴は腕を組みながら考え込んでいると胎児らしき者が再び光の玉を出し飛ばしてきた。風夜と美琴は身構えると光の玉は2人を通り過ぎていった。風夜と美琴は光の玉の行き先を見ると初春たちの居る所に飛んでいき高速道路にぶつかり爆発した。それを見た風夜は顔を青くしだした

「ビリビリ姫・・・あいつを1人で相手できるか・・・？」

「誰にむかって言ってるの?そんな事聞いてる暇あったら早く初春さんの所に行きなさいよ!」

美琴はそう言いながら風夜の背中に蹴りをいれた、風夜は美琴の顔を見た後初春たちのいる所に走り出した。

風夜は息を切らしながら初春たちの所についた。そこには腕や足を擦り傷だらけにした初春と目を覚ました木山がいた。

「飾利!!大丈夫か!」

「風夜さん!？」

「無事そうではあった・・・」

風夜がホッとしていると初春が話し出した。

「風夜さん。あれを・・・いえ、AIMバーストを止める方法が解りましたよ!」

初春は制服の胸ポケットから何かのチップを取り出し風夜に見せた。

「これは?」

「これはですね。幻想御手をアンインストールするためのデータ（音楽）が入ってるんですよ!」

「本当に!?じゃ、AIMバーストを止められるし佐天さんや眠っている人たちの目を覚ます事ができるって事かあ!!で、どうやってそれを使うんだ?」

「・・・・・・・・・・」

風夜が使い方を聞くと初春はニコツと笑ったまま動かないし答えない。すると、後ろから木山が話し出した。

「それをどうにかして、学園都市全体に流せばいいんだよ・・・」

「どうやって・・・・・・・・」

風夜は周りを見渡してみると警備員アンチスキルの車両が目に入った。

「飾利!あれだ!」

「え?・・・あれを使って音楽を都市全体にながすんですね!」

「そうだよ!」

風夜は初春の手を掴み走り出そうとすると木山が聞いてきた。

「君たちは、そうも簡単に人を信じられるんだい？」

「え？だって、人を信じるのに理由はいらないと思うよ。信じる信じないは自分次第だし信じて失敗したら、その時はその時さあ！」

初春も頷きながら答えた。

「そうですね。それに私、木山先生が悪い人とは思えませんから」

2人の答えを聞いた木山は「まったく君たちは……。早くしないとあの子が危ないぞ」と言いながら指差した。風夜と初春は指差した方を見てみると美琴が肩で息をしながら戦っているのが見えた。

「飾利！急ぐぞ！」

「はい！」

2人は急いで車両へと向かい、近くへと来た。そこには黄泉川と鉄装がいた。

「君たちなんで此处にいるじゃん！？」

「そうですね！？」

2人が聞いてくると、初春が答えた。

「このチップの中に幻想御手をアンインストールするためのデータ

が入ってるんです。だからこの車両を使わせてください」

初春はチップを2人に見せながら頭を下げた。すると黄泉川が答えた。

「わかったじゃん」

そう言うなり車両の後ろのドアを開き中に入っていく。風夜と初春も後を追って入る。中に入ると無線で黄泉川が本部だけに許可を貰おうとしていた。

「許可を出すことができない！？なんでじゃん！？そのデータを信じる事ができないでどどういう事じゃん」

黄泉川と本部だかとの会話を聞いている風夜と初春はハラハラしている、黄泉川の声が変わった。

「責任は私がとるじゃん。だから、これから送るデータを早く学園都市全体に流すじゃん！」

黄泉川はそう言うなり初春をパソコンに座らせデータを送る様に言ってきた。そして初春はデータを送った。すると、何かの音楽が都市のあちこちに設置されているスピーカーから流れ出してきた。

「これが幻想御手をアンインストールするための音楽なのか・・・」

風夜が呟いているの外からAIMバーストの苦しむ声が聞こえてきた。風夜は外に飛び出して美琴の方を見てみるとAIMバーストがバイオ○ザードに出てきそうな化け物の様な形に変化していた。

## 第15話（後書き）

はじめまして。作者の花月十夜です。

誤字脱字の多い「魔術と科学と学園」をお読みいただき有り難うございます。お気に入り登録してくださった方々にお聞きしたいことがあります。

この小説の何処が良かったか教えてください。作者の励みとやる気にさせていただきますと思います。

最後に誤字脱字の多い小説ですがよろしく願います。

## 第16話

風夜は変化それとも進化をしたAIMバーストを見ていた。

「おいおい。進化するってありかよ……」

風夜が呟いていると美琴の声が聞こえてきた。

「だああああ。あいつは何時になったら戻ってくるのよ!？」

風夜は初春たちの方へ振り向き言った。

「美琴の手助けに戻るわ!」

風夜は素晴らしい残すと美琴のいる所に戻っていった。

「くううう。あの触手、電撃くらわしても砂鉄のソードで斬っても再生するなんて反則よ!」

美琴がなげいていると風夜が再び登場した。

「僕、参上!」

「あんた、仮面○イダーが好きなの?」

「いや……。作者が好きみたいでそのネタをよく使っただよ……」

「他にはないの?」

「他にですかぁ……………。今はない……………」

「ないのかよ!」

「そう簡単に思いつかれてたまるかよ!言ってる方も恥ずかしいんだぞ!」

風夜と美琴が話を……………。

(作者)「あのー、風夜さんと御坂さん。こつちを睨むのやめてください……………。気が散るんで……………」

2人が作者を睨んでいるとAIMバーストが動きだした。

「あいつ、動き出したぞ!」

風夜はそう言うなり指を鳴らしカマイタチでAIMバーストの触手を切断した。すると触手は再生せずにいるのを見た2人は、今がチャンスと思い出した。

「お!アンインストールの音楽効いてるじゃん!」

「なにそれ!?そんなのあったの!?!」

「ああ、飾利が木山先生から受け取ってた」

「そうなんだ。じゃあいつは再生することはないのよね?」

「多分……………」

美琴は電撃をA I Mバーストに当てると、そこに、なにやら光る物が見えた。風夜と美琴はとっさに思った。「もしかしてあれを壊せば倒せるかも」すると、触手とかは再生しなかったのに光る物体がある所だけは再生した。それを見た美琴が風夜に聞いてきた。

「ねえ？あいつ再生しないんじゃないの？」

「僕は「多分」と言ったぞ！」

「まあ、いいわ。あんた、あいつの動き止めてくれない」

「え？なんで？」

「さっきの場所に超電磁砲<sup>レールガン</sup>を打ち込むのよ！」

「なるほど！原子力施設はお前の後ろにある。よし、やれ！ビリビリ姫！！」

「ビリビリ姫って言うなあああ！！」

美琴は電撃を溜めだし風夜は指を鳴らした、するとA I Mバーストの左右に竜巻を発生させるとそれをA I Mバーストにぶつけたのち、カマイタチで美琴へ伸びていく触手を切断していく。美琴はポケットからコインを取り出し親指で跳ね上げ落ちてきたコインに再び親指をぶつけA I Mバーストへと弾くとコインは電磁加速し勢いよく飛んでいく、A I Mバーストの光る物体のあった所に直撃し光る物体を外へと押し出してきた。

「さすがビリビリ姫！！」

「あんた、直す気ないでしょ……」

「ああ!!」

風夜は力強く頷いてみると、光る物体は美琴の放った超電磁砲レールガンにより粉々に粉碎されAIMバーストは姿を消して行った。そして美琴が急に倒れた。

「どうした？ビリビリ姫？」

「電池切れよ……」

「しょうがないなあ……」

風夜は美琴に肩をかし歩き出した。2人の前から初春がかけてくるのが見えた。

「風夜さん！御坂さん！」

「飾利！出迎えご苦労！」

「御坂さん大丈夫ですか？」

「うん。大丈夫よ。少し休めば歩けるようになるから」

「飾利。ビリビリ姫は僕が見てるから早く佐天さんの所に行つてあげなよ」

「は、はい!!」

初春は今まで見たことのないほど良い笑顔をしタクシーを呼んで病院へと向かって行ったのと同じく白井と警備員アンチスキルやってきた。

「お姉さま！！なんて痛々しいお姿に・・・。」

白井はそう言うなり目を星マークにかえ近づいてくる。風夜は嫌な予感がし美琴を地面に下ろした。

「ふふふ。お姉さま！！この黒子が優しく看病してあげますわあ！！」

「黒子！！やめ、やめなさい！！」

風夜は目を閉じ耳に指をさし何も見えないし聞けない状態にした。数分後、目を開くと美琴が全身真っ白になり気を失っていた。風夜はあの2人の間に何があったんだろと思ったが聞くと恐ろしい話になりそうなので聞かない事にした。その時、後ろから手錠をかけられた木山が来た。

「風夜くん」

「木山先生。どうしたんですか？」

「電撃姫のDNAを使った実験がスタートしているかもしれない」

「え？」

風夜がその実験の内容を聞く前に木山は警備員アンチスキルに連れられ車に乗って行ってしまった。

「なんだよ？実験って……。（まあいいや。変な実験だったら止めるだけだし）」

そのあと、初春と白井が配属されている支部で黄泉川先生と個法さんの2人から説教をうけうな垂れながら寮へと帰って行った。

## 第16話（後書き）

なんとか幻想御手事件の終了まで書くことができました。

これからよろしくお願いします。

## 第17話

ある日、風夜は考えながら学校から出てきた。

「(うーん、なにか無いものか……)」

今、風夜が考えているのはカマイタチと違う能力の使いかたという  
か必殺技ともうしましようか、何か無いものかと考えていた。する  
と後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。そこにはビリビリ姫  
こと御坂美琴が立っていた。

「ビリビリ姫か。どうした？」

「どうしたじゃないわよ。ま、いいわ。この前の労をねぎってあげ  
るから、こっち着なさい」

美琴は風夜にそう言うとはスタスタと歩いていった。風夜はその後を  
着いていくと自販機の前に来た。

「なんだ。ジュースでも買って……」

風夜が美琴に言おうとした瞬間、「ちえいさーっ!」と叫びなが  
ら上段蹴りを自販機にお見舞いしていた。それを見た風夜は唖然と  
していた。すると、自販機から調度2人分の缶ジュースが出てきた。

「あんだ、どっちがいい？できれば、私ヤシの実サイダーいいんだ  
けど」

「え??」

風夜は考え出した。美琴の両手に持っているジュースはヤシの実サイダーときなこ練乳であった。

「（おいおい、まてよ……。ヤシの実サイダーをくれてやったら僕はきなこ練乳という得体のしれない物を飲まなくてはならないでわないか……）」

「早くしなさいよ！」

美琴は早くする様に急かしてくる。風夜は悩んでいた……。すると「プシュ」と炭酸が抜ける音が聞こえてきた。まさかと思いつながら美琴の方を見るとヤシの実サイダーの飲んでいる姿があった。

「………。あのー、まだ答えてないんですけど」

「早くしない、あんたが悪いのよ」

美琴はそう言うと「ゴクゴク」と音をたてながら飲んでいて、そして、風夜へきなこ練乳を投げてきた。

「はい、あんたの分よ」

「あ、はい。ありがとうございます………」

プシュ。ゴクゴク………。

風夜は勇気を出してきなこ練乳を飲んでみた………。

「あま……！こんな飲んだら糖尿病になっちまうよ……！」

「やっぱり……………」

美琴は「ほんとに飲んだよ……」という顔をしながら見ていた。

「わかってたんなら、渡すなよ……………」

「実験したかったのよ」

「ひでえ……………」

風夜がそう言いながらきなこ練乳を飲みきった。

「ところで、何か考えていたみたいだけどどうしたの?？」

「なにか、いい必殺技みたいなの作ろうかなあと思っていたんだけど……………。そうだ、ビリビリ姫！一緒に合体技作らないか?」

「ハア??」

「僕が「唸れ疾風!」で、ビリビリ姫は「轟け雷光!」と言いながら竜巻の横向きバージョンと電撃を放つのどうよ?」

「いや!」

「即答ですか……………」

風夜はガツクリと肩を落とした。すると美琴が話し出した。

「そんな恥ずかしいセリフ言えるわけないでしょ!」

美琴はそう言うのと公園の出口へと歩き出した。

「それじゃ。またね」

美琴はそう言いながら手を振りながら行ってしまった。

美琴を見送った後、風夜も寮へと帰ることにし公園を出て行った。しばらくして寮の近くに来た時、風夜は美琴らしき女の子が路地裏へと入っていくのが見えた。

「あれ？ビリビリ姫じゃないか？あいつ帰ったんじゃないのか？」

風夜は何気ない気持ちで後を着いていつてみる。ある程度進むと曲がり角に辿り着くと美琴とは違った声と男の声が聞こえた。

「準備は宜しいですかとミサカは確認をとります」

「準備？そんなの必要ねえよ」

「でわ。これより実験を開始します」

風夜は角から覗き込んでみると、軍用ゴーグルを頭にかけ手にはマシンガンみたいな物を持った美琴？と白髪の少年が立っていた。

「実験って何だよ？」

風夜はそう思っていると突然、美琴？がマシンガンを少年へと向け引き金を引く。何十発の弾丸が白髪の少年へと飛んでいく。弾丸が少年の体に着弾した時、四方八方へと向きをかえていった。

「え?？」

風夜は今、目の前で何がおきているのか理解できずにいる。すると、「びずっ」と何かが潰れるような音が2、3回聞こえてきた。

「グフッ……」

美琴?の右肩や左足あたりから血が流れ出し倒れこむ、白髪の少年が近づいていきなり美琴?の腹部に蹴りを入れながら話しかけているが、風夜のいる位置からでは何を言っているのか聞こえない。

「どうする……。あれってビリビリ姫だよな?助けなきゃ!」

次の瞬間、風夜は角から飛び出し2人の方へと大声を出した。

「おい!!やめろよ!」

「ああ?なんだ、おまえ?」

白髪の少年は美琴?を蹴るのをやめ風夜を睨みつけている。その目を見た風夜は今までに感じたことのない殺気だった。風夜は殺気に負けずに進み少年の隣を通りぬけ美琴?の近くへと辿りつく。

「ビリビリ姫。大丈夫か?」

「あなたは以前にあった人ですね。なぜここに居るのですかとミサカは聞きます」

「ビリビリ姫。なんか喋り方へんじゃないか??」

「ミサカはビリビリ姫ではありませんとミサカはいいいます」

風夜とミサカが話していると少年の声が聞こえた。

「おい。おまえら俺の事、忘れてねえかあ？」

「黙ってる。最低野郎！」

風夜そう言いながら少年を睨んだ。少年は風夜の目を見て笑いながら言った。

「はあ！イイよ。おまえ。学園都市に七人しかいない超能力者（レベル5）の頂点に立つ一方通行アクセラレータの俺に最低野郎って言ってくるんだからよ！」

「はあ？一方通行アクセラレータ？レベル5がどうした？」

風夜は素っ気なく言い放った。すると一方通行アクセラレータは笑いをやめ、風夜を睨んだ。

「おまえ。面白いなあ。実験は中止みたいだから相手してくれよ」

一方通行はゆつくりと風夜の方へと歩き出す。風夜は指を鳴らす体勢になった瞬間。

「おせえんだよ！」

「え??？」

風夜は自分の目を疑った。さっきまで目の前から歩いてきていたはずの一方通行がいつの間にか目の前にいる。風夜は指を鳴らそうとした瞬間、自分の腹部に一方通行の腕が伸びてくるのが見えた。

## 第18話

風夜がヤバイと思った時には、もう遅かった一方通行の腕が腹部に当たった瞬間、足の小指をタンスにぶつけた時の痛みとは比べようのない痛みが腹部から感じた。

「ガハア!？」

風夜はその場にしゃがみ込んだ。すると一方通行が追い討ちをかけた。

「おいおい。人の邪魔したんだ。そのツケはらえよ」

一方通行は横腹に蹴りを入れてくる。風夜はガードできずに蹴りくらい汚れた壁へと背中から叩きつけられた。

「ガハア……。ゴフォゴフォ……」

風夜は息ができずに苦しみながら地面に寝そべっていると一方通行が風夜に何回も蹴ってきた。

「おいおい。この程度で俺にたてついてきたのかよ!」

「クツ……なめるな……」

風夜は指を鳴らしカマイタチを一方通行に放った。カマイタチは一方通行に当たると空へと飛んでいった。

「今、何かしたか? 所詮、何か動作をしなきゃ能力を発動できない

様な奴には力の差を思い知らせなきゃな」

一方通行はそう言うつと風夜の左腕に足を乗せ話し出した。

「さあ、ここで問題です。俺の能力は何でしょうか？」

「そんなの知ったことかよ……」

風夜が答えると一方通行は溜め息をついた。

「はああ。答えは「向き（ベクトル）」変換でした。例えば、今乗せてる足のすべて向きを変えてやるとな……」

風夜は一方通行の足を退かそうとした瞬間「ボキッ」と腕の中で何かが折れる音が聞こえた。

「グ！？」

風夜は左腕を抑えながら激痛をこらえている。

「はあははは！！向きを変えてやればな、人間の骨なんか簡単に折れるんだよ！これでわかったかよ？三下！」

一方通行は風夜にそっくり残すとミサカの方へと行った。すると、右肩の弾丸の貫通した穴に指を押し込む。

「俺は、今血に触れています。これを逆流させたらどうなるかな？」

ミサカは何をされようとしているとわからない顔をしているが、風夜は何となくだがかかった気がした。

「（やめろ……。）」

「（やめろ……。）」

「やめてくれ！！！」

風夜が叫んだ瞬間、一方通行は血を逆流させたミサカは見るも無残な姿になってしまった。風夜はその姿を見たと同時に気を失ってしまった。それから何時間、何日かたった時、風夜の耳に女の声が聞こえた。

「風……さん。風……夜……さ……ん」

「う……ん？」

風夜が目を覚ますと目の前には初春の姿が見えた。

「ここは？？」

「ここは病院ですよ！」

「え！？」

風夜は周りを見渡してみると何処をどう見ても病院であった。

「飾利！僕はどうやってここに運ばれたんだ？」

「それはですね。御坂さんが路地裏で倒れている風夜さんを見つけてくれて救急車を呼んでくれたんですよ！」

「そうなのか・・・イテエ!？」

「動いちゃダメですよ!左腕の骨折れてるし体中アザだらけなんですから!」

初春は目に涙を浮かべながら言ってくる。

「いったい、左腕に骨折と言い体中のアザといいどうしたらそうなるんですか?」

「え?う・・・。(ビリビリ姫のそっくりさんを助けるためにレベル5に喧嘩売って返り討ちにあい、そっくりさんが目の前で死んだなんて言えない・・・)」

そう風夜が思っていると、初春が話し出した。

「風夜さんの事ですから、レベル5に喧嘩売って返り討ちにあったって所でしょ?」

「う!?(半分当てる・・・)」

風夜が胸に手を当てていると病室の外から男と女の言い争う声が聞こえてきた。

「げえ!?!なんで、ビリビリがここにいるんだよ!?!」

「あんだこそ、何でいるのよ!?!」

風夜と初春が扉を見ていると当麻と美琴が入ってきた。

「「やっぱり」」

風夜と初春の勘は当たっていた。

「「2人とも、やっぱりってどう事だ！（よ！）」」

当麻と美琴の息の合った返答に笑いながら答える初春。

「いやあ、毎回息が合ってますね！」

「初春さんたちもそうじゃない」

初春と美琴が話しているときに風夜が美琴に話しかけた。

「なあ、ビリビリ姫。おまえに妹っているか？」

「え！？なによ、急に！？いないわよ！！」

「そうか。（じゃ、あの時あったのはそっくりさんなのか？でも、ミサカって言うてたよな？）」

美琴は風夜からの突然の質問に何かを隠しているような返事の仕方した。風夜はしつこく聞くのも何かと思い聞くのをやめた。

「じゃ、ビリビリ姫がもし3姉妹だったら、長女はビリビリ姫、次女は色んな事を面白い方向へ運ぼうとしそうだし、三女は「馬鹿野郎」が口癖になりそうだよな」

「何を言ってるの。あなたは？そのくらい、話せるなら大丈夫そう

ね。私、これで帰るわ」

美琴は病室から出て行った。その後ろ姿がなんだか何かに押し潰されそうというか助けてと言っている様に見えた風夜と当麻であった。

## 第19話

初春は美琴を外まで見送りをしに出て行った。

「当麻。ビリビリ姫の後ろ姿なんか押し潰されそうに見えたけど・・・」

「ああ・・・、俺には助けてって言ってる様に見えたぞ・・」

「やっぱり・・・」

風夜と当麻はそれ以上、美琴の事について話さなかった。沈黙がしばらく続き当麻が先に口を開く。

「そろそろ、俺、帰るわ」

「ああ、見舞いサンキューなあ」

風夜はそう言いながら当麻が病室から出て行くのを見届ける。そして、風夜はベットから立ち上がる。

「イテテ。さすがに痛むな・・・。でも、ビリビリ姫のあんな姿みたらほっとけないよな」

風夜は呟きながらギブスで固められた左腕を見る。

「まだ、ダメかな・・・。でも、このままじゃ動き難いしカマイタチでギブス切るか・・」

そして、風夜は指を鳴らしギブスを切り捨てると病院で着替えさせられたであろうパジャマと言うか病院服を脱ぎ捨て初春が豊んでくれた気がする学生服を手に取り着替えると病室から出て行く。

「さあって、どうするか。ビリビリ姫に直接聞いても答えてくれな  
いだろうし……。なら、あの場所に行ってみるか何かヒント  
があるかもしれない。」

風夜はブツブツ言いながら病院に出口へ向かって歩いていると後ろから初春の声が聞こえた。

「風夜さん???どこに行こうとしているんですか??」

「ギイク!?!」

風夜は顔中汗だらけにしながら後ろを振り向くとニコツと笑ってこ  
つちを見ている初春がいる。

「か、か、か、飾利!?!ご、ご、ごめん!?!」

風夜はそう言う出口に向かって走りだした。

「風夜さん!!もう……」

初春は風夜の後ろ姿を見ながら溜め息をついて見送っていた。風夜は走りながら思った「後でちゃんと説明しなきゃな……」そして風夜が振り返りにあいミサカが殺された場所へと辿り着いた。

「さあて、何かないかな……」

周りを見渡しながら歩いていると、どこかで見たことのある制服の少女が風夜の目の前に現れた。

「ビリビリ姫!？」

風夜が小声で呟くと少女はこっちを見る。

「あなたは以前、私を助けようとして一方通行に「返り討ち」にあった少年ですねとミサカは聞きます」

「おい、返り討ちって所だけ強調するなよ」

「それは失礼しましたとミサカは謝罪します」

「え!？」

目の前にいるからはずのミサカとは違う所からミサカの声が聞こえた。風夜は後ろを振り向くとそこにもミサカが立っていた。風夜はビックリしていると2人のミサカの後ろから1つや2つだけじゃない足音が聞こえてきた。

「あなたには謝罪しなくては」「なりませんねとミサカは頭を下げます」「どうやら、この実験のせいで無用な心配をかけてしまいましたねとミサカは」「折れた左腕はもういいのですかと」「ミサカは聞きます」

「「そして、ここにいるミサカは全てミサカですと声を揃えてミサカは言います」」

風夜は唖然としながら自分のまわりにいるミサカを見渡す。すると、

ミサカの中の1人が呟く。

「これで謝罪をしたのは2人目ですと……」

「2人目??」

風夜はもう1人が誰でなのか聞こうとしなかった、むしろ思いつく宛があつたからである。

「(こういう事に巻き込まれる……あいつしか思いつかないんですけど)」

そう風夜が思いついた人とは「上条当麻」であつた。

「ところで、おまえたちはなんなんだ??」

「私たちは学園都市に七人しかいないレベル5の1人。オリジナル超電磁砲の  
軍用量産型モデルとして作られた体細胞クローン「シスターズ妹達」ですとミ  
サカは答えます」

妹達の1人がそう答えた。風夜は別の質問をする。

「前、ここでやってた事ってなんだ??」

「あれは、ただの実験ですよとミサカは答えます」

「実験……!?それっていつたい??」

風夜は妹達に質問をしようとしたが妹達は風夜の質問を聞く前に闇へと消えていつてしまった。

「ビリビリ姫の体細胞……DNA……。どこかで聞いたような気が……。まさか!？」

風夜は思い出した木山が言っていたことを実験内容までは解らないが嫌な予感がする。風夜は慌てて路地裏から飛び出しビリビリ姫が住んでいる所を考えた。本当なら初春や佐天に聞けばいいのだが初春には、これ以上心配はかけれないし佐天に聞けば「浮気ですか？」を冷たく言われそうなので却下。なら自分で探すしかない。

「うー……。確か常盤台中学って寮あったよな!!そこに行ってみよう!!」

風夜はそう決めるとバス停へと向かいバスへと乗り込む。すると、バスの中に見覚えがあるツンツン頭が見えた。すると、向こうもこっちに気がつき手を振ってきた。

「風夜じゃないかあ!? 病院抜け出てきたのか!？」

「ああ!! ビリビリ姫のことが気になったもんで、ちょこつと寮まで」

「おまえもか……」

風夜と当麻は、なんのために美琴のいるかもしれない寮へ向かっているのか聞こうとしなかった。2人は「多分、同じ理由で向かっているんだな」と思っていた。

そして、バスの中に「第7学区常盤台中学学生寮前」とアナウンスされると2人はボタンを押しバスから降りる準備をした。

## 第20話

2人はバスから降りると目の前に、石造りで3階立ての洋館じみた建物が建っていた。

「これがそうなのか・・・」

「そうらしいな」

風夜と当麻はそう言うなり寮の正面玄関へと向かった。そこには木で出来たような両開きの扉があった。

「この扉、すごいな・・・。うちらとは待遇がぜんぜん違う・・・」

「あたりまえだ。俺はレベル0、おまえはレベル3だぞ！そして、こここの寮に住んでいる方々はレベル3以上だ！」

2人は溜め息をつきながらビリビリ姫の名前が書かれた表札を探した。

「ビリビリ姫、ビリビリ姫・・・。ないな・・・。」

「おい、風夜？ビリビリの名前は御坂美琴だぞ？わかってるのか？」

「そうだった！ずっと、ビリビリ姫って呼んでるから名前忘れてた・・・。」

当麻と風夜は話しながら名前を探していると御坂美琴と書かれた表

札があつた。

「風夜！あつたぞ。208号室だ」

「よし。いくぞ。当麻！」

風夜はそう言うなりインターホンを押すと何処かで聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「どちら様ですの？」

「あのー、朝比奈といいますが、ビリビリ姫いますか？って、その声は、黒井白子さんですか！？」

「だれが黒井白子ですの！私は白井黒子ですの！！その声もしかして、記憶喪失になった人ですの？」

「そうですよ。御坂さんは・・・留守みたいだな」

「ええ、でもすぐにお戻りになるかと。ですので部屋にお入りになってお待ちになってくださいな」

インターホンが切れて玄関のロックが外れる音がした。後ろでは「本当に入っているのか」と呟いている当麻の姿がある、だが風夜はそんなのお構いなしで玄関をくぐると、そこには広いホールであった。

「・・・・・・。ここは貴族の屋敷かよ！？」

風夜は呆気にとられていると今度は当麻が先に歩いてってしまった。

風夜は慌ててついて行くと当麻は208号室の前に立っていた。そこに風夜が追いつき当麻の顔を見るなり頷く。当麻がドアをノックすると「カギは掛かってませんの、ご自分の手で開けてきてくださいな」と聞こえてきた。

「お邪魔しまーす」

風夜と当麻は部屋の中へと入って行くと……。やっぱり、白井黒子がいた。そして、黒子何かを言おうとした時、廊下からカツンカツンと音が聞こえてきた。

「もしか、ビリビリ姫帰ってきたんじゃない?」

「まずいですわね!?この足音は寮監ですよ!」

「……………はあ??」

当麻と風夜は黒子の言葉を聞いてポカアンとしていると、黒子が両手をバタバタしながら寄ってくるなり「女子寮に殿方がいるのがバシたら大騒ぎですよ!?早くベットの下に隠れて下さいまし!」とか言ってきた。

「おい、待ってくれ!?白井さん!!この隙間に2人はマズイ!!」

「そうだ!この隙間は普通に考えて無理だろ!」

「えい!!面倒臭い。お2人<sup>テレポート</sup>方空間移動していただきますわよ!!」

黒子は風夜と当麻の手を掴み空間移動をしようとしたが、当麻の幻想殺しの影響をつけ発動しなかった。

「なぜですの!？」

「多分、俺の右腕のせいかと……」

当麻が答えるなり黒子は2人をベットの下に押し込んだ。

「白井!夕食の時間だから食堂へ集合せよ……。御坂は?」

2人がベットの下に隠れてしばらくすると寮監が部屋の扉を開けてきた。黒子は寮監の相手をしている、その時当麻と風夜は熊?のぬいぐるみを見た。ぬいぐるみにはファスナーがあちこちに付けられている。そのなかの1つに紙らしき物が見えた。

そこには「量産異能力『シスターズ妹達』運用における超能力者(レベル5)『アクセラレータ一方通行』の絶対能力(レベル6)への進化論」と書かれていた。

内容は128種類の戦場を用意し超電磁砲を128回殺害することにより一方通行は絶対能力(レベル6)へと進化するとのことだ。  
アクセラレータ

当麻と風夜は続きを読むと、「レベル5の超電磁砲を128人の用意できない、同時期に進められていた『シスターズ妹達』に我々は着目した。  
ツリーダイアグラム樹形図の設計者を用いた所、スペックが劣る妹達を2万通りの戦場  
シスターズに2万人の妹達を用いる事により同じ結果がでる」と……。

当麻と風夜はこれを読んで口をそろえて言った。

「ふざけやがって」

2人は寮の外に出ると風夜が当麻に聞く。

「当麻。やめさせるよな?こんなふざけた実験……」

当麻は頷く。風夜はそれを見るなり「なら、ビリビリ姫の所に行つて「助けて」と、この一言だけ言わせてきてくれよ」

風夜はそう言うなり当麻の手に持っていた、次の実験会場の紙を取りみる。

「風夜！？どうする気だ？」

「なあに、先に次の実験場に行つて止めてるわ！それに、僕じゃビリビリ姫は心を開いてくれないというか腹を割って話してくれないと思うから……」

風夜はそう言うなり次の実験場に向かい当麻は御坂の所に向かい走り出した。

## 第21話

今、工場地帯の一角に向かっている。

「くそおーい。よりによつてこんなに遠い所でやるかあ!？」

風夜は叫びながら走ること数時間、やっと実験場へと辿り着いた。  
風夜は柵に手をつき息を整えた。

「ハアーハアー、死ぬよこの距離走るのは……………」

そう風夜が言った瞬間、後ろの操車場から聞き覚えのあると申しま  
しょうか……………」

嫌でも忘れられない声。

人の左腕をへし折ってくれた奴の声を……………」

風夜は柵越しに目を凝らして見てみると……………」

「あははは、一方通行。私を捕まえてごらんなさあーいと言いな  
がらミサカは逃げます」

「待てよ。御坂妹!」

2人は実験会場で、どこぞかの少女マンガのワンシーンを再現した  
かのような走り方と輝きを放っていた。風夜はそれを見るなり肩を  
ガクツと落とした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。おい、2人とも何をしているのかなあ?？」

風夜はそう言う2人に話し掛けると、走っているポーズのまま止まり輝きは出したままこっちを見る2人の姿があった

「あー!あなたは「返り討ち」にあつた少年ですねとミサ力は言います」

「ええ!? 変な所見られちゃったぜえ・・・・・・・・」

「2人とも。ちよろーり、こっちに来ようか・・・・・・・・」

風夜は2人を自分の近くまで来るように言う。そして、2人を正座させ説教をはじめた。

「なあ、実験会場で何をやってるんだい? 君達は?」

「何をと聞かれると少女マンガの再現ですとミサ力は答えます・・・・・・・・」

「いやぁ・・・・・・・・。開始時間まで余裕があつたもんで・・・・・・・・つい・・・・・・・・」

「アホかあ!!!! 2人があんな事やってたから、今までの緊張感が台無しじゃなかあ!!!! どうしてくれるんだ!!!!」

風夜は御坂妹と一方通行に半分怒鳴りながら言っていると2人はシヨボーンとしながら聞いていた。時計が午後八時半になると御坂妹が立ち上がり「被験者、一方通行は所定の位置へと移動し待機してくださいとミサ力は伝令します」と一方通行へとやってきた。する

と、2人の表情と眼つきが変わるのがわかった。

「さあて、はじめますか……。その前にこの場合、実験はどうなるんだ？まあいいか……」

一方通行と御坂妹の足が砂利を蹴るのが見た風夜は内心こう思った。

「（あの2人実は仲がとっても良いんじゃないかと……。）。つて、のん気にそんな事思ってる場合じゃねえよ。2人を止めなきゃ！！」

風夜は慌てて一方通行と御坂妹の所へと走って行くと、一方通行が「何だよ何だ何ですかアこの無様は？おいおいオマエ一体何を期待してるんだっつの、どれだけ時間稼いだ所で奇跡なンぞ起きるわきやねエだろ、あア！」と言いながら御坂妹を追いかけている一方通行と、逃げながら何かをしている御坂妹がいた。

一方通行はその時、周囲の空気がピリピリと帯電している事に気がついた。

「つつまんねエヤロウだなオマエ、ンな事やって無駄なのがわかんねえもかよ！ってか俺はオマエの悪あがきに延々と付き合うのかよ。ありえねえ！」

一方通行は鼻で笑いながら追いかけていた。風夜は何故か頭に來たらしく一方通行目掛けカマイタチを放つ。

パチイン……。スパアン。

「アー！！何しやがる三下？また、骨へし折るぞ」

「やれるもんならやってみるよ？最低野郎！今さっき、御坂妹とやつてた事言いふらすよ？」

「それは勘弁して！？つて、最低野郎はどっちだよ！！まあいいや、言いふらす前にオマエを始末するだけだ・・・」

一方通行は風夜目掛け突進してくる。そして腕を振り上げてくる。

「同じ手は食らうかよ！」

風夜は指を鳴らし自分の周りに風の層を作った。すると一方通行の腕は弾かれる。

「なア！？」

一方通行は弾かれた自分の腕を見ながら鼻で笑い、風夜を睨んだ。

「いいねえ！ちゃんと学習してるじゃねえか！！」

「だろ？お前には腕をへし折ってくれた礼をしなくちゃならないんでね！」

風夜は再度指を鳴らし手の平を一方通行に向ける。すると手の平に風が集まり丸まりだした。

「これ、疲れるからやりたくなかったんだよ・・・」

「はあ？？なあにカツコつけてるんだよ！」

一方通行がその一言を言った瞬間、風の塊が横を通っていった。

「なんだよ、それは？外して……」

一方通行が一步前に踏み出そうとすると、自分の周りの地面、コンテナに無数に傷がついている事に気がついた。

「何した？オマエ？」

「なあに、カマイタチを球状にして放っただけだよ。それに気をつけた方がいいよ？さつきは外したけど当たら反射じゃ防ぎきれないと思うから……」

風夜はそう言っているが内心は「（ヤベエ！？外しちゃったよ！それに、これあいつの反射の前じゃ歯が立たないんですけど……）」と思っていた。すると一方通行は笑い出した。

「ははッ！ならならなければ良いだけだ！」

一方通行は地面を蹴ると風夜の目の前に一瞬で来た。

「オマエの技を喰らわない様にするのなんか簡単だよな！指を鳴らす前に叩き潰せばいいだけだよな！！」

一方通行は風夜の骨折した左腕へと手を伸ばしてきた瞬間、御坂妹が電撃を放ちながら呟いた。

「あなたの相手は私のはずですとミサカは言います」

「ああ???上等じゃねえか」

一方通行は御坂妹の所に向かうと、そこは一方通行の独壇場だった。御坂妹の防御を縫いながら一方通行の攻撃が当る。そして、御坂妹は一方通行の攻撃に耐え切れずに仰向けに倒れこむ、額が切れたせいか血が片目に流れてきた。ぼんやりする視界の中、目の前には息を荒くした一方通行が立っていた。

## 第21話（後書き）

途中で緊張感を壊してしまいました・・・・。ごめんなさい。

## 第22話

風夜は御坂妹が一方通行にやられたい放題やられているのを見ていた。

「なんでだよ……。御坂妹！そんなに蹴られて平気な顔してられるんだよ！？なんで、やめてって言わないんだよ……」

「私はこの実験のために生まれてきた道具ですからとミサカは……」

「ふざけるなよ。今助けてやるから、大人しくしてろ」

風夜はそう言うなり一方通行目掛け走りよるとカマイタチを放つ。

「さっきから、うざいなあ！！」

「うざくてわるかったなあ！僕は友達をいじめる奴がだあい嫌いなんだよ！！」

「ミサカはいつからあなたの友達になったのですか？とミサカは聞きます」

「いつから友達って、僕がそう思った時からだよ！」

風夜はカマイタチを自分の可能な限り連射するが一方通行の反射の前には無意味であった。カマイタチは四方八方に散らばるところか風夜の方に返ってくる。

「あいつ、反射の向きをこっちにしてやがる!？」

カマイタチを避けると目の前に一方通行の姿が目に入った瞬間、一方通行の一撃が腹部に入る。

「グハア!？クソオ……」

「おいおい、同じ手は喰わないんじゃないのかよ!」

風夜はよろめきながらカマイタチを放とうとするが一方通行はやらせまいと殴ったり蹴ったりとやりたい放題やってくる。風夜は左腕をかまいながらガードするが向こうの方が速い。一方通行の蹴りが横腹に入ると地面へと倒れこむ。

「またこのパターンかよ!」

「今回は違うぞ!なあ、当麻!」

風夜はそう大声で言うつと学生服を着た少年が歩いてきた。

「ああ!!風夜!ちゃんと言わせてきたぞ!」

風夜は当麻の言葉を聞くと同時の倒れた状態から一方通行の顔面へと小規模の竜巻をまとった足で蹴りを入れ、その勢いを利用し立ち上がり当麻の隣へと向かい立つ。

「さあて、反撃開始といきますか!!なあ、当麻って、なんでボロボロなんだ?」

「ちょっと、ビリビリと電撃やらをつけたもんで……」

「そうか……。当麻、この時こそ決めセリフだ！」

風夜が言つと当麻は頷き声を揃えて言う。

「さあ、お前の罪を数えろ！！」

「（決まった）」と2人が思っていると一方通行が眉間にシワを寄せながらイライラした顔をしている。

「オマエら！！人をバカにしてるのかああああ！！！！」

「どわああ、ビリビリ（姫）と同じ反応しやがったあ！！」

一方通行はいきなり地面に足を叩きつけると鋼鉄レールが蛇の様に動き出し直立すると、それを裏拳や蹴ったり殴ったりし矢のように当麻と風夜の所へと飛ばしてくる。

「うそお！？」

「うそお！？じゃねえよ！当麻！鋼鉄レールは僕が何とかするから一方通行目掛け走れ！！」

風夜は当麻に言つとカマイタチで飛んでくる鋼鉄レールを切断……。は出来ない所以当麻と自分に当りそうものだけの軌道を反らした。

当麻が一方通行に辿り着く、だが一方通行は再度地面を蹴ると砂利がショットガンの様に飛び散る。当麻が砂利をガードしている隙に一方通行は後方へと移動し、また鋼鉄レールを飛ばしてくる。

「当麻！！伏せる！！」

風夜は当麻へと飛んでくる鋼鉄レールを弾き飛ばすが落ちた場所が悪かった、当麻の四方を塞ぎ逃げ道を塞いでしまった。

「やべえ！？」

「風夜！！てめえ！？」

「僕何も知らない……」

2人がそう話していると突き刺さった鋼鉄レールの上に一方通行が立っていた。

「オマエら、遅せえんだよ！そんな速度じゃ一〇〇年遅せえんだよ！狩人を楽しませるんだったらキツネなれよ！喰われるだけのブタで終わるんじゃない！！」

「ほおほー。言ったな一方通行？喰われるだけのブタがイノシシに変わる所を見せてやるよ！！」

風夜はそう言うと言いつと指を鳴らす、するとカマイタチを一方通行のいる所に放つ、一方通行は交わし地面へと着地すると、そこには当麻が右手で殴る体勢になっていた。

「よし！思った通り！」

「さすがだぜ！風夜！！」

次の瞬間、当麻のアップーが一方通行の下顎にヒットするが一方通行をダウンさせるだけの力は無かった。一方通行はよろめきながら後ろのコンテナの後ろへとジャンプしていった。当麻と風夜は一方通行を追っていくとコンテナの一つが倒れてきた。すると霧のように粉末の白煙が上がりだした。

「なんだこれ??」

「これは……」

当麻と風夜が回りに現れた白煙の正体を考えていると一方通行の声が白煙の向こう側から聞こえてきた。

「中身は小麦粉か。今日は丁度よく無風」はあはぁん、粉塵爆発でもやるつもりか？無駄だよ？僕の能力は風力使い（エアロシューター）だから、今は無風でもこうやって指を鳴らせば風をおこせるんだから!!」

風夜が一方通行の話の途中に割り込み指を鳴らした。すると風が吹き荒れ小麦粉の白煙を違う方へと流していった。一方通行は自分がやろうとした事を邪魔されイラ突き出した。

「なあ当麻。余裕が無くなつてくると人って動きが単純になるんだぜ。一方通行はこんなに粘られたことは多分無いから……」

「っことは、やるなら今がチャンスってことか！」

風夜が頷くと同時に、一方通行が突進してくる手は当麻の顔面へと伸びている。当麻は伸びてくる手を交わし顔面にカウンターを決めると一方通行は後ろへと吹き飛んでいく。

## 第23話

当麻にカウンターを喰らい後ろへと吹き飛び倒れる一方通行。

「やったのか？」

当麻が風夜に聞いてくる。

「ああ・・・やったかも・・・」

風夜が当麻に答えていると一方通行がモゾモゾと動き出すのが見えた。

「あの野郎！？まだ動けるのかよ！？」

「くそお。どうするよ風夜！？」

2人が喋っていると一方通行が立ち上がり天に手を伸ばし何かを言い出した。

「空気を圧縮、圧縮、圧縮ねエ！良い事思いついたぜ！！来いよ最弱ども、オマエらにはまだまだ付き合ってもらわなきゃ割りにあわねえんだよ！！」

一方通行の上に光の玉が現れた。風夜は呟いた。

「高電離<sup>プラズマ</sup>気体かよ・・・」

「風夜！？なんとかならねえのかよ！？」

「いや、無理……。粉塵吹き飛ばした時に能力使い果たしたから……。」

「なんだよ、それ!？」

「仕方がないだろ！僕だってこんなに喧嘩した事ないんだから、ペース配分がわかんないんだよ!!」

当麻と風夜が言い合つてると一方通行の後ろから御坂のオリジナル声が聞こえてきた。

「やめなさいよ。一方通行!」

御坂は何十メートル離れた所からコインを握られた親指に乗せた手を一方通行に突き出している。その姿を見た当麻と風夜は叫ぶ。

「「やめろ！御坂!!」」

「「……………ごめん」」

御坂は当麻と風夜に謝りだした。

「本当にごめん……………」

再度、御坂が2人に誤る。

「……………勝手かもしれないけど、私はあんたたち生きてほしいんだと思うから」

御坂が言い終えた瞬間、一方通行のプラズマが御坂の方へと飛んでいく、それを見た風夜は「チッ」と口を鳴らし御坂も所に走り突き飛ばした。突き飛ばされた御坂は「え？」と言いながら風夜を見ている。2人は何とかかわした。

「このバカア！！当麻がなんであそこまでやっているかわかるか！！」

風夜は御坂へと怒鳴り声をあげるが御坂は答えない。風夜は一方通行の方を見ながら言った。

「なんとか、あいつの計算を狂わすこと出来ないもんかねえ……。僕的能力は使いきってもうたし」

「それなら、学園都市にある風力発電のプロペラ使えば良いんじゃない？」

「どうやって？」

「うーーーーん」

御坂と風夜は考えた……。御坂にやらしたら意味がない。2人は顔をあわせ言う。

「「そうだ！！妹達シスターズなら！！」」

2人は即座に倒れている御坂妹のもとへと走りより声をかける。

「起きろ御坂妹！！起きなきゃキスするぞ！！」

「あんだ！！こんな時に冗談言ってる場合なの？？」

「ごめん……」

「お願いだから、目を覚まして！アンタにやってほしいことがあるの、ううん、アンタにしか出来ないことなの！！」

「無理を言ってるのはわかる。たった一つで良いの。お願いだからあいつの夢を守ってあげて！！」

御坂が涙を流しながら御坂妹に頼んでいる。すると御坂妹が静かに立ち上がる。

「「アンタにやってほしいことがあるの、ううん、アンタにしか出来ないことなの」の意味は分かりかねますが、何故だか、その言葉はとても響きましたと、ミサカは率直な感想を述べます」

御坂妹はそう言う<sup>シスターズ</sup>と他の妹達へと呼びかけた。すると、カラカラと乾いた音が響きだすと一方通行の作り出したプラズマの形が崩れだした。一方通行はこんなことが出来るのは2人、1人は風夜、もう1人は御坂妹。その2人が一方通行の後ろに立っている。

「てめえらのどっちかか！！」

一方通行は一步2人の方へと踏み出してくるとその間に御坂が割って入る。

「……やらせるとでも思う？？」

「ハア！？図に乗ってるんじゃないぞ！！格下！！！！」

一方通行がそう言った瞬間、後ろで「ガサリ」と音が聞こえ振り向くと当麻が殴る体勢にはいつていた。

「おい、歯を食いしばれよ最強！俺の最弱はちいとばかり響くぞ！  
！」

当麻が言い終えたと同時に右手の拳が一方通行の顔面へと突き刺さった。一方通行は砂利の引かれた地面へと勢いよく叩きつけられ手足を乱暴にゴロゴロさせ倒れこんだ。

## 第23話（後書き）

なんとか、シスターズ編の終わりまでできました。

駄文ですがお読みいただきありがとうございます。

感想等お願いします。

## 第24話

あくる日、風夜は病院にいた。しかも、左腕にはギブス右腕両足には拘束ベルトでベットにくくりつけられている。

「なぜ、このような事に……………」

「それはですね。風夜さんが脱走しないようにですよ?」

風夜の寝ているベットの隣にはニッパ―と素的な……………笑顔でいる少女がいる。

「あの一、飾利?怒っていらしゃるんですか?」

「いえ。怒ってなんかいませんよ……………」

「(ぜえつたいに怒ってるよ、だって、飾利がニッパ―と笑うときは怒っている時だもん……………)」

「風夜さん……………」

「はい!?」

「人助けするのは良いですけど無理だけはしないでください……………」

「あ・うん、わかったよ。今度から気をつけるよ」

風夜の返事を聞いた初春はニッパ―と笑った。

「それじゃ……」「はずしませんよ!」「」

「なんで、わかったの?」

「風夜さんの考えてることはすぐにわかります……。今日だけ我慢してください。明日にははずしてくれるって先生が言っていましたから」

「わかったよ、今日は我慢するよ……。」「ガックリ」

風夜は初春と話をしていると面会時間終了の時間がくると初春は寮へと返っていった。その日に夜、風夜はとんでもない事になるとは思っていなかった。

「ムググ……。」「(苦しい……。)」

風夜は口で息が出来ず苦しい思いをし目が覚めた。すると目の前には御坂妹の顔がアップで見えた。

「あのー、御坂妹さん?何をしていたんですか?と風夜は聞いてみます」

「熱いキスをしていましたとミサカは……。」「

「え!?マジ!!飾利とする前に御坂妹するとわ……。」「(トホホ)」

「いえ、さっきのは冗談ですとミサカは弁解します」

「え！？冗談！？よかった……。ところで、御坂妹、身体のはうはもう良いのか？」

「はい、一時的に研究施設のお世話になって個体の調整する必要があります」とミサカは答えます

「そうか、しばらく会えなくなっちゃうなあ……………」

御坂妹が風夜に近づいてくると風夜の顔に御坂妹の顔が近づいてくると唇同士が触れ合った。

「御坂妹！？」

「これは、前のお礼ですとミサカはいいます」

こうして風夜のファーストキスが御坂妹にとられてしまったのであった。そして、御坂妹はドアの方へ向かって行くのを風夜は見ていた。最後に一言、風夜は聞いた。

「帰ってきたら、一緒に遊んだりしような！」

「はい！とミサカは笑顔で答えます」

そして、次の日の昼下がり。

コンコンと病室の扉をノックする音が聞こえた後ビリビリ姫が入ってきた。

「やつほー、お見舞いにきたわよ！」

「お！珍しいお方が来た！？」

「なによ、その言い方は？」

「あはは、冗談だよ」

風夜がそう言った時に御坂は両手に持った黒い紙袋の1つを風夜に渡してきた。

「これ、お見舞いのクッキーよ」

「なぬ！？クッキーですとお手製ですか？」

「そんな訳ないでしょ！私にどんなキャラ期待してるのよ？」

「不器用なりに頑張って作ったクッキーには「萌え」があるんだ・  
・・・」

「なに？私に萌えを期待してたわけ！？」

「その通りですよと、朝比奈風夜は答えます」

「あの子たちのマネしてるんじゃないわよ！！」

「「ぷ、ぷはははは」」

2人は同時に笑い出した。

「まさか、アンタに助けられるとは思ってなかったわよ」

「僕もだよ。まさか、ビリビリ姫を助ける事になるとは思ってなかったよ」

そこで2人の間に沈黙が数分続いた。

「ねえ？聞いてもいい？？」

「なんだ？」

「なんで、私を助けようと思ったの？」

「なんでって、困っている友達はお助けしないだろ？」

風夜は平然な顔で答える。御坂は頬を赤くしながら「ホント、私の周りにはお節介さんが多いんだから」と呟いた。

「どうした？ビリビリ姫？」

「いや、なんでもないわよ。それじゃ、次の人の所に行つて来るわ！」

御坂はそう言つと風夜の病室から出て行つた。すると、僕と御坂がしていた会話と同じ会話が当麻の部屋から聞こえて事は言うまでもなかった。

## 第24話（後書き）

これにて、シスターズ編終了です。

## 第25話

今日は初春と久しぶりのデートをする事になった風夜は自分の部屋で浮かれていた。

「久しぶりのデートだよ！楽しみだなあー！」

そう風夜がデートの準備をして初春との待ち合わせの公園へと向かい歩く。その時、風夜は何を思ったのか常盤台中学の寮の前を通っていく事した。

「良い天気だなあー！」

風夜がそう言いながら歩いている目の前に、御坂の姿が見えたその隣には見知らぬ男の姿があった。

「なにやら嫌な予感がするんですけど・・・」

風夜の勘が当たるのであった。美琴が風夜の姿に気が付くと手を振りキラキラと光を放ちながら走ってくる。

「あははは、ごめん待ったー！」

風夜は他人のフリをしながら美琴の隣を通りすぎると、後ろからダダアと走ってくる音が聞こえたと同時に風夜の腹部にタックルを決めてくる美琴がいた。

「待ったって言うてるだろうがああああ！！無視すんなやあコラ  
あああー！！」

「グフウ!?（見事だぜ、ビリビリ姫！オマエに教えることはもうないぜ!）」

風夜はそう思いながら地面に倒れこむ。すると、風夜の上に乗った美琴が顔を赤くしながら小声で言ってくる。

「お願い話をあわせて!!」

「え?これから飾利とデートだから……」

美琴と風夜が話していると寮の窓という窓から常盤台の女子生徒がヒソヒソと話している中に黒子の声が響いてきた。

「まあ!!お姉様!!私というものが在りながら男と逢い引きとわあー!!」

美琴はそれを聞くと同時に風夜を引っ張り走り出した。

「いやあああああ」

「って、話を聞けええええええ!!!!!!」

美琴に引きずり回され公園へと辿り着いた風夜は美琴に聞いた。

「で、どうしたんだよ?」

「うん。さっき私の隣にいた人は海原光貴<sup>みづはらみつぎ</sup>って言うんだけど……」

「その海原って奴が着き惑ってくると……諦めさせるために僕に

彼氏役をやれと・・・・・・・・」

「うん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

風夜が考えていると美琴の後ろに当麻の姿が見えた。

「おーい。当麻!」

「おっ!! 風夜!!」

「調度良い所に来てくれた。手出せ。」

「なんだよ。いきなり・・・・・・・・。ほら・・・・・・・・」

「あと、頼んだ!!」

風夜は当麻の手にタッチをし、今までの事を話をし走りだした。

「おい!?! 風夜!!」

「わりい!! これから飾利とデートなんだよ! ビリビリ姫の事頼んだぞ!!」

当麻は呆然と立ち尽くしていると後ろから美琴は聞いてきた。

「アンタ、やるの? やらないの?」

「やります・・・・・・・・」

こうして当麻と美琴のカップル？が出来上がったのである。その頃、風夜は初春との待ち合わせ場所へと到着した。

「（飾利はどこかいねえ？）」

「風夜さーん！ここですよ！」

初春は風夜の姿を見つけ手を振っている。

「飾利！遅れてごめん！」

「ぜんぜん、いいですよ（ニッパ）」

「（怒ってるよ・・・）飾利？クレープ食べるかあ？」

風夜は目の居るクレープの移動販売する車が見えたので指差しながら聞いてみると目をキラキラさせながら頷く初春がいた。

「いいんですか！？風夜さん？」

「うん！待たせちゃったお詫びだよ」

風夜はそう言うときクレープを買いに近づくとチラシを貰った。

「なにに、100名様にゲコ太ストラッププレゼントかぁ・・・」  
「」

風夜と初春が手を繋ぎながら近づいて行くと何処かで見たことの姿が4つくらい見えた。当麻と美琴はどっちが自分のクレープなのか

言い合っているし、佐天さんと白井さんはその2人を見ながら楽しそうにクレープを食べている。

そこに初春と風夜が近づいていくと佐天と白井が近づいてくる。

「お！！手なんか繋いでラブラブですねえ。お2人さん！！」

「まったくですね。初春？うつつをぬかして風紀委員の仕事をお忘れないうちにしてくださいね？」

白井がそう言った時、美琴がとある違和感を感じていた。

## 第26話

違和感を感じていた美琴は周りを見渡してみると、昼間からシャッターが閉じている銀行が目に入った。

「ねえ、あの銀行。なんでシャッターが閉じてるの??」

美琴がそう言った瞬間、銀行の入り口が爆発し中から銀行強盗が3人出てくるのが見えた。

「銀行強盗ですよ!? 白井さん!」

「初春、怪我人の有無の確認を」

「わかりました! 風夜さん、御坂さん、佐天さんはここに居てください!」

白井は初春にそう言うのと銀行強盗の所に向かっていく。

「ジャッジメント風紀委員ですの。器物損壊および強盗の現行犯で拘束します!!」

銀行強盗は白井の姿を見るなり笑い出した。

「ギャハハハハ、どんな奴が来たかと思ったら風紀委員の人手不足なのか?」

銀行強盗の1人が白井に近づいてくる。

「そこをどきな。怪我するぜえ! お嬢ちゃん!!」

「……そういう三下の台詞は死亡フラブですわよ?」

白井はそう言うのと近づいてきた強盗をなぎ倒すと強盗の主犯者である人物は手の平に炎を出しながら白井に話し出した。

「パイロキネシスト発火能力者。はっ、戦う前に手の内を見せてどうするんですの?」

「お前、わかってるのかよ!? 超能力だぞ」

主犯格らしき人物がそう言った瞬間、白井は相手の後ろにテレポトシドロップキックを背中に食らわし鋼鉄の釘を主犯格の服に突き刺した時、初春の声が聞こえてきた。

「その子をどうする気ですか!?!」

「うるせえ!?!」

そう強盗の3人目が関係のない子供を人質にとろうとするのを初春が目撃し止めようとしていた。

「はなせよ!?!」

「嫌です!?!」

「この尼がああ!?!」

銀行強盗の3人目が初春の左頬に蹴りを入れたあと子供を離し車に乗り込んだ。それを見た白井が止めようとした時、風夜と美琴の怒りに満ちた声が響いた。

「黒子！！！！！！！！！！」

「白井さん！！！！！！！！！！」

「ここからは個人的に手出させてもらうわよ！！！！」

「あの野郎！！！！人の彼女を蹴るとはいい度胸してるじゃねえかあ！！！！！！！！」

2人はそう白井に言う。と風夜は指を鳴らすポーズを、美琴はコインを親指打ち上げ落ちてくるコインをとこっちに向かってくる強盗が乗った車目掛けは放った。すると、レールガンに当たった車は宙を舞いながらカマイタチの乱れ打ちを食らった。

それを見た主犯格がブツブツ言い出した。

「思い出した……。風紀委員ジャッジメントの中に捕まったが最後、心も体も再起不能にする最悪な腹黒空間移動能力者が居ると！！！！」

「だれのことですの……。！！！！！！？」

「その空間移動能力者を虜にする電撃使い「超電磁砲」レールガンとプラス1名」

「誰がプラス1名だあ！！！！」

風夜はそう主犯格に怒鳴った。しばらくして、警備員アンチスキルが到着し銀行強盗たちを連行して行った。

こうして、風夜と初春のデートが、はちやかめちゃかで終わってしまっただけであった。

## 第27話

夏休みもなから半分過ぎた頃、道端を歩いているのケータイが鳴り出した。着信音はLEVEL5 judgmentである。なぜにこの曲かと言うと初春のお気に入りなので初春だけの着信音に設定してある。

「おー！飾利からだ。もしもし？」

「風夜さんー！」

「どうした？飾利？」

「あー、そのー。明日ヒマですか？」

「ヒマだよ」

「明日なんですかど・・・ええーい、初春！電話かわりなさい！」

初春が話している途中で佐天がケータイを奪い取ったらしい。

「風夜さん！明日なんですけど私達、水着のモデルやることになったんですよー！」

「おおー！すごいな、それー！」

「で、風夜さん？初春の水着姿見たくないですか？」

「ちよつと、佐天さん！？な、なにを言ってるんですか！？」

「どうですか？風夜さん？？」

風夜は考える、もの凄く考える。

「飾利の水着姿……見たい……」

「風夜さん？なにか言いました？声が小さくて聞こえませんか？」

「見たいです！！飾利の水着姿！！」

「ですよねえー！！それじゃ、明日水着会社まで来てくださいねえ  
！」

「明日は、飾利の水着姿が……。 （ブフォ）やばあ……。鼻血  
が！！」

風夜は初春の水着姿を想像した瞬間、鼻血が出てきたので慌ててテ  
イッシュを鼻の中に詰め込んだ。

次の日、風夜は佐天が言っていた水着会社へと向かった。すると、  
そこには美琴、初春、佐天、白井、固法。そして婚后<sup>こんごう</sup> 光子<sup>みつこ</sup> がい  
た。

「……………ゲエ！？」

「あら、あなたは、朝比奈風夜様じゃありませんか」

「（おい、頬を赤くしながら寄ってくるなよ……………）」

「あら、なぜ婚后さんが朝比奈さんを知ってますの？」

「それはですね……………」

白井と他4名が聞いてくると風夜は、どこで婚后光子と知っているかを話し出した。

それは一方通行との一戦を交える前に身体検査システムスキャンを行うために常盤台中学まで出向いた所から始まったのである。

「ここが常盤台か……………って、なんでここまで来なきゃならんのだぁ!!」

そう、僕の居る高校には風力使いの能力を測定する機材がないらしく、遥々、常盤台まで来たのである。

「ええーと、プールはどこかいねえ？」

風夜がプールを探していると目の前に平安時代にも居そうな髪型をした女性が歩いてくるのが見えた。

「あのーすいません。プールにはどうやって行けばいいですか？」

「はい？プールですか？でしたら、あー行ってこー行ってそー行けば良いですわよ！」

「あ、ありがとうございます」

「いえ、ところであなた。どうしても言うなら番号とアドレス交

換をしても良いですわよ？」

婚后光子はそう言うなり扇子を開き鼻と口を隠した。

「……………いえ、遠慮します」

「（ガクッ）そう遠慮なさらずに！！」

婚后はそう言うなり風夜が手に持っているケータイを奪い取り勝手に登録と交換をしていた。そうしているうちに放送が流れ出した。

「朝比奈風夜さん。プールへと来てください。」

「やべえ！？」

風夜は婚后に教えてもらった通りにプールへと向かっていった。風夜がプールに到着すると同時に「ドゴンッ」と音を立てながら水柱が立つのが見えた。風夜がプールサイドに来ると美琴の姿があった。

「あら？アンタも身体検査システムスキャンをしに来たの？」

「そうだよ。うちのプールじゃ小さいし測定用機材がないらしいから」

「ふーん」

「それでは、次。朝比奈風夜さん、準備してください」

風夜と美琴が話していると、計測係の人が風夜に準備をする様に言

つてきた。

## 第28話

風夜は準備をし番号の書かれた台へと上がる。

「それでは、自分の好きなタイミングで能力を発動してください」

風夜の能力判定は、自分の最大の力を込めたカマイタチを連射する事である。

「フウー」

風夜は深呼吸を数回し指を鳴らした……………。

「連射回数6回。総合判定……………」

そして、システムスキャン身体検査終了。

「とまあー。こんな感じかなあー」

風夜は婚后とシステムスキャン身体検査の話を4人にした。

「で、身体検査の結果はどうだったんですか？」

初春と他の人たちもそっちの方が気になるらしく聞いてくる。

「みなさん！！気になるのはそっちではないでしょ！！」

婚后がツツコミをいれているのを見てると初春がこっちに近づいてくるなり腕を組んできた。それを見た婚后は慌てて近づいてく

る。

「ちょっと、あなた！！そのお方から離れなさい！！」

「なんで離れなきゃいけないんですか！？」

初春はそう言つと婚后は風夜の空いている腕を組んできた。

「（なんだ！？この両手に花の状態は！？）」

風夜は顔が半分にやけていると初春がニッパ―と笑いながら話し掛けてきた。

「風夜さん？なんでもにやけているんですか？？」

「なあ！？名前で呼ぶなんて！！あなたはそのお方の何なんですか！？」

「何つて、私は風夜さんの彼女ですかど！」

「え！？か、彼女！？」

婚后は彼女つと言つ言葉を聞き固まつてしまった。風夜も初春のニッパ―と笑つた顔を見ながら一生懸命弁解をしていた。

「本当に、何もなかったからあ……。飾利、信じてよ！」

「本当ですか？」

「本当だよお」

「わかりました。信じます」

風夜はホツとしていると、会社の案内係が走ってくるのが見えた。そして、案内係の指示に従い男女別れて水着を選び着替えていた。真っ先に更衣室から出てきたのは風夜であつた。

「一番乗りいいー！！！！ってあたりまえかぁ・・・」

風夜がそう呟いていると、女子更衣室から悲鳴が聞こえてきた。

「キャー！！！！！！！！！！へ、へビィィ！！！！！！」

「へ、へビィ？！？」

風夜は慌てて女子更衣室の中に入っていった。すると、そこにはナイスボディの少女達が居た。

「みんな、似合ってます・・・って、本当にへビがいる！？」

風夜もビクリしていると初春だけが平気な顔をしへビの頭を撫でようとしていた。

「はいはい。怖くないですよー」

「飾利！？やめろって！？」

風夜は初春を止めようとしているがへビが怖くて近寄れないでいるとへビは風夜の方へと頭と体を伸ばしてきた。

「どわあ！？こっちに来るなあ！！」

風夜はそう叫びながら撮影場所へと逃げって行ったのであった。そして、数分後、5人が出てきて撮影が開始されたのであった。なんだかんだと撮影が進み途中でシステムエラーが出たらしく風景がキヤンプ場で止まった所で係員が来て言っていた。そして、なにやら野菜やら肉やらいろんな材料が置いてあるのに気が付くと、みんなの声が揃った「カレーを作ろう！！」と。

個法が役割を決めえよう言い出した。初春と佐天は材料を切る係、美琴はご飯を炊いている（自分の能力で・・・）僕と婚后はやることなくねえ・・・。

「飾利？何か手伝おうか？」

「うーん。こっちはとくに・・・頼む！手伝わしてくれ！！（このままあの子と居たら何かおきそうなんだよ！！）なら材料切るの手伝ってください」

「わかった！！飾利と佐天さん。材料を上に向けて」

「あ・・・、はい！！」

初春と佐天は風夜の言う通り上に投げてみると風夜は指を鳴らし力マイタチを発生させると見事に綺麗に切れたと同時に力マイタチを発生させた時の風で初春の水着のヒモがほどけるのを見た風夜は「ブファ！！」と言いながら気絶をしまったのであった。

風夜に聞く所そこから先の記憶とどうやって寮まで帰ったのかも覚えていないらしい・・・。

## 第29話（前書き）

今回と次の話には「ぱっつあん」さんの作品「とある魔王と絶対能力者」の主人公が登場します。

## 第29話

最近、白井の様子が変だと初春から知らせを受けた風夜と美琴の2人は第一七七支部の正面玄関の隙間から覗きこんで見ていると白井は窓の外を見ながら頬を赤くしていた。

「どうしたんだ？ いたい……」

「さあ……。なんか彼氏が出来たとか何とか言ってたわよ！」

「え！？ マヂィ！？」

「うん……」

風夜と美琴は顔を見合わせていた。

「僕……、白井さんはあっちの趣味の人だと思っていたんですけど……」

「私も……。むしろ、私は毎日、被害受けてるんですけど」

2人が話していると後ろから初春と佐天の声が聞こえた。

「2人とも、どうしたんですか？」

「風夜さんと御坂さんじゃないですか？ どうしたんですか？」

「飾利と佐天さん！ 白井さんに彼氏が出来たって本当なのか！？」

「本当ですよ」

「しかも、私達と同じクラスの男子なんですよ！」

佐天が言い終えた頃、風夜たちが覗きこんでいた扉が勝手に開いた。  
……。みんなは体重を支えきれずに倒れながら部屋の中へと雪崩  
れ込んだ。

「」「」「どわあああああ」「」「」

倒れた順番は下から風夜、美琴、佐天、初春の順です。

「なんで、僕の上にビリビリ姫なんだよ。飾利がよかった……」

「

「なによ！その言い方！？」

「初春！？早くどいて！！」

「佐天さん。ちょっと待ってください……」

4人はそう言いながら「扉を開けた人は誰」と思いながら前を見るとそこには固法が仁王立ちで立っていた。

「あんたたち？そこで何をしてるの？」

「（お、おいしい……）」

「いやぁー」

「その――」

「あはははは………」

個法の質問に答えながら白井の方を見てみると、こっちの出来事について何の反応も示さない。むしろ、立ち上がりレポートし外に出て行ってしまった。それを見た風夜、初春、佐天、美琴は後を追いかけようと即座に立ち上がり外に出て行った。

「どこ行つた？」

4人は支部から出て周りを見渡してみると、現れては消える白井の姿を見つけ後をつける事にした。

「なあ、飾利？白井さん、今まで見た事ないほどウキウキしてるぞ………」

「そうですね。風夜さん」

風夜と初春は顔を見合わせ話している後ろでは、美琴と佐天が風夜と初春の姿を見ながら思っていた。

「（まさか、初春と白井さんに先を越されるとは思ってなかった……）」

「（まさか、黒子と初春さんに先を越されるとわ……）」

2人はそう思いながら凹んでいる姿をみた風夜と初春の頭の上に？が3つ位出ていた。そして、後をつける事、数時間、白井はとある公園でレポートをするのをやめ、ベンチに座り誰かが来るのを待

っている様に見えた。

しばらくして、風夜たちがいる入り口とは逆の入り口から男の人が1人、白井の方へと歩いてくるのが見えた。

「なあ？もしかして、歩いてくるのがそうなのか？？」

「うーん。あ、そうですよ！」

「なかなか、かつこいいと言うか可愛い顔だなあ……………」

「風夜さん！？そんな趣味あつたんですか？」

「佐天さん！？違うから！！」

「ところで、白井さんの彼氏の名前は何ていうんだ？」

風夜がそう初春と佐天に聞いた時、KYな少年（当麻）の声が聞こえてきた。

「おまえら、そこで何やってるんだ？？」

「…………どわああああ……………」

「まった。このパターンかよ……………」

風夜はまた3人に下敷きになりながら白井の方を見ると「なんで、あなたたちがここにいますの！？」と言いながら、アワワアワと指を刺しながら震えていた。その隣には頭の上に？を4つくらい出している少年がいた。

そして、一番上にいる初春が風夜に白井の彼氏の名前を言ってきた。

「風夜さん。白井さんの彼氏の名前は「虎王龍牙」さんですよ」

風夜は名前を聞いたと同時に口から白い物（魂）を出しながら気絶をしていた。

### 第30話

風夜は、今、ベンチで初春に膝枕をしてもらって寝ている。そうそう、美琴は当麻を追いかけて行き佐天は美琴と当麻の2人を追いかけていった。

「風夜さん？大丈夫ですか？」

「ああ、なんとか生きてます・・・」

風夜はなんとか起き上がり初春の顔を見た。すると、2人の前に仁王立ちしてこちらを睨んでいらしゃるお方1名。

「「どうしたんですか？白井さん？」」

風夜と初春が声をあわせて聞いてみる。

「「どうしたも、こうしたもありませんわ！！なんで、あなた方がここにいるんですの？」」

「いやぁー、白井さんに彼氏が出来たと聞いたもんでひと目見てみたいと思ひまして・・・」

「あははは・・・、白井さんが龍牙さんとの位ラブラブなのか見たくて」

風夜と初春が白井に後を着いて来た理由を話していると、白井の後ろにいる少年が白井と初春に話しかけてきた。

「黒子、初春。そいつ誰だ？」

「龍牙さん、こちらのお方は朝比奈風夜さん。初春の彼氏ですよ。」

「……………。なぬ！？初春、彼氏いたのか！？」

「私だって彼氏くらいいますよ！」

初春は頬を膨らませ口をツンとさせている所に風夜が話し掛けた。

「飾利？この人が白井さんの彼氏さんか？」

「そうですよって、さっき言ったじゃないですかぁ！」

「あの状況で、名前言われても覚えられないから！！！」

初春と風夜が話をしているのを見ながら虎王龍牙は白井に言った。

「この2人、ラブラブし過ぎじゃないか？」

「そ、そうですね」

2人が何を話しているかがわかった初春が言い返す。

「龍牙さんと白井さんだってラブラブじゃないですかぁ！！！」

初春がそう言うのと白井は「もういやですわ。初春たらー！」と言いつつながら初春を追いかけでしていた。その間に風夜は虎王龍牙に話し掛けた。

「はじめまして。僕は朝比奈風夜」

「どうも、虎王龍牙です」

2人は自己紹介をし同じベンチに座り初春と白井の追いかけてこを見ながら話をした。

「えーと、虎王龍牙くんは中学生だよな？」

「はい。朝比奈風夜さんは高校生ですか？」

「うん、そうだよ。呼び方は風夜でいいよ」

「わかりました。風夜さん。俺の事は龍牙でいいです」

風夜は思った虎王龍牙くんは見た目怖そうだけど本当は結構優しいのではないかと。そして、いずれ大切な人を守るため手を組んで戦うかもしれないと……。

風夜がそう思っている時に白井に両頬を伸ばされて初春が話し掛けてきた。

「そういへば、システムスキャン身体検査の結果はどうだったでしゅか？」

「教えてなかったけ？レベル3からレベル4になんとか上がったよ」

風夜は初春に向かってピースをした。その時、虎王龍牙が風夜の能力について聞いてきた。

「風夜さんの能力ってどんなのですか？」

「僕の能力は風力使い（エアロシューター）だよ。龍牙くんのは？」

「俺のは吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>です」

虎王龍牙の能力を聞いた風夜は「やべえ。ちゃんと勉強しとけばよかった」と思った。そう考えているとあたりは暗くなり、白井の門限とかがあるため帰る事にした。

もちろん、虎王龍牙は白井を、風夜は初春を送り届けた。

### 第30話（後書き）

次から乱雑ポルターガイスト開放編にはいる予定です。

### 第31話（前書き）

途中からオリジナルです。

### 第31話

第10学区から初春のクラスに転校生が来たらしい。名前は春上<sup>はるうえ</sup>衿<sup>え</sup>衣<sup>い</sup>。

「で。なんで僕がここに呼ばれた理由って……」

風夜は今、居る場所は春上の引っ越してきたマンションに来ると、そこには、美琴、佐天、初春、白井が居た。

「風夜さんがヒマでよかったですよ」

「この山積みになった荷物を運び込めと言いたいのかい？」

「そうですよ」

「……僕が運ぶよりも白井さんのテレポートで中に入れてもらった方が早いと思うんですけど？」

「その手がありましたね」

「（今更かよ……）」

なんかんだ、話しながら荷物を整理し終わると、初春と白井は警備<sup>アンチス</sup>員<sup>キル</sup>と風紀委員の合同会議があると言い出て行ってしまった。残ったのは、春上と佐天、美琴、風夜に4人になった。

「さって、みんな。ちょっと出かけようか」

佐天がそう言うと、みんな外に出て行つた。そして4人で外を歩いているとクレープ屋さんが目に入る。すると佐天が走りよる。

「クレープ、食べましょうよ！」

「そうね」

「食べるのー」

「僕も食べ……」

風夜は途中まで言いかけ止めると建物の影を見ていた。そこに、佐天が話し掛けてきた。

「どうしたんですか？風夜さん」

「あ、いや、なんでもない……」

風夜はそう言い返すと食べたいクレープを店員に言つた後、建物の影を再度見たが人の影はもう無かつた。

そして、店員がクレープを渡しにきて食べようとしている春上と風夜の隣で、佐天がポルターガイストについて話した。しばらくして、美琴が「ゲーセンへ行こう」と言つてきたので行くことになった。

ゲーセンに到着する直後に初春が会議が終わつたと電話があり待っている。と初春と白井が合流しやりたいゲーム機の方に行ったりしていると、美琴がプリクラの方を指差していた。

「ねえ！みんなであれ撮らない？」

「いいです」

「そうですわね」

「うんなの」

初春、佐天、白井は美琴の提案にとおりプリクラを撮るため移動しだした。

風夜だけ外を見ており動こうとしないでいると、今度は初春が話しかけてきた。

「風夜さん？外を見てどうしたんですか？」

「飾利。ごめん……、ちょっと、僕抜けるわぁ」

「え、ちょっと、風夜さん！」

風夜は理由を初春に告げることなくゲーセンから出て行き路地裏へ入り誰もいない廃ビルの前の広場へと出ると風夜は立ち止まり話した。

「さっきから人の後ろを、こそこそと着いてきているんだ？」

周りを見渡していると、物陰から風夜と瓜二つの顔し年齢は同じくらい、違うのは髪型、1人はツインテールもう1人はポニーテールの女性であるというだけだった。

「あら？気付いちやった？」

「なんで気付いちゃったのさあー？」

「僕と同じ顔!？」

風夜は自分と同じ顔をした2人組の少女を見てビクリしていると2人は話し出した

「そんなに驚かないでくれる？」

「そうですよー」

風夜は何か何だか解らないでいる。

「ホントに覚えてないのね？それもそうよね……（クスクス）」

「うんうん。だって覚えてる訳ないもんねえー（クスクス）」

「僕のこと、知ってるのか……？」

2人は風夜の過去を知っているような様な喋り方をしてきた。

「知ってるも何も私達とあなたは同じ研究施設で生まれた姉弟なんだから。ねえ、風夜？」

「うんうん!」

「研究施設ってなんだよ!？それに生まれたって……」

風夜はその言葉を聞いた途端、研究施設の液で満たされた容器を見ながら何かを話している白衣を着た研究員の姿が脳裏に浮かんだ。

「なんだ！？今は・・・」

風夜は呟きながら右手で右目を抑える姿を見た緋炎と凍夜がクスクスと不気味な笑い声を出しながら近寄ってくる。

「思い出してきた？でもねえ、私達、あなたに生きていられると困るのよ」

「うんうん。困る」

2人はそう言うとしばらく黙り込む、そして、殺気をみなぎらせ2人同時に風夜へと走り寄ってくる。

「記憶が戻って私達がオリジナルにしたことをバラされたら困るのよ！！！！」

風夜は2人の殺気に反応し指を鳴らすと、また2人が笑いながら言ってきた。

「クスクス・・・。あの人、そっくりね」

「あははは。うん。そっくり！」

2人目掛け風夜のカマイタチが放たれた時、緋炎と凍夜も指を鳴らすと手から炎の刀と氷の刀が現れた、2人は風夜のカマイタチ目掛け刀を振るうと炎と氷の波動が放たれ、それを粉碎した。

### 第31話（後書き）

オリキャラ

名前 緋炎「ひえん」

髪型 ポニーテール

口癖 「うんうん」

性格 インデックスと同じ

能力 炎撃使い

名前 凍夜「とうや」

性格 お喋り好き

髪型 ツインテール

能力 氷撃使い

風夜の顔や髪型はティエリア・アーデ似です

### 第32話

あいつらは「ヤバイ」相手はせずに逃げろと風夜は本能で感じ取っているが風夜は逃げようとしないうと緋炎が小声で話し出した。

「うんうん。本当にそっくり……。イライラする位に」

緋炎は眼つきをさらに変え風夜目掛け走ってくるなり、炎の刀で斬りかかってくる。

「ねえ？風夜？死ぬ前に教えてあげるよ。私達を使ってやってた実験ってね、薬を使ってレベル6を誕生させるために最適な分量を調べる事……。つまり、クローンを使っての人体実験なんだよ！」

風夜は緋炎の攻撃を避けながら言い返そうとした時、また脳裏に浮かんできた風景は自分の腕に注射器で薬を投与してくる女性は何かを言っている。

風夜は攻撃をかわす動作の途中で止まってしまった。緋炎は見逃さなかった。

「それじゃなあ。風夜！」

緋炎は刀を風夜に斬りかかろうとした瞬間、凍夜の声が響いた。

「緋炎！！ストップ！！命令変更。風夜はを生け捕りにして来いって」

凍夜の声を聞いた緋炎は刀を風夜にあたる直前で止め残念そうな声を出した。

「わかったよ。新しい所長のわがままには困ったなあー。で？なんで生け捕りなのー？」

「所長がね、面白いこと思いついたんだって」

風夜は2人が話しに夢中になっているうちに逃げ出そうとした。

「（わけのわからん2人組に生け捕りになんかになってたまるかよ・・・）」

忍び足でこの場から逃げ出そうとする風夜。廃ビルの出口まで後数cmまで来た瞬間、風夜のケータイが鳴り出した。

「この着信音は飾利だ・・・・・・なんてタイミングなんだ・・・どこかで見てるんじゃない？」

風夜は後ろを振り向くと、緋炎と凍夜がこちらを見ながら何かをブツブツ言っている。

「なあに？どこに行こうとしてるのかあ？」

「うんうん。生け捕りにするんだから逃げないでよ？」

2人は1歩また1歩と近づいてくる、風夜は猛スピードで逃げ出した。すると緋炎と凍夜は慌てて追いかけた

「待つてよ！風夜！」

「待つててばあー！」

「誰が待つつかよ!？」

風夜は逃げる。猛スピードで逃げる。あの2人に捕まると初春たちに迷惑をかけてしまう気がするから。そして必死に逃げる事、数時間……。

「なんとか巻いたぞ……。さて、飾利に電話しなおさなきゃな……」

初春に電話しなおすとワンコールで出る。

「風夜さん！今日、花火大会あるんですよ！よかつたら一緒に行きませんか？」

「花火大会!?!行く!」

「そうですか。じゃ花火大会の会場で合流って事でいいですか？」

「うん！わかったよ！それじゃ後で!」

風夜は初春と花火大会に行く約束をし電話を切ると後ろから、緋炎と凍夜の声が聞こえた。

「あらら、随分余裕そうじゃない？」

「うんうん。余裕そうだねえ？」

「ゲエ!?!」

風夜と緋炎、凍夜に見つかり初春たちと待ち合わせの時間まで再び追いかけてここがスタートした。

待ち合わせ時間10分前

今、初春はドキドキしながら待っている。

「（風夜さん。私の浴衣姿を見て何て言ってくれるかなあ）」

その姿を見ながらニヤニヤしている人が数人いる。

佐天、美琴、春上、白井、龍牙の5人であった。

そして、待ち合わせ時間になっても風夜の姿が現れない。待っても待っても現れない。

「風夜さん……どうしたんですかね……………」

初春はそう言うとなを向いてしまった。それを見た佐天が「たくさん、人がいて見つけれないでいるだけだって」と言いながら初春を元気づけようとしている。白井と龍牙も初春の近くにくる。そして、美琴は風夜に電話をすと言い出し電話をするが、すべてが留守電へと切り替わってしまった。

### 第33話（前書き）

書きたいこと書いていたら、ゴチャゴチャになってしまいました。

すみません・・・・・・。

### 第33話

風夜と連絡が取れなくなった事を初春、佐天、白井、春上、龍牙に話す美琴。それを聞いた初春が何回も何回も電話をかけるが美琴の時と同じで留守電へと切り替わる。

「風夜さん……………」

初春がそういいながら風夜の心配をしていると春上が独り言を言いながら何処かにあるいて行ってしまった。

「どこにいるの？」

「春上さん!!」

初春がそれに気付き近づいて行くと突然地面が揺れ出した。初春は慌てて春上に抱きつきポルターガイストが治まるのを待っていると外灯が倒れてきた。

「きゃああああ（風夜さん）」

初春は声を上げながら目を閉じる、そして数分後、女の声が聞こえてきた。

「君たち、大丈夫？」

「え？」

初春が目を開けてみると、そこにはパワードスーツ着た誰かが倒れ

てきた外灯から2人を助けに来ていた。そして、スモークで見えなかった顔が見えてくる。

「テレスティーナさん!!」

初春を助けてくれたのはテレスティーナであつた。そして初春と春上は一応、検査をした方がいいという事になり病院へと運ばれていた。

それから、白井が今回の事件の犯人は春上ではないのかと疑い、それを聞いた初春が怒り喧嘩状態になったり、拘留されているはずの木山が釈放され眠っている子供たちを冥土返しにいる病院に集めて目を覚まさせる方法を考えている事が解つたり。

そして、今回の事件の犯人がテレスティーナである事が解つた美琴が研究施設へと殴り込みをしに行くと特製の駆動鎧を着たテレスティーナが居た、それに子供たちを運び出そうとしている所だった。

「今の車に子供達が乗ってたのよ。追いかけていいの?」

「騙したわね・・・」

「怒つた?」

「何をたくらんでいるのよ?」

「キャハハハハ。何をたくらんでいるのって聞かれて答える奴はいねえよ!このバアカア!!」

テレスティーナの回答にたいして頭に來た美琴が電撃を放とうとし

た時、キャパシティダウンを発動させると美琴が頭を抑え苦しみました。そこに、テレスティーナが話し掛けてくる。

「いいざまだなあ！そうだ、お前に良い物見せてやる。来いよ！！」

「はい……テレスティーナ様」

美琴はその声を聞こえる方を見ると、そこには風夜と少女2人がいた。

「アンタ！こんな所で何やってるのよ？」

「……………」

美琴は風夜に話し掛けるが答えてこないし、キャパシティダウンで苦しんでいなかった。それを見た美琴は「なんで？」と思っていた。

「なんか、考えているから教えてやるよ。なんでキャパシティダウンで苦しんでいないかと言うとだな！今、流れてるのはなあ、お前に合わせて作ったキャパシティダウンなんだよ！！で、こいつはさあ、薬の実験のために作られたクローンで回収したはいいんだが、友達に手を出すなってゴチャゴチャ五月蠅いからよぉー、ありったけの薬を投与して私の言うことだけを聞くようにしたんだよ！」

「あんだ……、何言ってるのよ……」

「クツクツク。おい、風夜。こいつ、殺っちまえよ」

「はい。テレスティーナ様」

テレスティーナは顎で美琴を指しながら風夜に命令した。すると、風夜はなんの抵抗もなく返事をし美琴へと近づいて行くと、容赦なく蹴りをいれたり髪を掴み上げたりしている。それを見ている女性2人が笑いながら言い放つ。

「クスクス。どう？友達に容赦なくボコられる気分は？」

「あつはははは。そうだあ、1つ教えてあげるよ。どうして風夜があんな事になっていたかって事を」

凍夜が風夜がどうしてもあなつたかを話し出した。

「記憶を無くしたのは投与した薬の分量が調度、記憶を消去する量だった。それになんで花瓶が落ちたかと言うと私の能力で研究所に捨てられた風夜の上に落としたのよ。そうすれば、バンクに登録されていた朝比奈風夜が記憶喪失になった事になる。でもね、記憶を取り戻して今までのこと話されたら困るから消そうとした。だけど、新しい所長テレスティーナ様が面白いことを思いついたから生け捕りにしたのよ。そうそう、オリジナルはね……」

凍夜がそこまで話した時には美琴は気を失って倒れていた。

「おい、風夜。そのくらいでやめとけ」

「はい……」

テレスティーナが風夜に言うのと蹴ったりするのをやめる。それを見たテレスティーナは無線で「いいモルモットが手に入った」と仲間に言っていた。

### 第33話（後書き）

風夜の居た研究施設では風夜の<sup>オリジナル</sup>DNAを使いクローンを作りレベル6を誕生させるのに最適な薬の分量をクローン使い実験していた。

ここで作られたクローンたちは人並みの寿命がある（歳を重ねるとレベル6になる可能性があるため）

風夜<sup>レフリカ</sup>だけが研究施設内で能力がレベル3以上にならなかったため捨てられた。

### 第34話

気を失って倒れている美琴を見つめる風夜。

「（僕はビリビリ姫になんてを……。それにあいつ（テレスティーナ）の命令に逆らえない……。）」

風夜は美琴に近づき謝りたい、でも口や体が自分の意志では動かない。薄っすらとある意識の中で思っているとテレスティーナの声が聞こえた。

「おい。レプリカども、早く特製の駆動鎧（テレスティーナの着ているの色違いはヘルメットなしで手の部分だけ素手）を着てこい」

「……はい。テレスティーナ様」

3人は返事を返すと特製の駆動鎧を着るために施設内に入り着て出てくると最後のトラックに乗り込み移動して行った。

その後、婚后に助けられ病院へと運ばれた、美琴が目を覚まし初春たちへ今までの出来事を話し出した。

「初春さん、アイツがテレスティーナと一緒にいたわ……」

「え??? 本当ですか!? 御坂さん!!」

「うん。でも、今までのアイツじゃなかった。なんか、操られている感じだったわ」

美琴はベットから起き上がり眩きながら病室から出て行こうとする。

「のん気に寝てる場合じゃないのよ。早く子供たちとアイツを助けないと……」

突然、美琴の前に佐天が立ち塞がり美琴に聞いてきた。

「いま、あなたの目には何がみえてますか？」

美琴はその言葉を聞きみんなの顔を見た。

「ごめん、私。また見えなくなつた。みんなに迷惑かけて」

「迷惑なんかじゃないです。でも離れて心配するくらいなら一緒に苦労したいんです。だって、それが友達じゃないですか！」

「そうですよ！私達も居るんですから！！」

「うん」

「みんな、ありがと……」

みんなの言葉を聞き第177支部に戻りアンチスキルと連絡を取ると「動きたくても動けないじゃん。こっちにも限界があるじゃん」とかえしてくるので、佐天が言い返す。「限界を超える事に意味があるんじゃないんですか！！早くしないと子供たちと風夜さんが危ないですよ！！」すると「もう少し時間をくれ」と言つて切れた。

しばらくして、アンチスキルから監視衛星の映像が来た。すると、トラックの後ろに青い車が後を追っている事に気が付いた。

そう、トラックの後を追っていたのは木山であった。

「待つてろ。この私が必ず……」

木山がそう言った時、トラックの荷台が開くとパワードスーツを着た集団が降りようとしていた、するとそこに電撃が飛んでくるとトラックは横転した。そこには、美琴と白井が居た。木山が運転する車が止まった後、固法が運転するバイクが到着し初春と佐天が木山の車へと移動すると同時に、後方からパワードスーツの集団がきていた。

「ここは、わたくしが食い止めますわ！お姉様は木山春生の護衛を！」

「ちゃんと追いつきなさいよ。黒子！」

白井が美琴にそう言うとかバンの中から大量の釘出てきた。

そして、木山が運転する車と固法のバイクの荷台には美琴をのせ走りだした。そして、トラックが偽者とわかり子供達を乗せたトラックは別の研究施設へと到着していることがわかったのでそっちへ移動する事になった、するとテレスティーナの乗ったロボット現れ車を攻撃してくるわ。いろんなことがなんとか倒し子供達のいる施設へと到着すると、目の前に3体の駆動鎧がいた。

3体の駆動鎧を見た初春が呟いた。

「風夜さん……」

「テレスティーナ様からの命令。1、施設へ近づく者の排除。2、生命の有無は問わない」

風夜はそう呟くと美琴たちに向かいカマイタチを放ってくる。

「風夜さん！！やめてください！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

初春が叫ぶが反応が無かった。それを見ながら緋炎と凍夜がクスクスと笑いながら言ってくる。

「ねえ、無駄よ。風夜にはあなたの声聞こえてないから」

「そうだよ、無駄だよ」

2人がそう言ったあと美琴が呟く。

「なにが無駄よ。私達の友達になんてことしてくれるのよ」

美琴から電撃が緋炎と凍夜に放たれるがかわされ、こっちに近づいてくる。

「クスクス、当たらないわよ」

「そうだよ」

2人は指を鳴らし手に炎の刀と氷の刀を出し走り出す。美琴も砂鉄のソードを出し走りより緋炎の攻撃を防ぐが凍夜までは気が回らないでいると、白井が凍夜の相手をすると言い出しレポートで凍夜を何処かに連れて行く。

そして、風夜は初春と佐天に容赦なくカマイタチを放っている。

### 第35話（前書き）

なんか、訳がわからなくなってますが一応載せます。

すいません・・・・・・。

### 第35話

――美琴――

美琴は緋炎と斬りあっている。

「どうしたのさあー。レベル5の力ってこんな物なのー??」

緋炎は美琴の攻撃を受け流しては挑発をしていると前髪から電撃を少し出している美琴がいた。

「あんたって、『冗談を言う時のアイツよりムカツクわねえ!!』」

美琴はそう言うのと砂鉄のソードを一旦、砂鉄に戻し空气中を漂わせる。

「無駄だよ!そんなことしても!!」

「ふん、無駄かどうか試してみる?」

美琴はそう言うのと砂鉄を緋炎の上で再度ソードの刃へと変える。それを見た緋炎は慌てて回避すると何かを弾く音がする、その方を見ると美琴がコインを打ち上げていた。落ちてきたコインを打ち出し緋炎の胸へとレールガンを叩き込んだ。

「人を舐めるとこういう事になるのよ。覚えておきなさい!」

美琴はレールガンを胸に食らい気絶した緋炎に見る。

――黒子側――

白井は凍夜連れテレポートし、今は施設の地下にいる。

「ねえー、隠れてないで出ておいでよぉー!」

凍夜はそう言いながら白井を探していると、どこからか白井の声が聞こえてきた。

「別に隠れてるわけでわざわざいませんの」

「なに言ってるのさぁー」

白井の一言を聞き周りを見渡すと階段の途中にいる凍夜、すると足元に白井が現れると足を蹴られ転げ落ちて行く。

「痛ッ……。このくらいで……。」「

凍夜が立ち上がるうとした瞬間、白井が上にテレポートし釘を手にしながら言ってくる。

「戦いを有利に進めるには地形を把握することですわよ」

そう言った瞬間、釘を駆動鎧の関節や制御盤にテレポートさせ突き刺したあと、腹部に思いつきり鉄拳を叩き込んだのち手足を縛り吊るし上げていった。

――初春・佐天――

2人は風夜の放つかマイタチから逃げている。

「はあはあ、初春。私、もう走れない……」

「佐天さん。頑張つて下さい!!」

2人が止まっている横をかマイタチが通り通り抜けて行く。通り抜けた時の風圧で佐天が転んで動けないでいる所に、風夜が近づいてきた。

「風夜さん!!こんなこと、もうやめてください!!」

初春が風夜の目の前に立ち両手を広げている。風夜はその姿を見ても顔の表情を変えず指を鳴らそうとした。その時、初春の瞳から大粒の涙が流れていた。それを見た風夜は呟き出した。

「か……ぎ……り……」

「風夜さん!戻ってきてください!!」

初春の言葉を聞いた風夜が頭を抑え苦しみだした。そこに初春と佐天がかけより話し掛けていると、どこからかテレステーナの声が聞こえた。

「ああーあ、やっぱり、出来そこないにこいつらを始末しろは無理だったかあ!」

頭から血を流しているテレステーナが風夜に近づいてくる。頭を抑えながらで見ている風夜が初春と佐天に言った。

「飾利、早く子供達を……」

「風夜さん!？」

風夜はそう初春に言うのとテレスティーナ目掛け走りよると抱きつき動けないようにすると大声を出した。

「早く行け!!こいつは僕が抑えるから!!」

2人は風夜の声聞いたと同時に施設に向かい走り出して、それを見たテレスティーナは右腕で風夜を殴ったりして離そうとするが、なかなか離れない。

「離れる!!!出来そこないが!!!」

テレスティーナはそう言うのと超電磁砲の装備された左腕で風夜を殴り飛ばした。それでも上手く動かない体でテレスティーナを行かせまいと抵抗する風夜。

その間に初春、佐天、美琴、白井、木山が子供達のいる場所へと辿り着いた。

### 第36話

今、木山が眠っている子供達を見ながら呟く。

「やつと見つけた……」

初春は春上の入ったカプセルを叩きながら「春上さん！」と言っている。とキュインとキャパシティダウンの音が響きだした。

「この音は!？」

その音を聞いたと同時に美琴、初春、白井が頭を抑えながら苦しみます。すると、子供達を運び込んだ時に使ったであろう巨大エレベーターが下がってくる。エレベーターが初春たちがいる階で止まると中から、血を流したテレステイナが風夜を引きずりながら降りてくる。

「お前らがここに居るってことは、あの出来そこないどもはやられたって事かあ!？」

テレステイナが大声で叫びながら美琴と白井に近づいていくと「これは、さっきの礼だあ!！」と言いながら蹴り飛ばす。

それを見た木山が「きさまー!!」と叫びながらテレステイナに走りよっていくが腹部に蹴りを入れられうずくまってしまった。

テレステイナは初春の方へ風夜を引きずりながら近づいて行く。

「キャパシティダウンですね!？改良されたキャパシティダウンは

スピーカーが大きすぎて移動できないって！！そんな、大掛かりな物を制御できるのは、私たちが、さっきまでいた中央管制室……」

「だからなんだあー？スピーカーなら、この施設のそこらに設置してあるんだよ。なんなら1個1個壊して回るわあー??」

テレステイナはそう言いながら初春を叩きとばし倒れこむ初春を見ながら笑いながら言い放った。

「キャハハ。確か、この出来そこないと頭に花を咲かした女はカッブルだったよなあ！おい、お前に良い物見せてやるよ！！目の前で彼氏と友達がレベル6になる瞬間をよおー！！」

テレステイナはそう言うなり風夜の着ている駆動鎧にケーブルをさせるだけさすと子供達の入ったカッセルをコントロールしているパソコンと接続すると、テレステイナは胸元からファーストサンプルの入ったケースを取り出す。

「そ、それは、ファーストサンプル!?」

「そう、私の体から取り出された能力体結晶だよお！！」

テレステイナと木山が話をしていると、突然スピーカーのスイッチが入ると佐天の声が響いてきた。

「モルモットだかなんだか知らないけど、私の友達に手を出すなああああああ！！！！！！」

佐天は、そう叫ぶと金属バットらしきものを中央管制室で振り回し

てパソコンをブツ壊すとキャパシティダウンの音が止まった。するとファーストサンプルを持ったテレスティーナの腕に白井がテレポ―トさせた何かが当たり手から落とした。

「しまった!？」

ファーストサンプルを落としたテレスティーナが焦っているのと美琴が電撃を出しテレスティーナを投げ飛ばす。するとテレスティーナは、偽レールガン在美琴に構えながら大声で喋りだす。

「もういい、わかったよ。テメエら全員、この施設ごと吹き飛ばしてやんよあ!!これは、テメエの能力を解析して作ったもんだ、テメエのレールガンよりも強力にな!!」

「モルモットだの家畜なの、どうだけ自分を哀れんだらそこまで逆恨みできるのよ?」

「エレクトロマスター、レベル5。テメエなんざあ、この都市まちにとつてみれば、ただのデータ。きやははは、減らず口をたたくデータだああああ!!!!」

「学園都市はね、私達が私達でいられる最高の居場所なの私1人じやできない事がみんなとならやり遂げられる。私の私だけの!!」

美琴はそう言う落ちてきたコインをテレスティーナに向け弾き飛ばすと、テレスティーナも偽レールガン在美琴目掛け打ち出す。

美琴が全力で放ったレールガンはテレスティーナのレールガンを粉碎しテレスティーナの胸に直撃し吹き飛ばした。

その後、ファーストサンプルを手に入れた木山により子供達は目を覚ました。

「先生、どうして目の下にクマがあるの？」

「いろいろと忙しくてね……」

「ほんとだ、髪も伸びてる……」

「でも、先生だ……」

「木山先生だ……」

「お前達……」

「（衿衣ちゃん、私の声聞いてくれてありがとう……）」

「うんなの……」

風夜は初春の肩を借り、この光景を見ながら意識を失い倒れこんだ。

### 第37話（前書き）

今回は短いです。しかも、なんか意味がわからなくなってしまう  
した。

### 第37話

ガールズ  
乱雑開放事件が終わって数日たった頃、風夜が目覚めました。

「え!？」

風夜は目を疑った。目の前には病院のベッドに横たわっている自分が居た。そのベッドと脇には頭に花を咲かした少女が僕の手を握りながら大粒の涙を流しながら泣いている。隣にはその少女の肩を抱きながら慰めている黒髪で長髪の少女がいる。病室の入り口付近には、ショートヘアの少女とツインテールの少女が下を俯いている。ツンツン頭の少年は何か言っている。

その光景を見て思った。

「そうか……。僕、死んだのか……。」

風夜がそう思いながら目を閉じようとした時、僕の名前を呼ぶ女の子の声が聞こえた。

「風夜さん!風夜さん!!お願いですから、目を覚ましてください・  
……。」

その声を聞いた風夜。

この子は僕のために泣いてくれている。

この子にこれ以上悲しい思いをさせてはいけない。

そう思った時、ベットに寝ている自分の体に魂だけの自分が吸い込まれていった。そして、目を開けると初春が力強く僕の手を握っていた。

「か・・ざり・・。」

風夜が初春の名前を消えるような声で呼ぶと、今まで下を俯いていた3人の女の子はビックリした顔をしている。そして、大粒の涙を流していた初春が風夜の顔を見ながら言い返してきた。

「ふ、ふうやさん・・・!？」

「飾利・・・。ただいま・・・。」

「おかえりなさい。風夜さん・・・。」

風夜は初春の声を聞いてニッコと笑い返した。初春も涙を流しながら笑い返してくれた。

風夜が目覚まして数日後、集中治療室から一般病棟へと移動し部屋で初春と話をしながらイチャついていると佐天、美琴、白井、龍牙くん、当麻が病室へとゾロゾロと入ってきた。みんなに、イチャついている所を見られ佐天に「ラブラブですねー!お2人さん!」と言われからかわれた。

そして、みんなで笑いながら話をしていると、病室のドアをノック

して入ってくる人がいた。

### 第37話（後書き）

次回からはオリジナルストーリーで行こうと思っています。

### 第38話

風夜の病室に入ってきた白衣を着た女性が風夜の見える所まできた。その時、風夜は何かを考えている顔になった。

「（この人、どこかで見た気が……）」

風夜が思っていると白衣を着た女性が話し掛けてきた。

「朝比奈くん。はじめまして、今日からあなたの担当医師になった  
たかの ふうか鷹野風香です。よろしくね！」

「よろしくおねがいします……」

風夜が素っ気ない返事を返すと、初春が先生に質問をした。

「先生、風夜さんはいつ退院できるんですか？」

「この様子だと、明日にでもしていいかもね」

先生が答えると初春は風夜に抱きついてきた。

「風夜さん！！よかったですね！！」

「飾利！？みんな見てるから！？」

抱きついた初春が周りを見ると佐天と白井はニヤニヤと見ている。  
当麻と美琴は頬を赤くし目をそらしていた。

「もう、初春たらー。大胆なんだからー」

「そうですわよ」

初春は佐天と白井にからかわれている所に先生が話し掛けてきた。

「朝比奈くんには良い彼女さんと友達がいていいわね」

先生はそう言うのと病室から出て行った。

「（やつぱり、小さい檻（研究所）で育てるより、大きい檻（学園都市）で放し飼いにした方が育ちが良いわね・・・（クスクス）それにしても、テレスティーナって女、使えないわね。あの施設とデータをあげたのに風夜をレベル6に出来ないなんて・・・」

風香はそう思いながら自分の研究室へと入って行くと2人の少女がいた。

「あら、緋炎と凍夜。居たの？」

「はい……。風香様……」

「あなたたちも使えないわね……。電撃姫とテレポーターに負けるなんて。なんのためにテレスティーナと同行させたか解らないじゃない……」

風香がそう言うのと緋炎と凍夜は顔を俯かせ何も答えなかった。その前には不気味な笑みを浮かべた風香が居た。

次の日（風夜の退院日）

風夜はバツクの中に入院セットをしまい服を着替え病室から出ようとした。すると妙な心臓の高鳴りがしてきた。

「うつ．．．．．」

風夜は胸を抑えうずくまるが、一瞬で高鳴りが消えていった。

「なんだったんだ。今の．．．．？」

風夜は、あまり深く考えずに病院から出て行つた。外には初春、佐天、美琴、当麻、白井、龍牙くんが待っていた。

「みんな、おまたせ！」

「さあ。みなさん帰りましょう！」

初春はそう言うと言つと風夜の手を握り歩き出した。それを見た白井も龍牙くんの手を握り、美琴は当麻の手を出しては引つ込めの繰り返しだった。佐天は「なによ。私だけ仲間ハズレじゃん!？」と思ひながら歩き出し寮へと帰って行つた。

そして、次の日。風夜が目を覚ました。

「ふわあああ。よく寝た。歯でも磨くか．．．．」

風夜は洗面所へ行き歯ブラシに歯磨き粉をつけ口の中へと入れ歯を磨きながら鏡を見ると自分の顔が妙に女の子ぽくなっている事気がついていた。

「・・・・・・・・・・なんか女みたいな顔に・・・・・・・・」

そう思いながら目線を下に下げていった、すると胸に谷間があることに気がついた。

「???なんだ、この胸の膨らみは??」

風夜は自分の胸を触ってみると

ムニムニ・・・・・・・・

「柔らかい・・・・・・・・・・。え???なんで???それに声、女の子みたいな声になってる!?!」

風夜は慌てふためきだした。

「どうしよう・・・・・・・・。とりあえず、飾利に言わなきゃ!!」

風夜は初春に電話をしようとケータイを手取る所まできた。

「待てよ・・・・・・・・。今、僕の声って女だよな?これってまずくない・・・・・・・・」

風夜は電話をするのはやめ、「緊急事態発生!!」と打ち込んだメールを初春へと送信した。

### 第39話

風夜が初春へとメール送り数時間後、部屋のドアを叩く音が聞こえてきた。

ドンドン。

「風夜さん！？どうしたんですかぁー??」

初春の声が聞こえたのでドアのカギを開ける風夜。カギが開いたので中に入ってくる初春。

「風夜さん??」

「かーざーりー!!!!」

「誰ですか!」

初春はそう言うなり掴みかかってきた。

「あなた！風夜さんの家で何やってるんですか!!」

「僕だよ!!風夜だよ!!」

「嘘を言わないでください!!風夜さんは男の子です!けして、女の子ではありません!!!!」

初春はそう言い張り、風夜の言うことを信じてくれなかった。それから風夜はどうやったたら初春が信じてくれるかを考えた。

「（うーん。どうしたら信じてくれるんだ……。そうだ、佐天さんなら信じてくれるかも！）」

風夜はそう思い佐天を自分の寮へと呼ぶ事、数時間後、佐天が風夜の部屋へと到着した。

「風夜さん???どうしたんですかあ??」

佐天も初春と同じように入ってくる。そして風夜と目が合うなり「風夜さん!?女装する趣味があつたんですか!？」と言ってきた。

「佐天さん。僕にそんな趣味はないよ……………」

「冗談ですよー」

佐天はそう言いながら風夜の背中をバシバシと叩いてくる。

「い、痛いよ……。佐天さん……………」

風夜が痛がつている所に初春が近づいてくると、風夜の顔を両手で自分の顔の近くまで引き寄せマジマジと見ている。しばらくして初春が聞いてくる。

「本当に風夜さんなんですか??」

「そうだよ!風夜だよ!」

風夜が答えると初春がクイズを出してきた。

「本当に風夜さんなら、このクイズに答えられますよね??」

「・・・・・・・・」

「私と風夜さんはキスした事ありますか??」

「ないです!!」

それから初春と風夜しか知らない事をクイズにして出してきた。風夜は全て答えると初春はやっと目の前に居る女の子が風夜である事を信じてくれた。

「それにしても、なんで女の子になっちゃったんですかあ??」

佐天が風夜に聞いてくる。

「いやあー、僕が聞きたいよ・・・・・・・・」

風夜と佐天が話していると初春が何か思い当たるような顔をしながら言ってきた。

「もしかして、テレスティーナさんが風夜さんを操るために使った薬の中に性転換の薬が入ってたんじゃないや・・・・・・・・」

それを聞いた風夜は大声を出しながら泣き出した。

「ふええええん」

風夜の泣く姿を見た初春と佐天は思った。

「（女の子より、可愛い泣き方をするなんて・・・）」

2人がそう思っている所に涙目の風夜が上目遣いで初春と佐天に聞いてきた。

「このまま女の子だったらどうしよう？それに服やら下着わ・・・」

初春と佐天は上目遣いの風夜を見ながら答えた。

「大丈夫ですよ。そのうち治るかもしれないですよぉ？」

「そうですよ！！風夜さん！！」

「そうだと良いんだけど・・・」

風夜の返事を聞いた2人は立ち上がり風夜の部屋から出て行くことをする。

「2人ともどこに行くの??」

風夜がそう聞くと、初春と佐天がニッパァーと何かを企んでいそいそと笑顔を見せながら答える。

「風夜さんに、とても似合う服を探してきてあげますからねえ！！」

この返事を聞いた風夜はとても嫌な予感がした。そして待つ事、数

時間後、買い物袋を両手に抱えながら帰ってきた2人……。帰ってくるなり、佐天がケータイをマイクのように持ちながら話しました。

「えー、風夜さんに似合いそう服をありったけ買ってきました！まず最初は……。これ！！！」

佐天は買い物袋から1着の服を風夜に見せつける。それを見るなり風夜の顔が青ざめた。

「佐天さん……。なぜにメイド服？」

「風夜さんがこれを着て「お帰りなさいませ。ご主人様」って言うてほしくて！」

「却下！！」

「だめですか……。なら、これ！！」

「ちょー！！常盤台中の制服じゃん！？」

「これを着て、御坂さんと白井さんの真似してくださいよ！！」

「それ……。面白そうだね！！」

常盤台の制服を持った風夜はノリノリで着替えてきた。

「そじゃ、ビリビリ姫のマネ……。私には、御坂美琴って言う名前があるのよ！！いい加減覚えろ！！！！」

風夜が美琴のマネをすると2人して拍手をしてきた。

「続きまして、白井さんのマネ……ジャッジメント、参上ですの!!」

初春と佐天と風夜がお腹を抑えながら笑っていると玄関の方から殺気と呆れた空気を感じるの見てみると美琴と白井が3人の方を睨んでいる。その後ろには当麻が居た。

## 第40話（前書き）

祝40話！！

誤字脱字が多いですがよろしく願いします。

## 第40話

風夜はこちらを睨んでいる2人に恐る恐る聞いてみた。

「ビリビリ姫と白井さん？なぜ、ここにいらっしゃるんですか？？」

2人は超怖い笑顔で答えてきた。

「なぜ、ここにいかると言うかね・・・」

「佐天さんが、面白い物を見せてくれるって、連絡をくれましたの・・・」

それを聞いた風夜は佐天を見ると「私、何も知らなあーい」顔をしていた。それから、3人は美琴と白井の前に正座をし1時間くらい怒られた。

2人からの説教が終わり、風夜がなぜ女の姿になったのかを説明する。

「カクカクシカシカで女の子になってしまいました・・・」

風夜の説明を聞き2人は信じられない顔をしていた。

「本当に性転換する事があったんだ・・・」

「信じられませんか・・・」

「信じられないのは、僕ですよ・・・。急に女の子になって、こ

れからどうすればいいんですか……」

風夜が落ち込んでいると初春が後ろから抱きつき慰めてきた。

「大丈夫ですよ……。絶対にもとに戻す方法があるはずですから……」

「飾利……」

風夜と初春がバカカップルぶりを見せ付けている所に再びドアをノックする音が聞こえてきた。風夜と初春は2人だけの世界に入っていてノックの音に気がつかないので白井がドアを開けると龍牙さんの姿があった。

「お邪魔します……。風夜さん、本当に女になったんですね……」

「そうですね……。まさかの性転換ですよ……」

風夜はそう答えるとまた落ち込んでしまった、それを見た龍牙くんが「落ち込んでいる時は外に出て散歩をするのがいいですよ」と言ってきた。

当麻は美琴に例の如く追いかけられ、佐天は宿題が終わってないことを思い出し帰って行ったので、龍牙くんの言う通り4人だけで散歩に出ることになった。

風夜は着慣れないミニスカートを気にしながら歩いている。

「飾利……。このミニスカートって恥ずかしいな」

「なんでですか?？」

「パンツ見られそうで……………」

「風夜さん。気にしたらいけないですよ」

「うん…………。それにしても、さっきから僕を見ながらコソコソ話しているのはなんでかな?」

風夜は初春に回りの人がコソコソ話をしているのを聞いてみると、目の前にどこかで見たことのある顔の2人が歩いてきた。

「……………」

「……………」

2人と目が合い固まる風夜。

「あら?風夜じゃない?」

「ほんとだ。風夜だあ」

「緋炎と凍夜…………。なんでここにいるんだ…………?？」

「なんでって、私たちだって買い物くらいするわよ?」

「うん。買い物だよ」

「それにしても、あの薬、本当に効くんだ!？」

「やっぱり、あんたたちの仕業だったのかよ……」

風夜、初春、白井は溜め息を吐きながら俯く、すると龍牙くんが緋炎と凍夜に聞いただした。

「なあ？風夜さんを元に戻す方法を教えてくれないか？」

「教えないって言ったらどうする？」

「どうするつもり？？」

緋炎と凍夜がそう答えると龍牙くんは剣を構える。

「あら？こんな街中で殺ろうっていうの？」

「ダメだよ。凍夜。まだ時じゃないから」

「そうね……。元に戻す方法だけど……」

「……（ゴックン）……」

「ないわよ……。でも、2、3日で薬の効力が切れるわ、もしたら元に戻るわよ（それに、女の姿をした風夜には興味ないから）」

風夜たちは凍夜の言葉を聞き喜びあった。それを見た緋炎と凍夜は羨ましそうに見ていた。

「（私たちも風夜みたいに生きてみたいし生活してみたい……」

）  
「」

そう心に思いながら風夜たちの横を通り、買い物の続きをするために歩きさつて行った。2人の後ろ姿を見た初春は「2人とも、辛そうな背中をしているなあ」と思いながら見ていた。

## 第40話（後書き）

感想等、お願いします!!

## 第41話

風夜が性転換し2日目、とりあえず散歩に出る事にした。

「うーん、やっぱり慣れになあ……」

風夜はミニスカートをひっきりなしに気にしていると、目の前の横断歩道を渡ってくる当麻と美琴を見つけた。

「あれは当麻とビリビリ姫じゃ………、え??なんか手繋いでるけど………」

風夜は見間違いないかと思い目を擦り再度見みると、やっぱり当麻と美琴が手を繋いでいた。

「ええ!?!?どういう事だあ!?!?これは、飾利と白井さんと佐天さんに連絡しなきゃ!?!?」

3人へと連絡をいれると、初春は「本当ですか!?!?今すぐに行きます!?!?」と言っていた。

白井は「今、龍牙さんとデート中ですよ」と言ってきたので「じゃ、ビリビリ姫が当麻にとられても良いんですね?」と言い返すと「2人で、そちらに行きますわ!?!?」と言っていた。そして、こう言う話題にすぐ乗ってくる佐天は「今………。夏期講習で無理なんです……。」と残念そうな声で断ってきた。

それから待つ事、数分後。白井が龍牙くんを手を繋ぎながらテレポートしてきた。

「ラブラブですねー！。お2人さん！！」

「朝比奈さんこそ初春とラブラブじゃないですか！」

風夜と白井が話している横では頬を赤くした龍牙くんが居た。そして、さらに数分後、初春が「風夜さー！ーん！」と手を振りながら歩いてきた。

「おー！飾利・・・・・・・・」

「どうしたんですか？？風夜さん??」

風夜は初春の初めてに私服姿を見て、その可愛さのあまり固まってしまった。

「風夜さあー！ん。どうしたんですかあー！。風夜さあー！ー！ー！ー！ん」

初春は固まった風夜の前に立ち話し掛けていると風夜が呟きだした。

「飾利の私服姿、カワイイ・・・・」

「風夜さん？何を呟いているんですか??」

初春が聞き返すと風夜は我に振り返り目の前にいる初春の肩を掴みながら「飾利！！その白いワンピース。もの凄く似合ってるしカワイイ！！」と言うと初春は頬を赤くし「ありがとうございます」と答えた。

そんな2人に龍牙くんが話し掛けてきた。

「ラブラブしている所、悪いんですけど早く追いかけないと見失いますよ……」

風夜と初春は龍牙くんの言葉を聞き慌てて当麻と美琴の歩いていった方を電柱の影から覗きこんだ。すると、初春と白井、龍牙くんが呟いた。

「「「本当に、手を繋ぎながら歩いてるよ!?!」」」

「なあ!! 本当だろ!!」

風夜がそう言うところ人は頷いていた。それから、4人は当麻と美琴の後をつけることにした。

「もしかして、付き合っているですかね?」

「まあ、手を繋いでる位だから付き合ってるんだろうね」

「それにしても、お姉様。殿方が居るんなら教えてくださいさってもいいですのに」

「恥ずかしくて言えなかったんだろ」

4人を見た人たちはこう思っているだろう「なんだ? この4人は? 怪しいなあ……」と……」

それから、当麻と美琴はマックへと入って行く。その後ろを風夜、初春、白井、龍牙くんが気付かれないように入っていった。それか

ら、ポテトフライを注文し当麻と美琴の会話がギリギリ聞こえる席に座り耳を立てていると。

「とーうーまー。アーンしてー！ー！」

「美琴。恥ずかしいってー！」

などと2人が話しているのを聞き4人は、頬を抓りあった。

「これ．．．．夢じゃないよな．．．．」

「はい．．．．。痛いです」

「そうですね．．．．」

「ああ．．．．」

風夜、初春、白井、龍牙くんは、2人は付き合っているのか聞きに行こうかどうしょうか話していると、風夜と美琴の目が合った。

「．．．．．」

「．．．．．」

風夜たちが居る事に気が付いた美琴は当麻に呟いた後、こっちに向かってくる。

「あんたたち！ーなんでココにいるのよ！ー！ー！」

「「「「あはははは．．．．．」「「「「」

それから、当麻と美琴に後を付けていた事を話、なんとかお許しをえた後に2人は付き合っているのかと聞くと当麻と美琴は頬を赤くし頷いていた。

「いつからですかあ！？御坂さん！？」

「そうですねー！！お姉様！！！」

「いつからかなあー！！。結構前（妹たちを助けてもらった後）からだけど……………」

初春と白井に色々と質問をされている美琴を横目に当麻、風夜、龍牙くんの3人はポテトを食べながら「これから、先、波乱万丈になるぞ」と話していた。

それから、それぞれのカップルに別れそれぞれデートをする事となり別々の方向へと歩いていった。

その頃、風香は研究室で不気味な笑みを浮かべながら「そろそろ、緋炎と凍夜に動いてもらおうかしら…………。風夜をレベル6にするために」と呟いていた。

## 第41話（後書き）

感想等、お願いします。

## 第42話（前書き）

ちよつと、短いです。

## 第42話

性転換し3日目。

「暇だ………」

風夜は部屋で1人で呟いていた。

「飾利は、予定が入っているから遊べないって言ってたし」

部屋の中をゴロゴロしていると、ケータイが鳴り出した。風夜はケータイを手に取り画面を見ると知らない番号からだった。

「誰だ??この番号??」

モシモシ

「風夜だよね??」

「……その声は!?!」

「そうよ。凍夜よ」

そう風夜に電話をしてきたのは凍夜であった。

「で、なんだ?」

「なァーに、ちょっと一方通行と戦った操車場まで来てほしいのよ……」

「嫌だと言ったら?」

「そうねえー、あなたの彼女を殺しちゃつかもよ?」

「え???そこに飾利がいるのか!」

風夜が大声を出しながら凍夜に聞く。

「ええ、いるわよ。手足を縛ったうえに口にテープ張られてるけどね・・・」

「わかった・・・。何時に行けばいい??」

「来てくれるんだ。なら22時くらいに来てくれるかしら?」

凍夜は時間を言い終えると電話を切った。

「これでよろしいでしょうか?風香様」

「ええ、それでいいわよ」

「人質をとるのヤダなあ・・・」

緋炎が呟くと凍夜も同感という顔をしながら初春の方を見ながら頷いた。それを聞いた風香が言い放った。

「人質をとりたくない?あんだ達が使えないからこついう事をしたんじゃない」

風香は言い終えると初春の顔に手を伸ばし頬を触り、口に張っているテープをとりながらながら呟いた。

「あの子がレベル6になる瞬間を見れるのよ。あなた運が良いわね」

「風夜さんに何をする気ですか!?!」

初春が聞くと風香はクスクスと笑いながら白衣のポケットから能力体結晶を取り出した。

「それは、能力体結晶!?!」

「そうよ!でもね、テレスティーナが持っていたのとは違うのよ」

「違う??!」

「彼女が持っていたのはインストールするタイプだったけど、これは体内に直接埋め込むタイプなのよ」

それを聞いた初春は息を呑んだ。

「安心していいわよ、あなたには使えないから、これは風夜にあわせて作ったんだもの」

風香はそう言うと言車場の入り口を見ながら呟いた。

「早く来ないかしら……。レベル6の誕生を早くこの目で見たいわ」

その頃、緋炎と凍夜は初春の耳元に口を近寄せ小声で話し出した。

「そんなに、怯えないで……。タイミングを見計らって手足のヒモを解きます……………」

「うん。解いたら直ぐに逃げて……………」

初春は2人に小声で話し掛けた。

「緋炎さん、凍夜さん。本当はこんな事したくないんじゃないんですか？」

「ええ……、こんな事したくないわよ……………」

「うん。したくない……………」

「じゃ、なんで??」

「私たちも、オリジナル風夜をあの人に人質としてとられてるのよ……………」

「うん。私たち（レプリカ）を生産するための道具と、能力体結晶の実験体として……………」

「そんな……………」

緋炎と凍夜の話聞き俯く初春、すると操車場の入り口に1つの人影が見えた。風香は不気味な笑みを浮かべながら歩いてくる人影を見ていた。

### 第43話

風夜は凍夜に呼び出された所へとやってきた。

「来たぞ！飾利を帰してもらうぞ！！」

風夜はキレ口調で話し出した。キレ口調の風夜の声を聞いた風香はクスクスと笑いながら答えた。

「ええ、帰してもいいけど、あなたがこっちに来てくれないかしら？」

「それを吞めば飾利を解放してくれるのか？」

風夜はチラチラと初春を見ながら考えていると凍夜と緋炎と目があった。すると目で何かを言っている。

「（なんだ？あの2人？何か合図してるのか？）」

風夜が思っていると凍夜の手から氷の刀、緋炎の手には炎の刀が現れた。その刀を初春へ目掛け振り下ろした。それを見た風夜は「もしかして、さっきの合図は飾利の縄を切るって合図だったか！？なら、かけてやる！！」そう思い、大声で叫んだ。

「凍夜！！緋炎！！そのまま縄を切れ！！！！」

「言われなくとも、やるわよ！！！！」

「うん。切り捨てる！！！！」

風夜と凍夜、緋炎の台詞を聞いた風香が初春と凍夜、緋炎の方を見ると凍夜が初春の手の縄、緋炎が足の縄を切り裂いた。

「2人とも………。裏切るのね??」

「裏切るも何もないわ!! 最初からあなたの下についたつもりはないから!!」

「そうよ。これ以上、あなたの下には居たくないから」

2人はそう言うのと初春を抱え風夜の方へと走り出した。

「そう……。なら、消えてもらえるかしら? この出来そこないの道具が!!」

風香が叫ぶと両目を赤くさせ手を前へと突き出し衝撃波を凍夜と緋炎へと放つ。

「きゃああああ」

衝撃波をくらった凍夜は初春をかばう様に地面を転がり、緋炎は地面にうつ伏せで倒れていた。それを見た風夜は初春の方へと駆け寄った。

「飾利!! 凍夜!! 緋炎!! 大丈夫か!??」

「風夜さん。私は凍夜さんがかばってくれたから大丈夫です」

初春が無事である事が解りホッとしていると、凍夜と緋炎が頭を抑

えながら起き上がる。

「なんで？能力者でも開発を受けている学生でもない、あんたが能力を使えるんだ！？」

風夜が呟くと風香はお腹を抑えながら大笑いをし話し出した。

「なあーに！！木山が使っていた脳波ネットワークを私も使っているだけさ！！あの女は学園都市の生徒を使っていたが、私は能力開発のために作られ培養液の中にいるレプリカどもと脳波をリンクさせているんだよ！！だあかあ！！！！」

風香は話している途中で指を鳴らすと風夜たちの後ろにあるコンテナが真つ二つに切断される、それを見た風夜は啞然としながら呟いた。

「僕と同じカマイタチ……」

「君と同じじゃない、君よりも上のカマイタチだよ。それにだ」

風香は両手を握る、すると、右手には炎、左手には氷の刀が現れた。それを見た4人は「こいつ、只者じゃないと思った。そして、凍夜と緋炎が能力を発動させ切りかかる体勢に入ると風夜が止めに入った。

「おい……、凍夜、緋炎。飾利を連れて安全な所に行け……」

「何を言っているんですか！？その役はあなたでしょ！！」

凍夜が言い返すと風夜が怒りで満ちた声で言い返す。

「いいから、さっさと行け！！あいつは僕がぶっ飛ばす！！！」

その声を聞いた凍夜と緋炎はビクツとなり何も答えずに初春を抱きかかえ走りだそうとした。すると初春が風夜に話し掛けた。

「風夜さん……………必ず帰ってきてください……………」

初春の声を聞いた風夜はニコツと笑いながら「ああ！！」と答え風香の方を向くと指を鳴らす体勢へと入ったと同時に、凍夜と緋炎が初春を連れて走り出した。それを見た風香が笑いながら指を鳴らした。

「はあははは。あの3人に消えてもらうには調度良いわねえ！！」

風夜が初春たちの方を見ると2段積みになっているコンテナが縦に切断され、初春と凍夜、緋炎の上に崩れ落ちてくる。凍夜は両手が塞がれてし緋炎には崩れ落ちてくる物、全てをなぎ払う力はない、だが緋炎が切る体勢へと入ると、何かが風を切る音とコインを弾く音が聞こえると3人に上を衝撃波と、もの凄い音を出した光の線が通り崩れ落ちてくる物、全てを消し去ると男と女の声が聞こえてきた。

「やっぱり、ここね」

「間に合って良かった！！」

風夜たちが声のする方を見ると、そこには龍牙くんと美琴が立ちながら風夜に向かって叫んだ。

「あんた、自分の彼女くらい守りなさいよ!!」

「そうですよ!! 風夜さん!! 初春を傷物にしたら黒子が怖いですよ!!!」

風夜は2人に返事を返すよりも何でココに龍牙ちゃんと美琴が居るのが不思議だしようがなかった。

### 第43話（後書き）

次回から風夜、龍牙くんがタツクを組んだ戦闘を書きます！

うまく書けるかな・・・、龍牙くんのキャラ壊しそうで怖いです・  
・・・。

感想お願いします。

## 第44話（前書き）

今回から、風夜と龍牙くんとタッグバトルのスタートです・・・。

上手く書けてるか不安ですけど読んで下さい。

## 第44話

暗がりから龍牙くと美琴が現れた。その姿を見た風夜は不思議そうな顔をしていた。その顔を見た美琴が聞いてきた。

「なによ？私と龍牙くんがココにいるのが不思議？？」

「不思議に決まってるだろ！！誰にも言っていないのに・・・」

風夜がそこまで言った時、コンテナの上から声が聞こえてきた。

「そうですわよ、あなたは誰にも言ってもせんもの。龍牙さんとお姉様をココに案内したのは、わたくしですから」

風夜が声のする所を見ると白井が立っていた。

「え！？白井さんまでいるんですか！？」

白井を見ている風夜に美琴が話し掛けてきた。

「ねえ、私たちに相談なくいくつて、どういう事よ！！そんなに、私たちが頼りないわけ？？」

美琴がそう言っていると風夜は何も答えられずにいると、白井が風夜の近くへとテレポートをしてきた。

「風夜さん？答えてくれなくてはわかりませんわよ？」

白井の言葉を風夜は聞き消え入るような声で呟いた後、美琴にも聞

こえる声で答えた。

「別に頼りないわけじゃない！」

「なら、いいわよ！」

「わかりましたわ。で、わたくしたちにしてほしい事は、おありですか？」

風夜はその質問に対して、即答で答えた。

「飾利を安全な場所へ連れて行ってほしい……………」

「わかりましたわ……………」

白井はそう答えると初春と凍夜の所へと近づき2人連れてテレポ―トをし消えていった。次に美琴と緋炎が聞いてきた。

「私たちは、何をすれば良いの？」

「なら、この騒ぎを聞きつけてくる野次馬を追い払ってくれ！」

「わかった」

「了解」

美琴と緋炎は1番、都市に近い入り口に向かっていった。

こうして、残ったのは風夜と龍牙くんだけの2人だけになると、龍牙くんが風夜の隣に立ち聞いてきた。

「俺を、ここに残したって事はあのひととの戦闘に参加しろって事ですか？」

「その通りなんだけど、手助けお願いできる？」

風夜が聞き返すと龍牙くんは剣を構えながら答えた。

「喜んで手をかしますよ！！」

「あり「ストップ！！」」

風夜は龍牙くんにお礼を言おうとした時、龍牙くんが止めてきた。

「お礼なら、この戦いが終わって皆と再会した時にしてください！」

その言葉を聞いた風夜は1回頷くと指を鳴らし風香目掛けカマイタチを放つと同時に龍牙くんが斬りかかった。2人が攻撃を仕掛けてくる姿を見ている風香は平然な顔をしながら立っていた。

「いいわねえー、風夜<sup>レブリカ</sup>。良い友達がいて……。私って、そういうのを見ると寒気がするのよ！！」

風香は2人にそう言い放つと炎の刀を風夜の放ったカマイタチ目掛け振り下ろし炎の衝撃波で粉碎したのち、氷の刀で龍牙くんの剣を受け止める。

「うそだろ！？」

龍牙くんは驚いた声で呟いていると風香が炎の刀で斬りかかって来

た。

「驚いている暇なんてないわよ！！」

龍牙くんは風香の斬撃を防いだあと、後ろに飛び風香と距離をとると剣に自分の血液をつけ剣を振り下ろすと、赤い衝撃波が風香目掛け飛んで行く。

「へえー。面白い能力ね？」

風香は龍牙くんの放った衝撃波受け止める姿勢になった所に風夜が指を鳴らす体勢で話し掛けた。

「いいのかよ？受け止めるのは龍牙くんの方だけで！！」

風夜の方を見たときには、すでに最大級のカマイタチ（風夜は6発まで放てる）を放っていた。それを見た風香はクスクスと笑い出した。

「いいわよ、あなたたち！！退屈しないわ！！これだけ楽しめるなら手加減はいらないわねえ！！」

風香は炎と氷の刀を消し目をつぶって右手を龍牙くんの赤い衝撃波の方へ左手は風夜の最大級のカマイタチの方へ向けていた。それを見た風夜と龍牙くんは一瞬だけ風香の姿が一方通行に見えた時、風香が目を開いた。

「仲間の攻撃でもくらええ！！！」

風香がそう言った瞬間、右手に当たった赤い衝撃波は風夜の方へ左

手に当たった最大級のカマイタチは龍牙くんの方へと向きを変え飛んで行く。

「うそぉ!？」

「あの女、まさか!？」

龍牙くんと風夜はあわてて横へと飛び。互いが無事である事を確認したのち風香の方を見ながら2人は声を揃え、1つの事を言い放った。

「「今のは、向き（ベクトル）を変えやがったなあ!!」」

向き（ベクトル）と言う言葉を聞いた風香はクスクス笑いながら答えてきた。

「そうよ。向き（ベクトル）をかえたのよ。一方通行の様にはいかないけどね」

龍牙くんと風夜は、一方通行の様に向きをかえられるって事は、ある意味「最強の盾」を持っているに等しいと思った。

「龍牙くん……。あれ何とかしなきゃいけないな……。」

「はぁ……。そうですね、風夜さん」

風夜と龍牙くんは、向き（ベクトル）変換を使わせないようにするためにどうすればいいか考えてたが、風夜は大声で「あああああ、考えるのはヤメだあ!」と言いながら風香を睨んだ。それを見た龍牙くんはビックリした顔で風夜を見ていた。

## 第44話（後書き）

どうでしたか？

感想、お願いします。

## 第45話

風香は風夜の目を見ながらニヤアと笑いだした。

「いいわね、その目。その目を絶望に染めてから、私の作った能力体結晶を使えばレベル6になれるわ」

風香はそう言うなり手に再び炎と氷の刀を出し風夜と龍牙くんの方へと歩み寄ってくるのを見ている2人は再度指を鳴らす体勢と剣を構える。

「クソ…………。ベクトル変換を何とかしなきゃ」

「本当ですね……………」

2人はそう言い終えると風夜はカマイタチを可能な限り風香に向け連射をし、けん制をしている間に龍牙くんが赤い衝撃波を放つと風香の居た辺りは砂煙で覆われていた。それを見ながら風夜と龍牙くんは「やったのか?」と思いながら見ていると、2人が見えている所と違う所から風香の声が聞こえてきた。

「あらあ???どこを狙っているのかしらあ??」

風夜と龍牙くんは周りを見渡していると、いきなり風夜の後ろに風香が現れ蹴り飛ばすのを見た龍牙くんが風香を剣で横一線に斬るが、斬ったのに感触が無かった。

「え!?確かに斬ったのになんで……………」

「あららら？不思議そうな顔ねー」

風香は、いつの間にか龍牙くんの後ろに立っている。龍牙くんが回りながら斬ろうとした瞬間、風香の蹴りが腹部に直撃し吹き飛ばされた。

風夜は地面に両手をつきながら喋りだした。

「お前！？いったい何をしたんだあ？？」

「あらあ？教えてほしいのお？いいわ、教えてあげるわ」

風香はそう言うと言った風夜の後ろに急に現れたのと龍牙くんが斬った物は何かを話し出した。

「あなたの後ろに行けたのはね、ただレポートしただけよ。で、あの子が斬ったのは風を使って作った残像よ。これでイイかしらあ？？」

風香は説明し終わると不気味な笑みを浮かべながらクスクスと笑っていた。

「（おいおい、手には炎と氷の刀を出せて、一方通行みたいのベクトル変換が出来る上にレポートと風で残像が作れるのかよ・・・・・・。反則じゃねえかあ！？なあ、作者さんよあ！！！！）」

その姿を見てながら風夜が思っていると、龍牙くんが剣を杖代わりにしながら立ち上がりかけている。それを見た風香は不思議そうな顔で話してきた。

「あのくらの蹴りじゃダメなのね……。まあ、あのくらいで気を失われたら力の差を思い知らせる事ができないわよね」

風香は、龍牙くんの方を見ながら言いながら風夜の居る方へと歩いてくるなり、風夜の前髪を掴みながら能力体結晶を取り出し風夜の首元に刺そうとした瞬間、風香が苦しそうに頭を抑えだした。

「やっぱり、不完全なネットワークじゃこのくらいが限界なのね……。命拾いしたわね、2人とも……。ネットワークを完全な物にしたら、またやりあつてあげるわ……」

風香はそう言い残すとレポートをし、風夜と龍牙くんの目の前から姿を消していった。風香が消えていったのを見届けた風夜は、その場に座り込んだ。

「（僕のカマイタチが、全然、歯が立たなかった……。やっぱ、能力体結晶でも使ってレベル6にならなきゃダメなのかなあ……。）」

風夜がその様な事を思っていると龍牙くんがこっちに歩いてくるなり、風夜の頭をぶん殴ってきた。

「いてえ！？急に何するの！？龍牙くん？？」

「風夜さん！！今、能力体結晶でも使ってレベル6にならなきゃダメかなあて思ってたよな？？」

「なんで、解つたの！？」

「初春から聞きましたよ。風夜さんは変な事を思っている時は、す

ぐに顔にでるって」

龍牙くんが言い終わると、白井が初春と凍夜を連れテレポートしてくる姿と緋炎と美琴が走ってくる姿が見えた。

それから、凍夜と緋炎は風夜<sup>オリジナル</sup>を探しに行くと言い去って行き、風夜と龍牙くんは一応、病院へと彼女たちに連れられて行った。

## 第46話

風香から初春をなんとか取り返した風夜が病院から寮へと帰ってきた。

「さあつて、カギをあけ・・・・・・・・あれ??」

風夜がカギを差し込み回しすとカギはなぜか開いていた。

「え?うそ!?なんで!!!??」

風夜は慌てて玄関を開けると見覚えのある靴が2足が揃えておいてあるのが見えた。

「この靴・・・・・・・・まさか・・・・・・・・」

風夜は恐る恐る部屋を覗き込んでみると・・・・・・・・。

「あ!!風夜、お帰り」

「お帰り。風夜」

「・・・・・・・・・・・・・・なんで??お2人が僕の部屋にいますか??」

そう風夜の部屋には凍夜と緋炎がお茶をすすりながら、こつちを見ていた。

「なあ、お2人さんがココにいるんだい??」

「なんでって、私たち行く当てがないのよ？」

「うん、研究所にはもう戻れないから……」

「はあああ」

風夜は頭を抱えながら溜め息をついた。2人はとんでもない事を風夜の言い放ってきた。

「そうそう、私たちも風夜と同じ高校に編入って形で通うことになったから」

風夜は凍夜の言葉を聞いて啞然としながら聞きなおした。

「今、何て言いました？凍夜さん??」

「あら？聞こえなかった？ココで一緒に暮らし、一緒にの学校に通うのよ」

「ふ、ふ、ふざけるなああああ!!!!」

風夜は大声をあげながら、凍夜と緋炎に近づいていく。

「ふざけてなんかいないわよ」

「うん」

「一緒にの学校に行くのは良いが、一緒に暮らすのは却下だあ!!!!」

「なあ、なんでよ!？」

「何であるかあ!!一緒に住んでたら飾利になんて言えばいいんだ!？」

「それなら大丈夫よ。風夜の彼女さんには話してあるから」

「え??？」

「一緒に住んでいいよって言ってくれたから」

「マジ!？」

「うん。私たちは風夜の三つ子って事にしといたから」

風夜はそこから何も言えずに立っている。

「風夜?いつまで、女性服を着ているの？」

風夜は自分の目を下に向けると体が男に戻っていた。

「どおわあ!？」

風夜は慌てて着替えを持ち凍夜と緋炎から見えない所に行き着替えた。着替え終えて凍夜と緋炎の所に戻ると、初春の姿が目に入ってきた。

「飾利!??なんているんだあ!？」

「ええ?凍夜さんから電話がかかってきて風夜さんが男に戻ったか

から見においでって言われたからですよ」

風夜が凍夜の方を見ると、いきなり初春が手を引っ張り玄関へと向かいだした。

「飾利??どうしたんだあ??」

「風夜さん!!これからデート行きますよ!!」

風夜は男に戻った直後に初春とデートへ行く事になった。

## 第47話（前書き）

お待たせしました。

久しぶりの更新です!!

## 第47話

風夜と初春は仲良く手を繋ぎながら歩いていると、2人の目の前に指輪やネックレスを売っている出店が見えると初春は目を輝かせながら近づいて行き、1つの指輪を見ていた。

「どうしたの？飾利？」

風夜は初春の目線の先にある物を見るなり、指を指しながら店員に話し掛けた。

「すみません。この指輪をください！」

風夜は店員に言つと店員はニコニコしながら渡してきた。風夜は初春の手をとり指輪をはめると初春は頬を赤くし俯いた。

「あ、ありがとございます……。風夜さん」

「うん……。似合ってるよ、飾利」

風夜にお礼を言つた初春は頬を赤くしながら出店の方を向くと初春の付けているのと同じ指輪を買い風夜の手をとりはめてきた。

「これで、お揃いですね。風夜さん」

「そうだね。飾利」

2人は見詰め合っていると初春の後ろから、もの凄い勢いで走ってくる少女の姿がいた。その少女は風夜の姿を見るなり勢いよく抱き

ついてきた。

「グッホオ！！いててて？なんなんだよ？いったい？」

「お、お兄ちゃん！！」

「お、お兄ちゃん！？」

風夜は少女の放った一言にビックリしていると、初春が少女に話し掛けた。

「異月ちゃんじゃないですか！？」

「初春先輩！！」

2人は仲良さそうに話しをしている所に風夜が少女に話し掛けた。

「ねえ、君、誰？」

風夜の言葉を聞いた少女は目に涙を浮かべだした。

「お兄ちゃん？私だよ？異月だよ……」

「異月？？」

風夜は頭の上に？を浮かべながら異月の顔を見ていると異月は大粒の涙を流しながら泣き出してしまった。

「お、お兄ちゃんが私の事忘れちゃったよお！！」

異月が泣き出したのを見た風夜と初春が慰め出したが、全然聞く耳持たずないている。それから数十分後、とある公園のベンチにシュンとなり手にはジュースを持っている異月、その隣には異月の顔を覗き込んでいる初春と風夜の姿があった。

「落ち着きましたか？異月ちゃん？」

「あ、はい……。すみませんでした、取り乱してしまつて……。まさか、お兄ちゃんが記憶喪失になつていとは思わなかつたもので……。」

異月の言葉を聞いた風夜は「この子は、まだ僕がオリジナルから作られたクローンつて事を知らないんだな」と思いながら聞いていると、風夜の後ろから声が聞こえた。

「やっと見つけた、異月！急に走つて居なくなるから心配したんだよ！……。」

「そつだよ、異月ちゃん！」

2人の顔を見るなり異月は何かを思い出したような顔をしながら立ち上がったのを見ていた2人の少女が初春と風夜に気付いた。

「あ！？初春先輩……！」

「どうもです！！つて……。もしかしてデート中でしたか？」

「そつですよ……。朱裡ちゃん、莉花ちゃん……。」

2人がニヤニヤしながら聞いてきたので初春は顔を赤くしながら頷いた。それから初春と風夜は朱裡と莉花から質問攻めにあつた。その中、風夜は周りを頻繁に見渡しだした。

「（なんだ？さつきから、胸騒ぎがする……）」

風夜がそう思った瞬間、目の前に白井が龍牙くんと一緒にテレポ―トしてくるのが見えた。

「初春！異月！朱裡！莉花！やっと見つけましたわ！！」

白井は何時もとは違う顔をしながら近づいてきた。風夜は龍牙くんに近づき話し掛けた。

「龍牙くん？どうしたの？」

「風夜さん……。あのですね……。鷹野風香の居場所が解つたんです」

龍牙くんの言葉を聞いた風夜は表情をかえ龍牙くんの両肩を掴み声を荒げながら聞いた。

「どこだ！？風香の居場所は！！」

「ふ、風夜さん！？い、痛いですよ！」

「う、ごめん……」

風夜は力の入っていた両手を龍牙くんの肩から離すと同時に白井が話し掛けてきた。

「風夜さん！あなたにも鷹野風香を拘束するのに協力してほしいですの！」

「協力するよ。で、あいつを拘束する理由は？」

風夜の質問に白井は風夜の耳元で話し出した。

「オリジナルの拉致監禁、並びに認可されていない薬による人体実験を行ったからですわ」

白井の答えを聞いた風夜は再び「協力する」と言いながら頷いた。それを見た白井は龍牙くん、風夜、異月の3人に耳に引っ掛けられる小型トランシーバーを渡してきた。

3人は早速、電源を入れ耳に引っ掛けた。

その姿を見た初春、朱裡、莉花が白井の方を見る。

「なんですの？わたくし達はバックアップに回るんですよ！通行規制はアンチスキルが行ってくれますし、避難誘導は他の支部の方々がやってくれますわ！」

白井の言葉を聞いた初春、朱裡、莉花は第一七七支部へと向かい走り出した。しばらくした時、初春が立ち止まり「風夜さん！これが終わったらデートの続きしましょうねえ！！」と手を振ってきた。

## 第48話（前書き）

今回から、しばらく戦闘パートが続きます。

それでは、どうぞー！

## 第48話

龍牙くん、風夜、異月の3人は風香が居るであろう研究所へと向かい走っている。

「なんで、学園都市の端っこに研究所を作るかな?？」

「本当ですね……………」

「なんでですかね……………」

風夜が龍牙くんと異月と話していると、広い公園らしき所へと出ると3人は急に立ち止まり周りを見渡しだした。

「風夜さん……………」

「ああ……………」

「誰か、居ますね」

3人はただらなぬ殺気を感じていると、目の前の通路から黒いマントを着た3人の姿が現れた。1人は大斧、もう1人は長刀を手にしている。

「なあ、オリジナル?俺、剣を持った男の相手していい?」

「じゃあ、わたくしは制服を着た女でいいわ」

「ああ」

1人が頷くのを見た2人は突然、龍牙くんと異月の方へ突っ込んでくる。それを見た龍牙くんは剣を、異月もヴァルスをソードモードへ変形させ構えた。

大斧を持った1人は唇を舐めながら龍牙くん目掛け振り下ろし長刀を持った1人は異月へと斬りかかってくる。

龍牙くんは剣で大斧を受け止めようと考えただが、受け止めきれぬような勢いではないこと気付き横へと飛び大斧をかわした。

「ふん……。君、今を受け止めなくて正解だ」

大斧を持った1人がそう言うなり龍牙くんを追いかけていき大斧を横振りしてきた。

「なんだ！てめえ！？」

龍牙くんはそう言うなり剣を振り下ろし衝撃波を放つ。しかし、そいつは大斧を振り下ろし衝撃波を粉碎した。

「いいねえ！君に決めてよかった……………」

「はあ？？何言ってるやがる！！その前に名前くらい名乗れよ！！」

「これは失礼……………。俺の名は「黄泉<sup>よみ</sup>」」

そいつはフードを下ろしながら名前を名乗ったと同時に龍牙くん目掛け走り出す。龍牙くんも黄泉へと走り出した。

龍牙くんが黄泉に攻撃を仕掛けられた頃、異月は長刀持ちの攻撃を受け止めていた。

「何するのよ！？行き成り！！」

「やっぱり、似てるわね」

「似てるって何がよ？」

異月が言い返すと長刀持ちは後ろにステップしフードを下ろす。それを見た異月は驚きだした。

「うそ！？お兄ちゃんと同じ顔……………」

「同じなのは当たり前よ。だって、あなたのお兄さんの細胞から作られたんだから」

「何を言ってるの、あなた？お兄ちゃんならあそこに居るもの！！それよりも、名前くらい名乗りなよ！！」

異月はそう言いながら風夜の方を指さした。すると、長刀持ちはクスと笑い出した。

「あいつもお兄さんって事には間違いないわねえ。まあ、いいわあ。真実を教える義理は無いから……………」

「さっきから意味の解らない事ばかり言わないでよ！！」

2人は言い終えると武器を構え走り寄って行く。

「わたしくしの名は「神樂<sup>かぐら</sup>よ」

「名乗ってくれて、ありがと！！私は異月よ！！」

2人は名前を名乗りながら斬り合いを始めた。

そして、残された風夜は相手のリーダーを睨んでいると、リーダーが「フン」と笑いながら話かけてきた。

「久しぶりだな・・・・・・・・。レプリカ」

「久しぶり？何を言ってるんだ？」

「覚えてないのかい？僕だよ、君の親さ」

「親？まさか・・・・・・・・オリジナルなのか！？」

「そうさ！オリジナルの風夜さあ！！」

オリジナルは風夜に言い返すと指を鳴らすポーズをとる。それを見た風夜も指を鳴らすポーズをとる。2人は同じポーズをとりながら動かずにいる。

「（クソオ、なんだよ！？この威圧感・・・・・・・・）」

「どうしたんだ？レプリカ？かかって来ないんなら、こっちから行くよ！！！」

オリジナルは、先手必勝といわんばかりに指を鳴らし鎌鼬を放つ。  
風夜も鎌鼬を放ち相殺させた。

「良いできたよ！レプリカ！！風香が連れ戻したのがわかるよ  
！！」

「何を言ってるんだ？オリジナル！！」

風夜はオリジナルに言い返すと、鎌鼬をオリジナルへと連射するが  
オリジナルも鎌鼬を連射し相殺させた。それから風夜とオリジナル  
は睨みあったまま動かなくなった。

こうして、風夜、龍牙くん、異月の3人はそれぞれの相手と戦闘を  
開始したのであった。

## 第48話（後書き）

次回は、龍牙くんVS黄泉です。

## 第49話

大斧を構えながら龍牙くんへと走って行く黄泉は笑みを浮かべていた。

「これでもくらえ！剣使い！！」

黄泉は大斧を横振りする、だが龍牙くんは大斧の下へと潜り込み黄泉に斬りかかった瞬間。黄泉が白井の姿へと変わった。

「え！？」

龍牙くんは剣を途中で止めると白井（黄泉）はニヤアと笑い大斧を振り下ろした。

「クソオ！！」

大斧が振り下ろされてくるのが見えた龍牙くんは足のベクトルを変え横に移動し白井（黄泉）との距離をとった。

「なんで、黒子の姿してるんだ！？」

「不思議ですの？折角なので教えてさしあげますの。これがわたくしの能力「細胞変化」ですの。わたくしの肌に触れた人と同じ声と姿になれますのよ」

「てめえ！いつ黒子に触れやがった！！」

「いつ触れたかですの？そんなの道を歩いていれば簡単に触れる事

が出来ますのよ。それに、わたくし達が何も調べずに現れるとでも思ってたんですの?」

「それもそうだよな!」

龍牙くんは剣を構えながら足のベクトルをかえ地面を蹴り黄泉へと近づき斬りかかる。だが黄泉の姿が白井であるため斬るのをためらってしまふ。

「どうしたんですの? さっきより動きが鈍くなってますわよ!」

黄泉は大斧を横振りしてきた。しかも、龍牙くんでもかわせるか解らないタイミングであった。

「くう!」

龍牙くんは回避するよりも防御をする方が速いと判断し剣で斧を受け止めた。だが、黄泉のパワーは予想より上で受け止めた龍牙くんは吹き飛ばされ公園の壁に叩きつけられ地面へと倒れこんだ。

「グファ!」

「あらら? どうしちゃったんですの?」

「(クソオ。黒子と同じ声、同じ喋り方、同じ姿しやがって、やりづらいじゃねえかよ!)」

龍牙くんは剣を杖代わりにしながら立ち上がると、黄泉は白井の声で笑いながら斧を構え走ってくる。

「あははは！！これで終わりですよ！！！」

黄泉は渾身の力を込め斧を振り下ろした、すると龍牙くんの居た場所を中心にクレータが出来た。

「これで終わりですわね……………」

黄泉は龍牙くんを倒した物と思い斧を肩にかけオリジナルが居る場所に向かい歩き出す。すると、別の所から龍牙くんの声が聞こえた。

「まだ終わっちゃいねんだよお！！！」

黄泉が声がする方へ振り向くと赤い衝撃波が飛んでくるのが見え斧でガードをした瞬間、自分の後ろから女の声が聞こえた。

「あら？後ろがスキだらけですよ」

「なあ！？」

黄泉が後ろを見るの、そこには本物の白井が立っており、その顔は怒りで満ちた表情をしていた。

「よくも、わたくしの夫にやりたい放題やってくれましたわねえ？」

白井はそう言うなり、黄泉の持っていた斧をレポートさせたのち龍牙くんの放った赤い衝撃波へと蹴り飛ばした。黄泉は白井の蹴りと龍牙くんの赤い衝撃波をくらいその場に倒れ込み気を失った。

「ふう…………。大丈夫ですよ？龍牙？」

「ああ……。助かったよ。黒子」

龍牙くんは白井の肩を借り異月と風夜の方を見ながら呟いた。

「速く、手助けに行かないと……………」

龍牙くんの言葉を聞いた白井は龍牙くんの顔を見ながら言いかえした。

「大丈夫ですわよ。風夜さんに異月の所にも助っ人がいますわ。だから、傷の応急処置をしますわよ」

それから、龍牙くんは白井に傷の応急処置をしてもらったのであった。

## 第49話（後書き）

次回は異月VS神楽です。

## 第50話（前書き）

お待ちせしました。なんとか書けたので読んで下さい。

## 第50話

神楽は異月に対して斬撃を放っていた。

「クッ……。（なんてスピードなの！？）」

「どうしたの？さっきから防いでばかりじゃない！」

神楽は不気味な笑みを浮かべながら斬りつけている、異月は神楽の斬撃に耐え切れずに吹き飛ばされる。

「キヤア！！！！」

異月は地面を勢いよく転がり止った所に神楽が近づいてくる。

「あなた、そんなで私と張り合うつもりでいたの？これじゃ、能力を使う前に終わりそうね……」

「舐めたいですよ……」

異月はヴァルスを杖のかわりにし立ち上がると「サンダーブレイク」と書かれたカードを取り出しバツクルへ入れ叩いた。すると、刀身から放電を始めると異月は神楽目掛け走りだした。

「あなたがスピードで来るなら、私は力で捻じ伏せるだけよ！」

「やれるものならやってみなさいよ！！」

神楽も異月へと走りだし異月のソードと神楽の長刀が交わった瞬間、

神楽は吹き飛ばされた。

「どうよ！！私の力は！！」

異月は神楽へと言い放つのを聞いた神楽は笑いながら立ち上がった。  
きた。

「クククク……………。ごめんなさい、私、あなたの事甘く見  
すぎてたわ」

神楽が立ち上がり長刀を異月へと向けてくると、長刀から青い電撃  
がバッチバッチと音を立てながら現れた。

「え！？なんで！！！？」

「これが私の能力「オウム返し」なのよ」

神楽はそう言うなり異月へと長刀を振り下ろすと電撃の波動が放た  
れた。

「キャア！？」

異月は横へと飛び神楽から放たれた電撃を避け、ヴァルスをガンモ  
ードへとチェンジさせ神楽へと発砲するも神楽は弾丸を全て長刀で  
防いだ。

「そんな……………。だったら、こっちにだって手があるんだか  
ら！！」

異月は無線のスイッチを入れ話し出した。

「眞姫那ちゃん！聞こえる？」

『聞こえてるよ！あれ、やるのね？』

「うん。お願い！！」

『わかったわ！じゃやるよ……。演算代行……。』

眞姫那は自身の能力を発動させると倒れ込むと、意識は異月の中へと入り込んだ。

『異月ちゃん、準備できたわ。でも、今回はフルでやるから制限時間付きだからね』

「わかったわ！時間内に倒すわ！」

異月は1枚のカードを取り出しヴァクルへと入れ叩いた。

「行くわよ！！私たちの超必殺技。クロスインパクト！！」

異月は神楽の足元へと弾丸を連射させ土煙を立たせる。

「何が超必殺技よ！こんな目くらまし！！」

神楽は異月が正面から来るものと思い目の前の土煙を吹き飛ばす、そこには異月の姿は無かった。

「どこ行つたの！？」

「「私たちは、こつちよ!!」」

神楽の後ろには異月は電撃が宿ったソードで斬りかかってくる、神楽は振り向き防ぐ。

「防がれるのは計算済みなのよ!!」

異月は神楽を通り越す瞬間にヴァルスをソードモードからガンモードへと変えレールガンを発射できるように電撃を溜めていた。

「これで終わりよ!!」

その瞬間、異月は神楽へとレールガンを発射し神楽に直撃した。

「なんとか、やったんだよね……」

『たぶんね。異月？そろそろタイムアップよ』

「うん」

眞姫那の演算代行フルバージョンの時間切れになり通常の異月へと戻り神楽の居た場所を見ると土煙がたちこめている中から、ボロボロになった神楽が歩いてくるのが見えた。

「うそ……」

異月は呆然と見ていた。

「あれは、さすがに返せなかったわ……。でも、あなた限界みたいね!!」

神楽は異月へと長刀を構え近寄ってこようとした瞬間、どこからか電撃が飛んできた。

「ちよつと、アンタ！！私の後輩にナニしようとしてくれているわけえ??」

異月と神楽は声のする方を見ると、そこには御坂美琴が腕を組みながら立っていた。

「なんで！？常盤台のエースがここにいるんだ」

神楽は何かヤバイモノでも見ているような表情をしていた。

「異月！！こんな奴に負けるんじゃないわよ！！アンタは「常盤台のエース」になるんでしょ??」

「はい！！すいません！！御坂先輩！！！」

「まあ、いいわぁ……。異月、あれやるわよ！！」

美琴の台詞を聞いた異月は美琴のもとへと近づきヴァルス（ガンモード）を構えるのと同時に美琴はコインをポケットから取り出し親指で空へと弾き飛ばす。

「ちよ！??まさか！？あの2人！？」

神楽は異月と美琴のやろうとしている事がわかったらしく自分の能力「オウム返し」を発動させようと長刀をかまえる。

「そんなので防げるわけないでしょ！！！！くらえ！！！！ダブル  
レールガン！！！！」

異月と美琴が放ったレールガンは徐々に1つへとなり神楽へと飛んで行く、神楽は能力を発動させるが返すことが出来ず吹き飛ばされ  
気を失った。

それを見た異月は地面へと倒れ込みこう言った。

「はあああ、電池切れです……………」

## 第50話（後書き）

レブリカ オリジナル  
次回は風夜VS風夜です。

## 第51話（前書き）

今回、ちょっと、ややこしくなっています。

レブリカ オリジナル  
風夜と風夜の戦いなので………。

読みづらいですが、読んで下さい。

## 第51話

風夜とオリジナルは睨みあったまま動かないでいると風夜の額から一滴の汗が流れ落ちた地面へと落ちた瞬間、2人は同時に指を鳴らし鎌鼬を放ちだした。

「レプリカ!!こっちに帰って来い!!今ならまだ間に合うぞ!」

「誰が戻るものかあ!」

「そうかよ!!なら、消えろ・・・」

2人は互い鎌鼬を放ち合うが全てが相殺しあった。

「くっう!!」

「どうしたあ!レプリカ!?お前の力はそんな物かあ?」

「チィ!!なめるなあ!!」

風夜は再度指を鳴らし手の平を上にと風が集まりだし球状になると、オリジナルへと走り近づいていった。

「これでも喰らええ!!疾風撃!!」

「やっぱりなあ!お前の考える事なんて・・・」

オリジナルも指を鳴らし、手の平へと風の玉を作り出し風夜へと走りだす。そして、互いの疾風撃をぶつけ合った瞬間、風夜の疾風撃

が打ち消されオリジナルの疾風撃が風夜の腹部へと当たると風夜は吹き飛ばされた。

「グハアアアア!!」

吹き飛ばされた風夜は公園の外壁へと叩きつけられ地面へと倒れ込み口から血を吐き出した。

「ゴフオ……………」

「ハアア……………。レプリカの力なんてこんなものか…………。風香はいつたい、こいつに何を期待してるんだか??」

オリジナルは溜め息をつきながら近づいて行こうとした時、炎と氷の波動が飛んで来るのが見えた。オリジナルは指を鳴らし鎌鼬を放ち相殺させる。

「なんだ？凍夜と緋炎か？」

オリジナル（風夜）は風夜が倒れている外壁の上を見ると凍夜と緋炎の姿があった。2人は外壁から降り風夜へと声をかけた。

「大丈夫？風夜？」

2人の声を聞いた風夜は苦しそうな声で答えながら起き上がってきた。

「大丈夫なわけあるかよ……………」

「そうよね…………。オリジナル（風夜）の疾風撃を喰らったん

だものね」

オリジナル（風夜）は凍夜と緋炎、風夜の3人を見るなり笑いながら話し出した。

「これで、お前達を探す手間が省けたよ」

凍夜と緋炎は目に涙を浮かべながら言い返した。

「オリジナル……」

「オリジナル！もう止めてよ！！こんな事！！あなたが風香に手を貸すことなんてないのよ！！」

オリジナル（風夜）は凍夜と緋炎の言葉を聞くと、さらに笑いながら答えてきた。

「風香のやっている人体実験でレベル6になれるんだ。手を貸さずにいられるかよ！！僕をレベル3止まりにしか出来ないような学園都市なんかより、こっちの方がどれだけ可能性があるのか！！」

凍夜と緋炎は涙を流しながら炎と氷の刀を出すとオリジナル（風夜）へと斬りかかった。

「オリジナル！！あなた変わったわね！！」

「うん、変わった！」

「変わりもするさあ！！実験体が3人同時に抜けたおかげで僕がレベル6になれるのが遅れるんだからなあ！！」

オリジナル（風夜）は2人に言い返すと両手に螺旋丸を作り出すと、凍夜と緋炎の斬撃をかわし2人へと螺旋丸を叩きつけると緋炎と凍夜は吹き飛ばされる。その姿を見た風夜はよろけながらオリジナル（風夜）へと向かおうとすると、目の前に龍牙くんと黒子と美琴の3人が現れた。

「風夜さん。そんな体じゃアイツと戦えないでしょ？」

「そうですねよ？」

「そうよ。アイツの話聞いてたら、頭に來たから手出させてもらうわよー！」

3人は風夜の言葉を聞く前に、黒子はオリジナル（風夜）の後ろへとテレポートしドロップキックを喰らわそうとしたがオリジナルはわかっていたかの様に黒子の脇腹へと裏拳を叩き込もうとしたが黒子はテレポートし風夜の後ろに帰ってきたのを見た龍牙くんは剣を構え足のベクトルを変えオリジナル（風夜）へと猛スピードで近づいて行き斬りかかるとオリジナルの手には、すでに螺旋丸が作られており龍牙くんの剣へと叩きつけてきた。オリジナルは龍牙くんを風夜の居る所まで吹き飛ばすが龍牙くんは上手く着地し風夜へと話し掛けてきた。

「風夜さん。血貰いますよ！」

「龍牙くん！！同時に仕掛けるわよ！！」

「はい！御坂さん！！」

龍牙くんは風夜の血を手につけ剣へと付け替えると剣を振り下ろすと衝撃波と鎌鼬が合体した物が放たれたと同時に、美琴もコインを弾きレールガンをオリジナル目掛け打ち出した。2人の同時攻撃を見たオリジナル（風夜）は鎌鼬で打ち消すのは無理と判断し目の前に風の層を作り受け止めるが吹き飛ばされ地面を転がって行った。

「どうだよ！！俺の衝撃波は？」

「もう1発喰らってみる？私のレールガン？？って聞こえてるわけないか」

2人は吹き飛ばされたオリジナルの風夜の方を見ながら言い放った。すると土煙の向こうから笑い声が聞こえてきた。

「クククク。やっぱり、レベル6になった少年とレベル5の少女の2人はそのレプリカとは違うね」

龍牙くんと美琴は土煙の向こうに傷だらけの風夜オリジナルが立ち上がっているのが見えると驚いた。

「な、なんで!？」

「あれを喰らって立てるなんて……」

2人が驚いているのを見た風夜オリジナルは突然、大声を出した。

「おい！！風香！！聞こえてるか！！あれ、よこせ！！」

そう響きわたると何処からか風香が現れてきた、その手にはUSBメモリーみたいな物が握られていた。

「あれってこれの事かしら？」

「そうだよ！！完成してるんだろ？能力体結晶の改良版がよ！！」

「ええ、出来てるわよ。使ってみる？？」

風香はそう言うとUSBメモリーをオリジナルの風夜へと手渡すと、オリジナルの風夜はUSBメモリーに付いているボタンを押すと「レベル6」と音声that響きわると、自分の首元へと差し込むとUSBメモリーは体の中へと入っていくと、風夜の周りに風が吹き荒れだした。

「これがレベル6かあ」

オリジナル  
風夜は呟くと龍牙くんと美琴の方を見るなり鎌鼬を放つ。

「なんだ！？あの鎌鼬！！今までのと違うぞ！！」

「そうね・・・」

2人は横に飛び鎌鼬を避ける、しかし、避けたはずの鎌鼬が向きを変えてきた。2人はとっさにガードするが鎌鼬の勢いに負け吹き飛ばされた。それを見た風夜は震えるような声を出しながら黒子に話し掛けた。

「（龍牙くんとビリビリ姫がかなわないなんて・・・）し、白井さん・・・。僕から離れて・・・」

「で、でも・・・」

「いいから早く!!」

黒子は風夜の言う通りテレポートし消える。それを見た風夜は笑いながら近づいてくる。

「なんだよ？仲間に見捨てられたのかよ？」

「・・・・・・・・」

風夜は頭の中が恐怖で、いっばいになり言い返せないでいると目の前には風夜の姿があり風夜の胸座を右手で掴み上げ左手を振り上げた。それを見た龍牙くん、美琴、黒子、異月、緋炎、凍夜は叫んだ。

「「「「「やめろおおお!!!!」」」」」

「じゃなあ！レプリカ!!」

オリジナルの風夜は5人の叫びを無視し振り上げた左手を振り下ろすと風夜の胸に5本の傷ができ血が吹き出した。そして、掴んでいた右手を離すと風夜は地面へと倒れ込んだ。

## 第52話

地面に倒れこんだ風夜は意識が無くなっていくのを感じていた。

体が冷たくなっていく・・・、それに動かない・・・。

風夜が無くなっていく意識の中で思っていると、頭の中に誰かの声が聞こえてきた。

「なんだ、お前の力はこんなものなのかよ」

「誰だよ・・・。」

「俺か？俺はもう1人のお前さあ」

「もう1人の僕？」

「ああ、そうさ。お前が弱いから俺が目覚ます事になっちまったじゃねかよ」

「僕が弱いから・・・。。なら、お前は強いのか？」

「ああ、強いさあ。お前に見せてやるよ」

もう1人がそう言うのと風夜と入れ替わり表に出てきた時にはオリジナルの風夜が背を向け歩き去ろうとしていた。

「なあ、待てよ・・・。。オリジナル・・・。。決着はまだ付いてないぜえ」

オリジナルの風夜は驚きながら後ろを振り向くと目の色を緑に変えた風夜が立ち上がっていた。

「なあ！？」

「さっきは俺の体を可愛がってくれたなあ。礼を受け取る準備は出来てるんだよなあ」

風夜はオリジナルへと歩き寄って行く姿は殺人鬼が獲物を見つけたかの様だった。その姿を見た風夜は息を飲みながら指を鳴らし鎌鼬を放ってくる。オリジナルが放った鎌鼬が風夜へと当たろうかとした時、風夜は手を前に突き出しオリジナルが放った鎌鼬を受け止める。

「なんだあ？この生温い攻撃はよ」

風夜は受け止めた鎌鼬をオリジナルへと打ち返すのと同時に指を鳴らし自分の鎌鼬を融合させオリジナルへと向かって行く。2つの鎌鼬が合体し向かってくるのを見たオリジナルは受け止めようとはせず鎌鼬を避ける。

「くう！？」

「おいおい。オリジナル？避けるなよ……。てめえも俺みたいに受け返してみろよ」

風夜は呟きながらオリジナルへと近づいてくる。オリジナルは舌を鳴らしながら手の平へと風を球体を作り風夜へと走りだした。

「レプリカ！もう1回、寝てろよ」

「寝てろだあ？てめえが寝てろよ」

風夜は指を鳴らす、すると両手両足に小規模の竜巻を鎧のように作り出しオリジナル目掛け走り出し2人が近づきあつた瞬間。

「疾風撃！！」

「風撃乱舞！！」

オリジナルが風夜へと疾風撃を当てようと手の平を突き出してくるのを風夜は避けオリジナルの顔面へとパンチを叩き込もうとするが避けられる。

「レプリカ？さっきよりも動きいいなあ」

「だろ？表に出ていた俺と今の俺とじゃ違うからなあ。今の俺はてめえを容赦なく殺すかもなあ？」

「上等だあ、レプリカ！！やれるものならやってみろよ！！」

2人は互いの技を繰り出し当てようとするが、なかなか当たらない。

「チィ！！レプリカに分際で！！」

「さつきから、レプリカ、レプリカって五月蠅いんだよ。お前！」

風夜はオリジナルへの足元へと鎌鼬を放ち土煙を立てると同時に走りだし土煙の中へと走りこむ。そして、オリジナルの目の前へと

現れる。

「なんだと!？」

オリジナルは正面からは来ないもの思っただけで背後ばかりに気にしてらしい。そこへ風夜が土煙の中から現れビックリした。すると、自分の顔面へと手が伸びてくるのが見えた。

「なあ!？」

オリジナルの顔面へと手を伸ばしてきて掴んだ風夜はオリジナル押し倒す。

「捕まえたぜ。オリジナル!なあ、さっきのUSBメモリーみたいな俺によこせよ」

「誰がやるか。欲しいなら奪い取ってみろよ」

風夜はオリジナルの返事を聞くなりUSBメモリーを挿した所へと手を伸ばしオリジナルの首元の肉を掴み引き千切れるくらいの力を入れ引っぱ張らした。

「グッファアアア!?!?!」

「あの力は、お前には合わないんだよ?だから、俺が使ってやるんだか遣せよ」

オリジナルへと言い終えると風夜は掴んでいた肉を引き千切ると、USBメモリーが見えた。それを風夜は引っ張り出す。そして、血塗れのUSBメモリーのボタンを押し自分の手首へと押し当てた。

押し当てられたUSBメモリーはオリジナルが使った時の様にメモリーごと体の中へと入っていかずに風夜の体の中へと液体らしきものを流し込んでいた。

その姿を見ていた風香はクスクスと笑い出した。

「これで、やっと、念願のレベル6が出来る……」

風香が笑いながら風夜の姿を見てるとメモリーの中身が全てなくなるのが見えると更に笑い出した。すると風夜の声が聞こえてきた。

「うるせえぞ。クソ女……」

「五月蠅い？それは失礼、でもねえ、あなたをレベル6に出来たんですもの嬉しくてね」

風夜は風香を睨みつけながら歩き出した。

「俺をレベル6にしてくれた事には感謝してるぜ。だから、てめえにレベル6の力を試させてもらうぞ」

風香へと走り出し指を鳴らそうとした瞬間、風香が目の前に現れ蹴り飛ばされると同時に風夜は気を失った所へ龍牙くんが走りよってきた。

「君、風夜が目覚めたら伝えてくれるかしら？その力、大事に使いなさいって」

「ああ……」

「（大事に使ってくれなきゃ、私の物にならなくなっちゃうからね）

」

風香そう言い残すと首元から血を流したオリジナルを連れ消えて行った。そして風夜は龍牙くん達に連れられ病院へと運ばれたて行った。

## 第52話（後書き）

風夜がまさかの二重人格です・・・。

感想、お願いします！！

### 第53話（前書き）

今回の話の途中から魔術編へ入ります。

### 第53話

龍牙くん達に連れられ病院へと運び込まれた風夜を見たカエル顔の先生は慌てながら手術室へと運ぶように指示をだした後、龍牙くんと美琴に聞いてきた。

「こんな傷、見るの初めてだよ？ いったい、何があったんだい？」

「ええ、ちよつと狂科学者とオリジナルとか言う人とやりあったもので……」

「狂科学者ねえ……。その人って鷹野風香って名前かい？」

「はい……」

「やっぱり……」

「知ってるんですか？ 先生？」

龍牙くんと美琴は冥土返しへと近づいてきた。

「知っているもなにも、非人道的な人体実験しかやらないで有名だよって事は彼は、もしかして!？」

「はい……」

「その科学者に作られたクローンでレベル6を作るために作られたらしんです」

「そうかね……」

「先生、それと風夜さんなんですけど、USBメモリーらしき物を体に押し当てて液体みたいのを注入してたんですけど……」

「USBメモリーねえ？わかった、それについて調べてみるよ」

冥土返しとの話が終わったと同時に勢いよく走って足音が聞こえてきた。龍牙さんと美琴が後ろを振り向くと、そこには初春が涙を流しながら立っていた。

「龍牙さん、御坂さん……」

「初春!？」

「初春さん!？」

「ふ、風夜さんは!？」

初春は涙を拭きながら龍牙さんと美琴に近づいてきた。2人の顔は暗くなり後ろの手術室を見つめると初春の目からは大粒の涙が溢れかえってきた。それから何時間かが過ぎ手術室の扉が開きベットに寝かされた風夜が運び出されてきた、その後ろから先生が出てきた。

「先生!!風夜さんは!!」

初春は誰よりも先に先生の近くへと向かって行つた。

「なんとか、助けることが出来たよ?」

初春は先生の言葉を聞くと大声を出しながら泣き出し床へと崩れ落ちてしまった。

「よかったね、初春さん」

「は、はい・・・」

それから数週間後、風夜の意識が戻ったと初春たちのもとへと連絡が届き風夜の入院している病院へと向かい走り出した初春。

「はあはあ・・・風夜さんの目が覚めたんだ・・・」

初春は呟きながら走っていると目の前から走ってくる少女が2人見え立ち止まって見ていると、その後ろには黒い衣装を着た3人が追いかけて来ているのが見えた。そして、2人の少女は突然、初春の後ろに回りこみ助けを求めてきた。

「助けてください!!」

「ええ!?!」

「お願いします!!」

「うう・・・」

初春は突然の出来事でビクリしていると目の前に黒い衣装を着た3人が立ち止まっていた。それを見た初春は2人の手を引っ張り走り出した。

「あ、あの何処に行くんですか？」

「私の1番頼りになる人の所です！」

初春は追われる身になったにもかかわらづニコニコしながら走っていた。それから、何とか風夜の居る病院へと辿り着き病室へと入ってきた。

「ふ、風夜さん……」

「お？飾利………。どうしたんだ？いたい？」

「た、助けください！！変な人たちに追われてるんです！！」

「変な人たち？」

「は、はい！！」

風夜はベットから立ち上がり病室の窓から外を見てみると黒い衣装を着た3人が居るのが見えた。

「変だな……。ところで飾利。後ろの2人、誰？」

「そう言われれば名前聞いてなかったね。私は初春飾利、でこの人は朝比奈風夜さんです」

「どうも、朝比奈風夜です」

「わ、私は瑠珈<sup>ルカ</sup>・トゥルーリースです」

「わたくしは、聆<sup>レイ</sup>珈・トゥルリーワースですわ」

「2人は姉妹なんですか？」

「「そうですよ」「

2人が姉妹であることを聞いた初春は「いいなあー!!」と目を輝かせていた。

## 第54話

目を輝かせている初春を横目に外を見ている風夜は瑠珈と聆珈へ質問をした。

「なあ？2人は何で追われてるの？」

「それは……」

「その……」

なかなか答えようとはしない2人を見た風夜は溜め息をつきながら2人へと言った。

「言いたくないならいいよ。追われているのは事実なんだし」

風夜はそう言うのと病院服を脱ぎだした。その姿を見た初春は顔を赤くしながらアタフタしている隣では瑠珈と聆珈は俯いていた。

「ふ、風夜さん!？」

「どうした？飾利？」

「どうしたじゃないですよ!？女の子の前で脱ぎださないでください!」

「いめんめん……」

風夜はそう言いながら私服へと着替え、再度3人組の様子を見ると

何やら話をしている、そして3人組の1人が風夜のいる病室へと両手を突き出すと炎の玉が出来るのが見えた。

「アイツ……、まさか!？」

風夜は両手を突き出した1人が何をしようとしているのかが解ると窓を開き右手を前に突き出し風の玉を作り出す。

「飾利! 2人を連れて逃げろ!!」

「え!？」

風夜は初春へ告げると風の玉を放つと同時に初春をお姫様抱っこし瑠珈と聆珈へ走るように言つと病室から走り出した。

「クソ!？なんなんだよ!？いったい!？」

「風夜さん!？降りしてください!？」

「誰が降ろすか! 飾利をお姫様抱っこなんてそうそう出来ないぞ!」

「そ、そんな事ないです!？いつでもさせてあげますよ!!」

風夜と初春が話をしながら走っていると後ろでは瑠珈と聆珈が呆れ顔で付いて来ていた。4人が裏口へと差し掛かると黒い衣装を着た3人の姿が見え風夜が立ち止ると瑠珈と聆珈が慌てて止まると、3人組の1人が話だした。

「焰の御子と漣の御子をこちらへ帰していただきたい」

1人がそう言っている脇から他の2人が瑠珈と聆珈へと近づき片手を掴み引つ張りだす、すると瑠珈と聆珈は抵抗をしながら叫んだ。

「イヤー！離して！！あそこに戻りたくない！！」

「離しなさい！私たちは魔王の復活なんて望んでないの！」

2人の嫌がる姿を見た風夜は初春を降ろし瑠珈と聆珈のもとへ行き2人の手首を掴みながらキレ口調で話し掛ける。

「離せよ。嫌がっているだろ」

「なんだ？邪魔をするな」

1人はそう言うなり手を離すと風夜の胸座を掴んだ瞬間、風夜は疾風撃を叩きこみ吹き飛ばすと、もう1人が詰め寄ってくる。

「なんだ、貴様は！」

「通りすがりの風力使い（エアロシューター）だ。覚えとけ！」

風夜はそう言い返すと左手を突き出し風の玉を作り出し放つと詰め寄ってきた1人へと命中しどこかへと飛んでいった。

「どうだい？新技「風導弾」の味は？っていないか……」

風夜が2人を倒す姿を見た最後の1人が呪文らしきモノを唱えだした。それを見た風夜は不思議そうな顔をしながら見ていると、突然、手を突き出してきた。すると風夜の頬に傷ができ血が垂れてきた。

「さあ、速く焰の御子と漚の御子を渡せ。そうすれば命だけは助けてやる」

「焰の御子だの漚の御子だの、うるさい奴だなあ。それに、嫌がっているのに無理矢理連れて行こうとする奴に、はいそうですかって言って帰すものか！」

風夜はそう言い返すと指を鳴らす体勢へとなる。

「そうかい、なら君には死んでもらおうか」

「上等だ。やってみるよ」

1人は呪文を唱えると手を突き出すと鎌鼬を放ってくる、風夜も指を鳴らし鎌鼬を放った。2つの鎌鼬がぶつかりあうと2人の間に土煙が巻き起こると、瑠珈と聆珈のいる方から叫び声が聞こえた。

「ちよつと！？何をするんですか！？」

「離しなさい！！」

風夜は慌てて土煙を吹き飛ばすと、さっきまで目の前に居た魔術師が初春と聆珈を抱えているのが見えた。

「焰の御子と漚の御子は帰して・・・って、1人違うじゃん！？まあ、いい。漚の御子だけでも帰してもらっぞ」

「ちよつと待てよ！飾利は関係ないだろ！？」

「この少女には生け贄になつて貰おう……」

魔術師は風夜へ告げると初春と聆珈を連れ光の粒子へ変わり消え去つて行つた。

「飾利!!」

風夜は悔しそうな表情を浮かべながら消えて行つた場所を見ていると瑠珈が話し掛けてきた。

「う、ごめんなさい……。巻き込んでしまつて……。…」

「なあ？あいつ何処に行つたかわかる？」

「はい……。…」

「そこへ連れ行つてくれないか……。…」

風夜は瑠珈の方へと振り向くと瑠珈は風夜の黒目が緑色へと変化し鋭くなつた目と見ると怯えるように1歩後ろへと引いた。

「解りました……。でも、あなたと私だけじゃ……。…」

「いいから、連れてけよ。飾利を助けないといけないんだから」

風夜はそう言つたと瑠珈へと近づいていく、すると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「風夜？」

「元気そうだね」

風夜が後ろを振り向くと、緋炎と凍夜が立っていた。

「風夜、話は聞いたし見てたから解ったわ」

「うん」

「あなた、1人じゃシンドイと思うから手伝ってあげるわ」

「うん、家賃代わりに」

2人はそう言っていると風夜の背中を叩き歩きだした。そして、瑠珈へ近づき自己紹介を始めていた。

「私は凍夜よ。よろしくねえ」

「緋炎」

「よろしくお願いします。私は瑠<sup>ル</sup>珈・トゥルーリーワースです」

こうして、風夜、凍夜、緋炎、瑠珈は初春と聆珈を助けへ向かう。

## 第55話

風夜たちは、今、初春と聆珈が連れて行かれたであろう場所へ向かい走っていた。

「なあ、瑠珈？　いったい何処へ向かってるんだ？」

「不良がいつぱい居る場所よ」

「不良がいつぱい居る場所って、第10学区の事か？」

風夜が瑠珈へ聞いてみると瑠珈は？を浮かべながら聞き返してきた。

「第10学区？　なにそれ？」

「……………もしかして、瑠珈はココの関係者じゃないのか？」

「う、うん。私と聆珈はココの外から連れてこられて、この場所に監禁されてたの」

「連れてこられたねえ。それに魔王の復活がどうのこうのって言うてただけ？」

「それなんだけど、魔王ミユールの精神を蘇えらせて器に最適な人へに乗り移らせるのよ」

「なあ、もしかして飾利を器に使わないかな？」

「……………」

瑠珈が答えないのを見た風夜は血相を変え走るスピードを上げる。  
そして、第10学区へと辿り着くなり異変を感じた。

「静か過ぎる………」

「そうね。いつもならスキルアウトがイチャモンつけてくるのに」

風夜と凍夜が話していると目の前に工場の跡地が見えると瑠珈が止まった。

「ここよ。適した器と判断された人はココへ集められるの」

瑠珈の言葉を聞いた風夜は工場の門へと近づいて行くと指を鳴らしカギを切断し中へと入ると黒いマントをはおった2人と初春と聆珈を連れ去った者が現れた。

「よお！僕の嫁さんと聆珈さんを帰してもらいにきた」

風夜はそう言うなり指を鳴らし鎌鼬を放った。すると3人は鎌鼬をかわし風夜へと突進してくると、フードが捲れ顔が見えた。3人は女性だった。

風夜は再度、鎌鼬を放つかわされる、そして、突進してきた女性が腕を下から振り上げると衝撃波が放たれると風夜は風導弾を放ち打ち消すと女性は突然笑いながら話し出した。

「あなた、なかなかやるじゃない。気に入ったわ。私の名前はアルクエイドよ」

「僕は朝比奈風夜」

「風夜ねえ。良い名前ね……」

アルクエイドはそう言うと言文を唱えだし右手を上へと突き上げたのち風夜の居る方へと振り下ろすと風夜の作り出す鎌鼬よりも強力な鎌鼬が放たれた。

「風夜くん。これで消えてね」

風夜はアルクエイドの放った鎌鼬を見つめた。

「クウ……（どうする！？かわすか？でもかわせば、瑠珈さんがいる……）」

風夜がかわすか受け止めるか考えていると、突然頭も中に声が聞こえてきた。

（力を貸してやろうか？）

風夜は突然聞こえてきた声にビックリし周りを見渡す。

（ビックリするなよ。俺だよ。もう1人のお前さ）

「（もう1人の僕？）」

（ああ、これで2回目だな）

裏の風夜はそう言うと言の表の風夜と入れ替わると同時にアルクエイドの放った鎌鼬が目と鼻の先まで迫っていた。そして風夜に当たろう

とした瞬間、風夜は指を鳴らすと風夜の背後から巨大な風の玉が飛んできてアルクエイドの鎌鼬を粉碎しアルクエイド目掛け飛んで行く。

「消えるのは、お前だよ。アルクエイドさん」

風夜が呟くと左右から突っ込んでくる2人の1人へ疾風撃を叩き込み、もう1人へは風撃乱舞を喰らわせ気を失わせるとアルクエイドへと目をやると、アルクエイドの姿がなかった。

「さあて、俺は裏へかえるかな……」

裏の風夜はそう言うといれ替わると風夜は急いで工場の中へ入っていくと初春と聆珈が縛られているのが見え駆け寄り縄を解く。

「飾利！怪我ない？」

「大丈夫ですよ」

「よかった。無事で」

風夜は思わず初春へと抱きつくと初春は顔を赤くし気絶してしまった。それから風夜は聆珈へアルクエイドが何処へ行ったか聞いてみると、血相を変え逃げて行ったと言った。

「……アルクエイド側……」

「くう……なんなのあの子は!？」

アルクエイドはそう言いながら走っていると目の前に白衣を着た風香が現れた。

「あなた、魔術師なのよねえ？」

「だとしたら、どうする気？」

「あなたたちのお陰で予定が狂ったのだから消えてくれるかしら？」

風香の目を見たアルクエイドは呪文を唱え鎌鼬を放つ、しかし、風香はアルクエイドの後ろヘレポートし炎と氷が混じりあった大剣でアルクエイドを斬り裂き闇の中へと消えて行った。

## 第55話（後書き）

魔術編を書いてみたんですが難しいです・・・。

読んでみると魔術らしい事、一切出てない気がします。

## 第56話（前書き）

再び科学サイドへ移ります！！

## 第56話

夏休みが終わりに近づいてきた、ある日、風夜は初春に呼び出されは第177支部へとやってきた。そこには険しい顔をした白井と初春、異月、朱裡、莉花がパソコンの画面を見ているのが見えた。

「みんな？どうしたの？険しい顔して？」

「お兄ちゃん！」

「風夜さん！」

初春は風夜の顔を見るなり嬉しそうな顔をしながら近づいてきた。

「風夜さん？これからどうしますか？」

「デートでも行くか？」

「はい！！！」

風夜と初春が2人だけの世界に入っていると風夜の後ろから龍牙くんの声が聞こえてきた。

「あ。風夜さん来てたんですか？」

「こんにちは。龍牙くん」

「初春。デート行くは良いけど気をつけろよ」

「そうですね。初春」

「う、うん」

初春と龍牙さんと白井の3人は何かの深刻そうな顔をしながら話しているのを見た風夜は3人に聞いてみた。

「なあ、いったい何があったんだ？」

風夜が聞くと3人はなお深刻な顔になっていき、しばらく沈黙が続いた後、初春が話し出した。

「あのですね……。最近、ジャッジメントだけが襲われる事件が起きてるんですよ」

「ジャッジメントだけが狙われるねえ」

「はい、襲われた人と目撃者の話によると動物を使っらしんです」

「じゃ、犯人は動物を操れる能力者？」

風夜は初春へ聞き返すと、今度は白井が話し出した。

「それが違うんですの」

「違う？」

「そうですね。その能力者が動物を呼ぶために音などを出さないかわりに、動物の名前みたいのを言っていたらしんですの」

白井が言い終わると龍牙くんが続きを話し出した。

「その名前が「乱紅蓮」<sup>らんぐれん</sup>と「白叢」<sup>びやくそう</sup>らしいです。その2体は突然、姿を現すらしいです」

「なんか、大変な事になってるんだね、で、その能力者の性別や姿は？」

「被害者の記憶が曖昧でハッキリとは解らないんですが、性別は女としか……」

「なるほど、で、僕が呼ばれた理由は飾利の護衛って所でしょ？」

風夜はそう言うのと、みんなが同時に頷きだした。それを見た風夜は頭をかきながら話し出した。

「わかったよ。飾利は僕が守るよ」

風夜が言い切ると初春は顔を赤くしながら手を握ってきた。

「お願いします。風夜さん」

それから風夜と初春は仲良く手を繋ぎながら外へと出て行った。

「飾利？どこに行こうかあ？」

「えっ！とですね。とりあえずですね、クレープ食べにいきましょ！」

2人はクレープを食べるために行き着けの公園のクレープ屋へと向

かい歩き出し、しばらくすると路地裏から悲鳴が聞こえてきた。

「きゃあああああ」

悲鳴を聞いた風夜と初春は顔を見合わせると急いで悲鳴の聞こえた路地へと入って行くと、そこにはジャツジメントに巨大狐（白叡）と片目が3個ずつで両目合わせて6個で尻尾がヘビで体はライオン（乱紅蓮）の動物の2体が襲い掛かっていた。それを見た風夜は指を鳴らし鎌鼬を放つ。

「そこまでだ」

風夜の放った鎌鼬を避けた2体の動物は風夜の方を睨みながら唸り声をあげていた。

「飾利。あの2体は僕が引き付ける。その隙にあの子を連れて逃げる」

「わかりました。風夜さん。気をつけて下さいね」

「ああ」

風夜は2体へと走りだした。すると2体の間から女性らしき姿歩いてくるのが見えた。

「あらら。見つかってしまいましたね」

「君は何者だ？」

「私ですか？名前は桜庭さくらば 秋葉あきはですわ。あなたは？」

「僕は朝比奈風夜」

風夜と秋葉が睨みあっていると、秋葉は右手を前に突き出し命令口調で言い出した。

「さあ！！乱紅蓮、白叡！！あの男を始末しなさい！！」

命令を聞いた乱紅蓮と白叡は風夜へと走り向かってくる。風夜は両手を前に突き出し風の玉を多数作りだし風導弾と叫ぶと放った。

風夜の放った風導弾が2体に当たると、2体は姿を消し別の方向から風夜へ襲ってきた。

「え？なんで？」

風夜は何が起きたか解らない顔をしていると乱紅蓮と白叡は爪を立てた前足を振り降り降ろしてくる。

「くう！？」

「どうしたの？ジャッジメントさん？」

秋葉は風夜がジャッジメントと勘違いをしているらしい。

「ジャッジメント？違うよ。僕は通りすがりの一般人ですけど！！」

「一般人なら、尚更、帰すわけにはいかないわね」

秋葉の言葉を聞いた乱紅蓮と白叡は攻撃を激しくしてくる。風夜は

病み上がりで体がついて来ない中で2体の攻撃をかわしている。

「くそ……体が言う事をきかねえ」

呟いた風夜へ乱紅蓮の攻撃が当たると路地裏から表の道へと吹き飛ばされるとガードレールへと叩きつけられるが風夜は痛みをこらえ路地裏へと戻って行くが、そこには桜庭秋葉と名乗る少女と2体の動物の姿がなかった。

「チィ……。逃げられた」

「風夜さん……………」

「飾利……。犯人の名前がわかったよ。犯人の名前は桜庭秋葉」

「わかりました。とりあえず第177支部へ帰りましょう」

風夜と初春は第177支部へと引き返しバンクで桜庭秋葉について調べてみるとパソコンの画面に出てきた。

桜庭秋葉

能力 マイブル・ファンタズム 空想具現化 レベル2

空想具現化とは、自分の思い描いた物を具現化できる。

風夜は画面を見ながら不思議に思った。

「（あれでレベル2！？そんなはずはないぞ……。あれだけの力

はレベル4から5に匹敵するぞ!？」

## 第57話

風夜はパソコンの画面を見ながら納得のいかない顔をしている。

「（あんなものを2体も具現化できるのにレベル2……。絶対  
に裏があるはず）」

風夜が思っていると、ドアを開けて入ってきた固法が話し掛けてきた。

「どうしたの？風夜くん？」

「いやあ、コイツの能力レベルが変だなっと思ひまして……」

風夜はパソコンの画面を見ながら言い返すと固法は風夜の見ている画面を覗き込みながら聞いてきた。

「この子がどうしたの？」

「犯人なんです。コイツが」

「犯人？」

「はい、ジャッジメントが襲われてる事件ですよ。固法先輩」

「え！？そうなの！？」

「そうですよ！さっき事件を起こす所に出くわしましたよ」

「どうだったの？」

「それがですね……。逃げられちゃいました」

「そう……。それって不味いわね」

「??」

「現場を見たって事は2人の顔を見て覚えてるわよ。きっと……」

初春と風夜は顔を見合わせながら考えると、風夜がまさかと思い聞いてみた。

「次の狙いは、飾利と僕になると言いたいんですか？」

「そうよ。初春さんはちょうどジャッジメントだし風夜くんは犯行を邪魔したんだから、狙ってくるわよ」

「ヤバイですね……」

「……………」

初春は固法の言葉を聞き顔を真っ青のしていると、そこへ龍牙くんと白井が仲良く手を繋ぎながら部屋の中へ入ってきた。

「初春？」

「どうしたんですの？初春？」

「ジャツジメント襲撃事件の犯人に狙われたかもしれませんが．．．」

「それなら心配いらなくて？あなたの隣には王子様がいるじゃないですか」

白井は風夜の方を見ながら話している。

「お、王子様．．．．．」

初春は真っ青だった顔を今度は赤へと変えながらモジモジしながら王子様と呟きながら風夜を見つめていると、龍牙くんがとんでもない事を初春と風夜へと言ってきた。

「初春。しばらく風夜さんの所へ住めばいいんじゃないか？」

それを聞いた初春はさらに顔を赤くさせている所へ、とどめを刺す一言が白井の口から放たれた。

「そのまま朝比奈さんと結婚して夫婦になっちゃいなさいな。って初春！？」

初春は頭から煙を出しながら気を失ってしまった。それから風夜は初春が目覚ますのを待つ事、数時間。風夜は初春の顔をジッと見つめていると初春が小声で呟いていた。

「ふ、風夜さん。今日の晩御飯はカップラーメンですよ．．．．．」

「何を言ってるんだ？飾利は？それに妙に幸せそうな顔してるな」

風夜は呟いていると初春が目覚めます。

「ふ、風夜さん!？」

「おはよう。飾利」

「あ、はい、おはようございます」

「さあ、飾利。家に帰るぞ」

風夜はそう言つと初春に手を差し伸べ立たせると、そのまま手を繋ぎ歩き出した。もちろん風夜の住んでいる寮へと向かいだしていた。初春と風夜は手を繋ぎ夕日に染まる町中を歩いていると、割れた卵を見つめながら泣いている少年がいた。

「貧乏学生にとって貴重なタンパク源が……」

「当麻……。相変わらずだなあ……」

「風夜？俺は、これからどうすればいいんだ？」

「僕に聞かれても困るんだけどな……」

「冷たい事、言わないでくれよ……」

「わかったから、泣くなよ。卵くらいなら分けてやるから!」

風夜は泣きながらしがみ付いてくる当麻へと言つと初春と当麻を連れて寮へと歩きだした。そして、寮へと辿り着くと部屋のドアを開けると、緋炎と凍夜の姿がなかった。

「あれ？緋炎と凍夜は何処に行ったんだ？」

風夜が部屋の中を見渡しているとちゃぶ台の上に手紙があった。

「風夜へ。彼女が泊まりにくるみたいなので邪魔者はしばらく消える事にします。by 緋炎、凍夜」

「・・・・・・・・・・」

「なんか気を使わせちゃったみたいですね・・・・・・・・」

「風夜。卵わけてくれ！！」

風夜は当麻に卵を渡した。それから風夜は晩御飯を作ろうと再び冷蔵庫を見ると材料がない事がわかったので出前を注文することになった。

## 第58話

初春が風夜の寮へと泊る事になった、その日の夜、風夜はなかなか寝付けないでいた。

「飾利と2人だけ……。ヤバイな、これ……………」

風夜がいつも使っているベットで寝ている初春を起こさない様にながらベランダへと出ると月を見た。

「赤い満月……………」

風夜は赤い満月を見ると何か嫌な予感を感じていた、すると目の前の電線に1匹の烏が止まっていた。

「こんな時間に烏が居るのも珍しいな」

風夜が呟きながら見ていると突然、烏の口が動き話しかけてきた。

「ミツケタ……………ジャマシタ……………オトコトオンナ……………ミツケタ……………」

烏はそう言うなり翼を広げ飛んでいってしまった。それから風夜は頭をかきながら部屋へと入っていくと、今度は初春の方から震える声で何かを呟いているのが聞こえた。

「なんでですか？なんでこんな事になっちゃったのですか？」

初春の声を聞くなり風夜は初春の顔を覗きこんで見ると初春は大粒

の涙を流しているのが見え、風夜は初春の手を握りながら思った。

「何か怖い夢でも見てるんだな。それに今の烏は桜庭秋葉のモノだろうっ、なら飾利を守らなきゃ」

風夜は思いながら初春の顔を見ていると初春の顔が安心をしたかのような顔へと変わっていくのを見た風夜は床にベット代わりに集めてある座布団へと横になり寝る事にした。

次の日、初春に起こされた風夜は何故か幸せな気持ちになった。

「（大好きな人に起こされるっていいなあ」

風夜はそれから顔を洗い初春が準備してくれた朝食を食べ、初春に昨日の事を話し出した。

「なあ、飾利？昨日の夜、泣きながら寝てたけど怖い夢でも見てたのか？」

「あ、はい……………」

「どんな夢だったんだ？」

「えっーと、ですね。風夜さんがですね。私をかばって大怪我をしてしまう夢でした……………」

「そうなんだ…………。昨日、桜庭にココに2人がいる事が知られた……………」

「それって……」

「ああ、そのうち仕掛けてくるかも」

2人は深刻な顔へと変わった中、風夜は朝ご飯を食べ終えた後、初春へ一言かけた。

「大丈夫だから、飾利は僕が守るから（この命に代えてでも……）」

「風夜さん……。命までかけないでくださいね……」

風夜は初春の言葉にドキツとしながら着替えに行った。それから、風夜と初春は第177支部へと向かい寮から出て行った。

寮を出た2人は周りを気にしながら歩いていると、突然、何か巨大な生き物の足音が聞こえるのと同時に周りの人が血相を変え逃げ出していた。風夜と初春は足音の聞こえる方へと振り向いて見ると桜庭が作り出し操っていた動物の白叡が低い唸り声を出しながら近づいてくるのが見え、その背中には桜庭秋葉が優雅に座っていた。

「あいつ、本当に仕掛けてきやがった……」

風夜はそう言いながら初春を庇うように前へと1歩出る、それを見た桜庭が白叡の背中から降り話し掛けてきた。

「久しぶりですね。お2人方。この前、邪魔してくれたお礼しにきたわ」

「邪魔って、人を傷つけるような事したのは、あなたじゃないで

すか！」

初春が桜庭へと言い返す、すると桜庭の眼つきが変わり声を荒げながら言い返してきた。

「人を傷つける？違うわあ！！なんの役にも立っていないジャッジメント共に制裁を下してるだけだよ！！私は！！」

桜庭は初春へと言い返し白叡へ命令を下した。

「白叡！！あの女に制裁を！！」

白叡は初春へと走り出す。それを見た風夜は指を鳴らし鎌鼬を放ち白叡の動きを止めた。

「なあ、桜庭さん。なんでジャッジメントを恨んでいるのは知らないけど、僕の大事な人を傷つけ様とするなら僕は全力で貴方を潰すよ」

桜庭は風夜の台詞を聞くなり笑いながら言ってきた。

「やれるモノならやってみなさいよ！！一般人があ！！！！」

「一般人を舐めるなよ」

風夜は指を鳴らすと鎌鼬を桜庭へと放つが桜庭は平然な顔をしながら立っていると、さっきまで桜庭の前に居たはずの白叡が桜庭の横へと現れ鎌鼬へと爪を立てた前足を振り下ろし粉碎した。

「よくやったわ、白叡」

「チィ……。なら、これならどうだ!!」

風夜が手を上に上げると風の玉がたくさん出来ると上げていた手を桜庭へと振り向けると風の玉は桜庭目掛け飛んでいく。

「数でくれば勝てるでも思ってたんですか？白叡!!」

桜庭の合図を見た白叡は深呼吸をするかの様に大量の空気を吸い込むと風夜の方へ口を開けてきた。すると、白叡の口から衝撃波が放たれると、風夜の放った風導弾を全て打ち消した。

「どうしたんですの？」

「くう……。なら……」

風夜は両手両足へと風を纏い桜庭目掛け走り寄った。すると桜庭は不気味な笑みを浮かべた。

「貴方はバカですわね。私が何故、もう1体を見せていないか考えてないでしょ？」

「え？（そう言えばもう1体を見てない……。まさか!?!）」

風夜は慌てて初春の方を見ると、乱紅蓮が襲い掛かろうとするのが見え向きを変え初春の方へと走り出そうとした時、後ろから桜庭の声が聞こえた。

「本当にバカですわね……」

その言葉を聞いた風夜が後ろへ少し視線を向けると白叡の右前足が横振りしてくるのが見えた瞬間、風夜はお店の壁へと叩きつけたれた。

「グファ……………」

風夜は薄れる意識の中、初春の方を見ると初春は自分の心配よりも風夜の心配をしているのが見えた。

「飾利……、人の心配するより自分の心配をしるよ……………」

そう思っていたすると、風夜は妙な鼓動を感じ出した瞬間、風夜は自分の意識が無くなっていた。それを見ていた桜庭は勝ち誇った顔をしていた。

「私の邪魔をするからこうなるんです……………」

桜庭はそう言うと言風夜を通り越し初春へと近づいていった、すると後ろから人が立ち上がる音が聞こえ振り向くと全身に風を纏った風夜が立っていた。すると、何時もの風夜とは違うオーラを出しながら話し出した。

「これで、リミッターが無くなった……………」

それを見た桜庭は初春を襲わせていた乱紅蓮と白叡を呼びつけた。

「そのジャッジメントより先にそいつをやっておしまい！！」

桜庭を台詞を聞いた風夜は、ニヤツと笑いながら言い返した。

「それ以上、飾利に近づいててみる……お前、雑音へと還してやる」

## 第59話

表の風夜が秋葉の攻撃を受け気絶したため裏の風夜が表へと出てきた。

「おい、空想使い。攻撃をしてくるってことは雑音へとなる準備ができたって事だよなあ？」

風夜は秋葉を睨みながら言い放った。だが、秋葉は言い返してはこなかった。

「返事くらいしろよ」

風夜は指を鳴らし秋葉の左右、頭上、真後ろから鎌鼬を作り放った。すると、秋葉は乱紅蓮と白叡のひっかきによる波動で鎌鼬を粉碎させ風夜の方へと目を向ける。

「そんなもの効きませんわよ」

「それはどうかね！」

秋葉は風夜が手の平に風の球体を作り走り近づいてくるのが見た。そして、秋葉がガードしようと乱紅蓮と白叡に命令させようとしたが遅かった。

「遅いんだよ。空想使い……」

「え!？」

風夜は秋葉へと疾風撃を押し当てると秋葉はその場へと右手を地面へとつきしゃがみ込むと、能力を維持できず乱紅蓮と白叡の姿が消えていった。

「さあ、これで攻撃も防御も出来なくなつたぞ」

「それはどうかしら？」

秋葉が言い放つと、再び乱紅蓮を具現化させようとした瞬間、目の前にいた風夜は秋葉の右手を踏みつけると秋葉は苦痛の表情を浮かべる。

「どうした？空想使い？あいつらを具現化させないのか？」

「くう………」

風夜は秋葉の手を踏みつけながら言い放っていた。その姿を見ていた初春は風夜の変わりようを見ながら呆然と見ていた。

「（いつもの風夜さんじゃない……。止めなきゃ……。）」

初春は突然、大声で出した。

「風夜さあああん！！もう止めてください！！」

初春の声を聞いた風夜が初春の方を向くと、風夜の口から思いもよらぬ返事が返ってきた。

「飾利。そこで見てろよ。俺の力を」

「え！？」

風夜は初春へと言い返すと再び秋葉の手を強く踏みつけた時、初春が風夜の異変を見て「はぁ！」と思った。

「まさか！？能力が暴走してるんじゃない？」

初春の勘は当たっていた。表の風夜が気絶しリミッターが無くなった裏の風夜は能力をコントロールできなくなっていた。

「風夜さん！止めてください！！」

初春は風夜へと走りより後ろから抱きついた。

「風夜さん……」

「飾利……」

風夜は初春に抱きつかれた事により表の風夜が目覚まし何とか能力のコントロールが出来るようになり能力の暴走がおさまった。

「飾利？僕はいたい……」

風夜は自分が何をしてたのか覚えていなかった。それをさとした初春は能力が暴走していた事を話さなかった。それから、初春は持っていたバックから手錠を取り出し秋葉の両手へとつけ質問をした。

「あのー、桜庭さん？」

「なによ？」

「あなたの能力はレベル2で具現化できるモノは限られているのに、なんで高レベルじゃなきゃ具現化できない、あの2体を具現化できたんですか？」

「………、それはね」

秋葉は初春の目を反らしながら話し出した。

「わたくしが、乱紅蓮と白叡を具現化できたのは、これのおかげよ……」

秋葉はそう言うと言元にある何かを押し当てたあとを見せるとメモリーが出てくるのが見えた。そして、メモリーが地面へと落ちると初春が拾い上げた。

「これは？」

「それは、スキルアップ能力向上よ……」

「スキルアップ？」

風夜は初春が持っているスキルアップを見るなり秋葉へと詰め寄った。

「それをどこで誰から貰ったんだ!!」

「え？あなたたちと会った場所で科学者みたいな人から貰ったのよ」

「科学者みたいな人……」

風夜は科学者と聞いて顔の表情を変えた。

「（風香・・・・・・・・。あれを学園都市中にばらまきだしたのかよ・・・・）」

風夜がそう思っているとアンチスキルが到着し秋葉を連行していった。それから風夜と初春は一応、病院で傷の手当てをしてもらい、再びデートと繰り出した。

その頃、風夜の部屋へ、とある手紙が届いていた。

## 第59話（後書き）

次回、風夜がジャッジメントになる！？かも・・・。

## 第60話（前書き）

なんとか、60話まで来ました！！

ここまで来れたのも、皆様のおかげです！！

キャラ名を考えて下さった、ゆーたんさん有難うございました

更新が遅いですが、これからも読んで感想や意見をお願いします！  
！

## 第60話

風夜と初春は仲良く手を繋ぎながら楽しそうに歩いていると、目の前から佐天が歩いてくるのが見え初春が声を掛け様とした。すると、何やら男の子と一緒になのに気付いた。

「あつ！佐天さん・・・って、隣にいる人誰ですかね？」

初春は佐天が男の子と一緒にになって歩いているのを見て、ニヤニヤしながら風夜へと話し掛けてきた。

「風夜さん、もしかしたら佐天さんの隣にいる人、彼氏さんですかねえ？」

「そうかもね。って飾利！？」

風夜は初春は佐天に見つからないように隠れ風夜に向かって手招きをしていた。

「風夜さん。早く早く！」

風夜は頭をかきながら初春が隠れた電信柱の影に隠れると、目の前を佐天と見知らぬ男の子が楽しそうに話をしながら通り過ぎていった。それを見ていた初春は佐天の後を付けていこうとした。

「飾利？もしかして後を付けていく気なの？」

「はい！」

初春は風夜の質問に対して力強く答えると佐天の後を追いかけた。そして、2人の後を付けていた風夜は佐天の彼氏であるう男が、こつちをチラチラ見ていることに気が付いた。

「??（なんだ？やたらとこつちを見るなあ？」

風夜が考えていると佐天と男は路地を曲がっていった。それを見た初春は風夜の手を引っ張りながら路地へと向かい曲がる。

「きゃあ……」

「うーいーはーるー!!」

「え？」

初春は路地を曲がった途端に人にぶつかると同時に佐天の声が聞こえてきたのビクリしていた。

「初春と風夜さん？なんでココにいるのかなあ??」

「え？いや、風夜さんとデートをしていたら佐天さんの姿が見えたので……」

「右に同じです……」

初春と風夜は佐天の顔を見ながらオロオロしている所へ男の子が話し掛けてきた。

「涙子？その子と隣の人、誰？」

声のする方を見ると見知らぬ男の子が立っていた。

「珂楠<sup>かなん</sup> くん。頭に花飾りを載せている子が初春飾利、私の親友で、隣にいるのは初春の彼氏の朝比奈風夜さんよ」

「はじめまして、初春飾利です」

「どうも、朝比奈風夜です」

「初春さん、朝比奈さん。はじめまして、冬針<sup>ふゆばり</sup> 珂楠<sup>かなん</sup> です」

自己紹介が終わった後、初春は佐天へと近づいていき何かコソコソと話し出しているのを横目にで見ながら風夜は珂楠の近づいていき話し掛けた。

「はじめまして、珂楠くん」

「はじめまして・・・」

風夜と珂楠は挨拶をした後、何を話せばいいのか解らず黙っていると珂楠が質問をしてきた。

「風夜さんの能力って何ですか？」

「僕の能力は風力使い（エアロシューター）だよ。珂楠くんは？」

「僕は・・・」

珂楠の能力の事を話そうとした瞬間、佐天と初春がニコニコしながら近寄ってきた。

「どうしたの？2人とも？」

「あー、これからダブルデートにいきませんか？」

それを聞いた風夜と珂楠は顔を見合わせたのち頷いた。

それから、風夜& a m p ; 初春と珂楠& a m p ; 佐天のペアによるダブルデートが始まった。

## 第61話

「風夜さん！この服、かわいくないですかあ！」

「珂楠くん！どう？この服？」

初春、佐天、風夜、珂楠はセブンスミストへとやってきていた。

「涙子。似合ってるよ！」

「（懐かしいなあ……）」

風夜は初春へと返事をかえさずに周りを見渡しながら思っていた。すると、初春が話し掛けてきた。

「風夜さん？聞いてますか？」

「あ、飾利？どうした？」

「どうした？じゃないですよー！」

初春は頬を膨らませ、プンプンに怒っている初春をなだめるのに必死になっている所に珂楠と佐天が誰かと話しているのが聞こえた。

「龍牙くんと白井さんじゃないかあ！」

「あ！本当だあ！」

「おー！！珂楠と佐天じゃん！」

「お2人もデートなの？」

そう珂楠と佐天は龍牙くんと白井が来ている事に気が付き話し掛けていた。

「なあ？珂楠、佐天。後ろの2人は何をやってるんだ？」

「風夜さんと初春さんは夫婦喧嘩の真っ最中です」

「初春と朝比奈さんの2人も相変わらずですわね・・・」

「そうですねえ・・・」

龍牙くんと珂楠は苦笑いをし、白井と佐天は呆れ顔をしばから風夜と初春を見ているのに気が付いた風夜は初春への肩を叩き4人がこつちを見ているのを教えた。

「飾利。後ろ見てみ」

「え？」

「初春と風夜さんも相変わらずですね」

「ですわね」

「虎王さんに白井さん！？」

「あははは・・・、恥ずかしい所見せちゃったなあ・・・」

風夜と初春は龍牙くんと白井へと言うと顔を赤くしながら目をそらした。それから、風夜と初春は仲直りをし皆で公園へと行く事になった。

「そう言えば、龍牙くんと白井さんは珂楠くんと知り合いだったんだね」

「そうなんですよ、珂楠が不良に絡まれてる所を俺と黒子で助けたのが出会いなんです」

「そうですわね。今、思えば冬針さんは何で能力を使わなかったんですの？」

「ギクツ!？」

珂楠は白井の言葉を聞き汗をかきながら目をそらすと、初春が何かを思い出した顔をしながら珂楠の方を見る。

「もしかして、珂楠さんの通り名って「蒼い稲妻の六爪流」ですよね？」

「・・・・・・・・はい」

「やつぱり!？でも、おかしいですね・・・・・・・・。噂では荒れた人らしいんですけど？」

初春の言葉を聞いた珂楠は小声で話し出した。

「僕、能力を発動すると性格が変わるんです・・・・・・・・。」

「そうなんですか」

「通り名に稲妻って入っているって事は珂楠くんの能力は電撃使用って事？」

「はい」

「じゃ、六爪流って言うのはどういう事ですか？」

「それはですね。両手に3本ずつ砂鉄を集めて作った刀を指の間に持っている所から付いたんだと思います」

「そうですの」

風夜、初春、白井の質問に答えた珂楠は頭をかいた。その姿を見ていた風夜は自分の周りにいる仲間達の顔を見渡した。

「（今、思うと僕の周りにはすごい人が集まってるよなあ。龍牙くん珂楠くん……。最強の牙と爪……。じゃ、僕は？）」

風夜は龍牙くんと珂楠の顔を見た後、自分は2人みたいに何か「最強」と言えるモノがあるのかと考え出してしまった。

「（うー……。思いつかない……。）」

風夜が難しい顔をしていると皆が風夜の顔を覗き込んできた。

「どうしたんですか？風夜さん？」

「どうしたんですか？朝比奈さん？」

「どうしたんですの?」

「風夜さん?」

「風夜さん?」

(上から、初春、佐天、白井、龍牙くん、珂楠の順です)

「みんな!? いやあー、僕は龍牙くんと珂楠くんみたいに「最強」と言えるモノがあるかなあ? って思ってたんだけど」

それを聞いた初春はニコツと笑いながら「風夜さんには「最強の盾(風)」があるじゃないですか!」と言うと、みんなも頷いていた。それから、何故か風夜の寮へと行こうと言う話になり、今、風夜の部屋の中へと入るため鍵をあけようとしたらポストに手紙が入っているのに気が付いた。

「なんだ?」

風夜は手紙を手に取り読んでみた。

「何々、「貴方もジャッジメントになりませんか?」これってジャッジメントになれって事かな?」

手紙の内容を見た初春、白井、龍牙くんは突然、目の色を変え風夜と、何故か珂楠へと迫ってきた。

「風夜さんもジャッジメントになりましょうよ!」

「そうですねよ！！貴方達と龍牙が居れば最強デルタフォースの完成ですわ！！」

「そうですね！！風夜さんに珂楠！！」

風夜と珂楠は互いに顔を見合わせた後、3人を見ながら答えた。

「解ったよ！ジャッジメントになるよ！」

「風夜さん」

「僕もなるよ！」

「珂楠くん」

こうして、風夜と珂楠の2人がジャッジメントになる事になった。

## 第61話（後書き）

次回から、研修編に入ります！！

## 第62話

あれから風夜と珂楠はジャッジメントになるための試験を受け何とかジャッジメントになる事ができ、初春と龍牙くんと同じ第177支部へと配属される事になった。

「まさか、配属先がココになるとは思ってたなかった」

「そうですね」

風夜と珂楠は支部の前に立ち話していた。すると支部の窓から3人の少女が手を振っていた。

「風夜さーーん」

「珂楠くーーん」

「お兄ちゃーーん」

窓から手を振っていたのは初春、佐天、異月だった。それを見た2人は苦笑いしながら手を振り返した。

「あははは。風夜さん、人気ものですね……」

「飾利に異月ちゃん……」

それから、風夜と珂楠は支部の中へと入って行くと、突然クラッカァが鳴る音が聞こえた。

「うわぁ!？」

「なんだ!？」

「風夜さん、冬針さん。合格おめでとつございます!！」

「おめでとつですの」

「おめでとつ!お兄ちゃん!！」

「みんな、ありがとう!」

「ありがとう!！」

風夜と珂楠は照れながら皆へとお礼を言いながら頭を下げると龍牙くんが風夜と珂楠の近くへと寄ってくるなり右手を突き出してきた。

「風夜さんに珂楠。これからは同じ支部の仲間としてよろしく願います」

「こちらこそ、龍牙くん」

「龍牙くん。よろしく!」

3人は握手をした。それから2人のパーティーは夜遅くまで続き、風夜、珂楠、龍牙くんはそれぞれの奥さんを寮まで送っていく事にした。

風夜は初春と暗くなつた道を歩いていると、スキルアウトが女の子5人を取り囲み強引に連れて行くとしてるのが見えた。

「風夜さん！！ジャツジメントとしての初仕事ですよ！！」

「あ、うん」

風夜は初春に背中を押されながら5人の少女たちのもとへと向かい助けに入った。

「なあ？いいだろ？」

「良い所に連れて行ってやるからよお！！」

スキルアウトがツインテールの少女の手首を掴んだ瞬間、風夜が話し掛けた。

「おい？その辺でやめておけよ？」

「アア？誰だ？テメエ？？」

「通りすがりのジャツジメントだ！覚えとけ！！」

風夜はスキルアウトへと言い放つ、すると、スキルアウトたちは風夜へと近寄ってくるなり殴りかかってきた。

「はあああ。大人しく引いてくれれば怪我しなくてすんだのに・・・」

風夜はそう言うなり指を鳴らし、手の平に風の玉を作り出し近寄ってくる先頭のスキルアウトへと叩きつけ吹き飛ばし、再度、指を鳴らし両手両足へ風を纏わせ次のスキルアウトたちを殴り飛ばしたり

蹴り飛ばした。そして、スキルアウトは残り1人になった。

「さあて、残りは君だけだよ？どうする？」

「くっ……、覚えてるよ！！風使いのジャッジメント！！！」

最後のスキルアウトは、お決まりみたいな捨て台詞を言い放ち逃げ出していった。スキルアウトの背中を見届けた風夜と初春は5人の少女のもとへと近づいて行ていった。

「もう、大丈夫だよ」

「怪我はないですか？」

風夜と初春は話し掛けると、ショートカットで焦茶色、2本の黄色いヘアピンで右の前髪をとめている女の子と、ショートカットに薄茶色の髪でカチューシャをした女の子が返事を返してくれた。

「危ない所を助けていただき、ありがとうございます」

「いやあー、本当、助かったよ」

2人が風夜と初春へ返事を返していると、後ろから、つやのある長い黒髪を垂らし前髪は姬カットにしている女の子、眉毛がともたく、天然パーマのクリーム色の髪をロングヘアにしている女の子、小柄な体格で黒髪のロングツインテールの女の子が隠れる様になっていたので、カチューシャをした女の子が3人の名前を呼び前にだしてきた。

「ほら、漣、ムギ、梓。お礼ぐらいしろよ！」

「律！！解ってるから、押すな！！」

「そうですよ！！律先輩！！」

「あらあら」

律により前に出された3人は風夜と初春へお礼を言い後ろへと下がっていった。それから自己紹介を شدした。

「私は、平沢 唯だよ。よろしくねえ！」

「田井中 律。よろしく！」

「秋山 澪。よろしなあ」

「中野 梓です」

「琴吹 紬でえす。」

5人の自己紹介が終わるなり、唯は風夜の顔を見つめながら聞いてきた。

「もしかして、風ちゃん？」

「え？」

「やっぱり、そうだ！私だよ、隣りに住んでいた幼馴染の唯だよ！」

唯はそう言つと風夜へと抱き付いてきた。

「えへへへ、風ちゃんだあ」

風夜は抱き付いてきた唯を離し、記憶喪失で覚えていない事を話した。もちろん、クローンである事は話してはいないです。

「そうなんだあ（シヨボーン）」

「平沢さん……………ごめんね……………」

「いいの。記憶が無くなっても風ちゃんは居るから」

「平沢さん……………」

「平沢さんじゃなくて、唯だよ！風ちゃんはそうやって呼んでくれてたよ！」

「わかったよ。唯」

唯と風夜が2人だけの世界に入っていると、風夜の後ろから、とんでもない威圧感を感じ後ろを振り返って見ると、そこには女の子じや絶対に出したりしない様な黒いオーラを出している初春がいた。

「風夜さん？私のこと、忘れてましたよね？」

「飾利……………」

「風ちゃん？この娘、誰？」

「僕の彼女だよ」

「はじめまして、初春 飾利です」

初春の自己紹介が終ったと同時に、突然、唯が泣き出してしまった。

「風ちゃん!! 酷いよ……。私を最初の彼女にしてくれるって約束してたのに……」

それを聞いた初春から、さらに黒いオーラを出しながら風夜を見つめていた。

「風夜さん!!」

唯を落ち着かせ初春を静める事に必死になっている風夜と漚、ムギ、梓、律は思った。

「……（すごい、修羅場だ）」「」「」

「（オリジナルめえー、とんでもない約束しやがってえ!!）」

それから風夜は何とか初春を静め、唯には落ち着いてもらう事が出来た。

## 第62話（後書き）

次回は、もしかしたら風夜、珂楠、龍牙くんの3人で戦闘に入るかもしれません！！

感想お願いします！！

## 第63話（前書き）

久しぶりの更新です・・・。

## 第63話

あれから、2人を落ち着かせる事のできた風夜は大きな溜め息を吐きながら初春、唯、律、漑、紬、梓の後ろを歩いていた。

「（とんでもない事になってしまった……………まさかの幼馴染の登場、なんだよ？この展開は…………）」

風夜は心の中で思いながら歩いていると唯が振り向き近寄ってきた。

「風ちゃん。学園祭でライブやるんだけど、良かったら来て欲しいんだけど…………」

「わかったよ」

風夜は笑顔で言い返した。すると、唯は風夜に抱き付いてきた。

「ちょ！？唯！？」

風夜は抱き付いてきた唯を離そうするが、なかなか唯は離れようとしない。

それを見た初春は2人へと近づいてくると風夜と唯の間に割って入った。

「平沢さん！！いい加減にしてください！！風夜さんが困ってるじゃないですか！！」

「あ、ごめんね…。初春さんに風ちゃん……………」

唯はそう言っていると風夜から離れていく。それを見た風夜は唯へと言  
い返した。

「唯。ライブだけど。みんなで行くよ」

それを聞いた唯はニコニコしながら手を振りながら律たちの所へ  
と向かって行った。

それから唯たちと別れた風夜と初春は寮へと向かって歩いている。

「なあ、飾利。ライブだけと一緒に行こうなあ」

風夜の言葉を聞いた初春は元気な声で言い返してきた。

「はい！」

「やっぱり、飾利は怒った顔より笑っている顔の方が良いよ」

初春は顔を赤くし俯いてしまった。それを見た風夜はウンウンと  
頷きながら初春の1歩先を歩き、その後ろを初春が歩いてくる。そ  
して、初春を寮へと送り届け自分の寮へと帰り眠りについた。

そして、次の日。

今、風夜は第177支部内にあるパソコンを睨みつけていた。そこに龍牙さんと珂楠が話し掛けてきた。

「どうしたんですか？風夜さん？」

「何かあったんですか？」

2人の声を聞いた風夜はパソコンに写っている、とある路地裏に設置された監視カメラの動画を見せながら返事を返した。

「なあ？この監視カメラの映像を見てくれる？」

「「あ、はい」」

風夜は2人に言う映像を巻き戻し再生させる。映像の中には不良らしき人影が3つあり路地の奥へと歩いて行く。数分後、さっきと同じであろう不良たちが来た道を帰っていくのがカメラに写っていた。

「これがどうしたんですか？」

珂楠は風夜の顔を見ながら聞いてきた。そこへ龍牙くんが何かに気が付いたらしく呟いた。

「こいつら、何かを持ってる……」

さすが龍牙くんと言わんばかりに風夜が動画を止め話し出した。

「そう、この3人は来るときは手には何も持っていなかった。しかし、帰っていく時には手に何かを持っている……」

風夜はそこまで言うと言った不良たちの手をアップさせた。その手にはUSBメモリーらしき物が握られていた。

「これって、スキルアップ!？」

「ってことは、この路地の先に……」

「ああ、アイツがいる」

「で？風夜さん。どうするんですか？」

「どうするも何も、アイツの研究を叩き潰す」

「なら、話は決まりですね」

龍牙さんと珂楠は頷くと風夜の方へと向いた。

「風夜さん、その路地に行きましょう!」

「そうです。俺達も力を貸しますから!」

2人の顔を見つめながら風夜は呟いた。

「2人とも、ありがと……」

それから、3人は監視カメラに写っていた路地へと向かうため支部から飛び出していった。もちろん、3人とも後の事は考えてませ

ん。  
なるがまま我が道を行くだけです！！

## 第64話

3人は、その中の1人風夜は決心した表情をしながら路地へ向かい走っていた。

「（今度こそ、アイツの研究を潰す……）」

風夜は、心の中で呟きながら走った。そして、アイツ（風香）が居るであろう路地裏の入り口へと辿り着いた。

「着きましたね……」

「そうですね」

「……………」

風夜は珂楠と龍牙くんを置いて路地へと入って行く。

「（ここに、アイツがいる……）」

風夜の頭の中には風香の研究を潰す事しかなかった。

その姿を見た龍牙くんと珂楠は黙って後ろを歩いてくる。

3人は無言で進むと、クスクスと笑い声が聞こえてきた。

「風夜さん……!」

「ああ……………」

「？」

風夜と龍牙くんの表情が変わっていくのを見た珂楠は、声の主が只者ではないことわかったらしい。

奥へと進むと、廃工場へとたどり着くと白衣を着た女の姿が見えた。

「やっぱり、風香。お前か！！」

風夜はそう言うなり指を鳴らし鎌鼬を放った。すると、白衣を着た女性が3人に気付き指を鳴らすと風夜の放った鎌鼬が粉碎される。

「あらあら。不意打ちだなんていけないじゃない……」

「チイ……」

風夜は舌打ちをすると手の平へ風の球体を作り風香目掛け走り出す。こつちへと向かってくる風夜を見た風香はクスクスと笑いながら風夜と同じように風の球体を作り風夜へと放つ。

「人の真似をしやがって！！」

「真似？失礼ね……」

風夜は風香が放った風の球体を弾き風香へと飛び掛ると、風香は余裕な表情をしていた。

「何、余裕そうな表情をしてるんだ！！」

風香はクスクスと笑っているだけで答えようとしなない。だが、手を軽く握るそぶりをした瞬間、手には炎と氷の刀らしきものが現れる。それを見た珂楠は片手を前に突き出した瞬間、指の間に黒い粉が集まりだし刀状へと変化した。

「・・・・・・・・」

珂楠は風夜と風香へと向かうため地面を蹴った。すると、普通ではない速さで向かいだし2人の間へと割り込み砂鉄で作り出した刀で風香の刀を弾き空いている手で風夜の手首を掴み龍牙くんの居る方へと地面を蹴りもどった。

龍牙くんが居る所へと戻るなり風夜は珂楠を睨みながら声を荒げながら言い放った。

「何をするんだ！珂楠！！」

「おい。風力使い、もっとC o o lにこうぜ」

珂楠は風夜の怒鳴り声を聞いても動じないで話を続けた。

「いいか、風力使い。P a r t yは皆で楽しむものだぜ」

珂楠はそう言うつと風夜の方へと目を向けると目は青くなっていた。風夜は珂楠の目を見るなり、何故だか頭に上っていた血が引き冷静になり龍牙くんと珂楠の顔見た。

「風夜さん。頭に血が上るのはわかります。でも、冷静にならないと、アイツには勝てませんよ」

「そうだぜ。風力使い」

「龍牙くん、珂楠……」

風夜は2人を見ると小さく頷き立ち上がった。

「それじゃ、みんなでPartyを始めますか」

風夜の言葉を聞いた2人は頷き風香目掛け走り出す。

最初に仕掛けたのは龍牙くんだった。

「あんたの研究はココまでだ!!」

龍牙くんは剣を抜き斬りかかる。

風香は炎の刀で受け止め弾くと龍牙くんはその勢いを利用し後ろへと飛ぶと龍牙くんの影から珂楠が両手に砂鉄を集めて作った刀を6本持ち斬りかかった。

「HA!!」

風香は珂楠の攻撃を氷の刀で受け流すと炎の刀で斬りかかるうとしたが珂楠は振り向かず走り抜ける。

「（防御しようとしなない？死にたいのか？こいつ？）」

風香が思っていると自分の後ろに人の気配がし振り向くと風夜の姿があった。

「余所見してるなんて余裕だな」

風夜の手には風の球体が作られていた。それを風香へと押し当てると風香は吹き飛ばされた。

「どうだ!!」

「第177支部の」

「最強デルタフォースの」

「」「連携攻撃は!!」「」

3人は吹き飛んだ風香へと言い放った。

「フッフ。貴方達で試すのが1番みたいね……」

砂煙の中から風香の声が聞こえてくると同時にボタンを押す音と「レベル6」と音声聞こえてきた。

「あいつ、まさか!？」

風夜が呟く。すると、風香のまわりに立ち込めていた砂煙が一気に消えた。それを見た龍牙くんが風夜へと聞いてきた。

「風夜さん。もしかして……」

「ああ、自分に使いやがった……」

風香はスキルアップを自分自身に使った。

## 第65話

風夜たちは息を呑み風香を見つめていると、いつもとは違う話の方で話し出した。

「あはははは、この感覚、やっぱり良いわ」

風香はそう言うなり風夜たちを睨みつけると同時にテレポートをした。それを見た3人は互いに背を合わせ周りを見た。

「くっ!？」

「何処から来る？」

「HA!どこから来ようが叩き潰すだけだ!!」

3人が警戒していると、四方八方から炎と氷の槍と鎌鼬が発生し降り注いできた。3人は自分に当たりそうなモノは破壊し回避するすると、どこからか風香の声が聞こえた。

「あれをかわすなんて流石だなあ！」

風香の声が聞こえた瞬間、風夜の後ろに現れた。

「なあ!？」

風香は風夜の背に風の衝撃波を叩き込み吹き飛ばすと再びテレポ―トし龍牙くんの目に前に現れる。

「正面!？」

「ふふふ・・・」

風香はニヤと笑うと炎と氷の刀を振り降ろす、龍牙くんは剣でガードするが勢いに負け吹き飛ばされた。

「みんな!？」

珂楠は風夜と龍牙くんへと声をかけるが反応が無かった。2人が心配になった珂楠はまず龍牙くんのもとへとかけようとした瞬間・

「自分よりも2人も心配?余裕だなあ!!」

「くう!？」

珂楠は声が聞こえた方を向くと珂楠と同じように炎と氷の刀が3本づつ指の間に挟まれている。

「今度は俺の真似かあ!!」

珂楠は言い放つと風香へと斬りかかっているが風香はガードしたのち弾き飛ばす。

「クククク・・・。アハハハハハ!!!!見たか、風夜。これがお前にくれてやろうとした力だあ!!」

風香は風夜が吹き飛んだ方を見ながら言い放った。すると、砂煙の中から風夜の声が聞こえた。

「僕の兄弟達と学園都市の人達を利用して作られた力なんていらない……」

「アア？」

風香は砂煙の中に居る風夜へと睨みつけていると龍牙くんと珂楠の声が聞こえてきた。

「そうですよね。風夜さん」

「よく言っただ、風力使い」

2人の声を聞いた風夜は指を鳴らし、3人の周りにたちこめている砂煙を吹き飛ばすと一気に風香目掛け走り出す。

風夜は手に風の球体を作り龍牙くんは剣に自分の血をつけ珂楠は両手に砂鉄で作った6本の刀を持っている。

「レベル4ごときが強がってるんじゃない……（ズキン）」

風香が3人へ言い放とうとした瞬間、妙な頭痛がし風夜と龍牙くんと珂楠とは違う声が聞こえてきた。

「弟の言うとおりだ……」

「これ以上、お前の言いなりになるつもりは無い……」

「お前に利用される位なら死んだ方がマシよ……」

風香は頭を抑えながら呟きだした。

「クローンごときが、産みの親である私に逆らう気が……」

風香は強くなっていく頭痛にを堪えながら3人の方へと向くと炎の刀で龍牙くんの攻撃をガードしたが炎の刀は真つ二つになり消え去った。

「偽物の力なんて、そんなモンだぜ!!」

次に氷の刀で珂楠へと振り下ろすが六爪流の前では無に等しかった。氷の刀は粉々に砕け散った。

「HA!! さっきまでの勢いはどうしたんだ? 狂科学者さんよお!!」

風香は2人の攻撃により両手に作っていた炎と氷の刀が消えた所に風夜が走りこんできた。

「これでも喰らって、寝てろお!!」

風夜はそう言い放つと風香へと風の球体を押し付けると風香は吹き飛び工場の壁へとぶち当たり動かなくなった。

## 第65話（後書き）

次回で、完結にしようと思います。

## 最終話

あれから、警備員が到着し風香を連行していくのを見届けた3人は念のため病院へと送られ検査を受ける事になった。

「「「はああああ」」」

3人は大きな溜め息を吐きながら搬送されいく。そして、病院へと到着し検査をし終えロビーのソファーに座っていると走って近寄ってくる3人の女の子に気が付いた。

「風夜さああああん!!」

「龍牙!!」

「珂楠くん!!」

そう、3人と言うのは初春、白井、佐天の事です。

「やばあ!?!風夜さん、珂楠。俺はこれで!!」

龍牙くんはそう言うところを3人が走ってくる方とは別の出口へ向かい走っていくが、白井は「逃がしませんわよ!」と言うとテレポートし龍牙くんの前に現れると足を引っ掛け転ばした。

「黒子!!俺、怪我人なんですけど!!!」

「逃げようとする龍牙が悪いんですよ」

龍牙くんと白井を見ている風夜と珂楠は啞然としてしていると2人の後ろに殺気を感じ振り向くと初春と佐天が仁王立ちで立っていた。

「風夜さん？」

「珂楠くん？」

「か、飾利！？」

「る、る、涙子！？」

風夜と珂楠は1歩また1歩と後ろに下がっていきこうとすると誰かに当たったので振り向くと、龍牙くんと連れた白井がこっちを睨みつけながら立っていた。

「お2人方も逃がしませんわよ！！」

「白井さん？」

「落ち着いてください！？」

風夜と珂楠は白井に話し掛けるか聞く耳持たずって感じの白井がレポートし2人の頭にゲンコツを叩き込んだ。

「これは、初春と佐天さんを心配させた罰ですよ！！」

白井のゲンコツを喰らった2人は初春と佐天へと謝りだした。

「ごめんな……。飾利……」

「申し訳ない。涙子」

「風夜さん。もの凄く心配したんですからね」

「私もなんだよ！珂楠くん」

初春と佐天は涙を浮かべながら2人に抱き付いてきた。それから抱きついてきた2人が落ち着くのを待ったのち第177支部へと帰ることにした。

それが、ある意味、恐怖の始まりだった。

第177支部へと帰ってきた風夜、珂楠、龍牙くんの目の前には固法先輩が鬼のような形相で立っていた。

「3人とも！！」

「「「は、はい！！！」」」

「なんの相談もなく行っちゃうのよ！！私だけならともかく、初春さんに佐天さんに白井さんにまで心配かけて！！！」

「「「申し訳ありませんでした」」」

3人はふかぶかと頭を下げると固法先輩は、フツと笑った。

「まあ、いいわ。反省しているみたいだし、これからは何かあったら相談してよね」

固法先輩の怖い顔を見た3人は思った「この人にだけは逆らって

はいけない」と・・・・・・・・。

スキルアップ事件が終結し数十年後。

白井と佐天は、とあるレストランにいた。

「まさか、わたくし達より先に初春が結婚するなんて・・・・・・・・」

「そうですね……。白井さん・・・・・・・・」

2人は風夜と初春の方を見つめていた。

「あはははは」

風夜と初春は顔を赤くしながら苦笑いをしていた。

「まあ、いいですね。お2人ともお幸せにですね」

「それじゃねえ。新婚さん」

佐天と白井はそう言うレストランから出て行ってしまった。それから風夜と飾利は町の中を歩き回りながら今までの出来事を思い出していたのであった。

## 最終話（後書き）

これにて、とある科学の風力使い（エアロシユーター）を完結とさせていただきます。

誤字脱字があつたりしましたが、お付き合いいただきありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5513k/>

---

とある科学の風力使い（エアロシューター）

2010年11月3日19時56分発行